ヨルムンガンド　ChiNaTsu, She Can Stain Her Life.

伯方のお茶

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は、武器商人と旅をすることになった。

原作「ヨルムンガンド」

殺し屋　オーケストラのチナツがココの仲間になるパラレルストーリーです。

ココ・ヘクマティアルの私兵達だけだとチナツが死ぬ未来しか見えないので、オリジナルキャラクターが登場します。

多少無理筋な流れもありますが、よろしくおねがいします。

感想を頂けるとやる気が出るのでぜひお願いします。

目次

第一話 1
第二話 6
第三話 12
第四話 18
第五話 24
第六話 31
第七話 37
第七・五話 46
第八話 54
第九話 59
第十話 67
第十・五話 76
第十一話 112
第十二話 121
第十三話 129
第十四話 137
第十五話 146
第十六話 151

第一話

ホテルの一室でココ・ヘクマティアルが叫ぶ。
「諸君！次の仕事はこれだ！」
いつものメンバーが長机を囲んで座っている。
レームは相変わらずタバコを吹かし、その横ではバルメが心底煙たそうにしている。
トージョ、ワイリ、ウゴは資料に目を通しており、ルツ、マオ、アールはココの方を見ている。
ヨナもココの方を見ている。
「えー、お手元の資料に書いている通り、アフリカG国政府軍へライフル各種、対戦車ランチャー、カノン砲や迫撃砲の砲弾をいっぱいお届けする予定です。
そんなに難しく無い仕事だからみんな安心して。」
「ココ、ちょっといいか」
「おっ、レーム隊員、質問をどうぞ！」
「ここに書いてある、〝担当官と接触　G国北部難民キャンプ〟ってのはどういうことだ」
「そのままの意味だよ、レーム。」
ココがそう言い、言葉を続ける。
「さっき難しく無い仕事って言ったけど、簡単な仕事でもないんだ。
依頼主はアフリカG国政府軍で間違いないんだけど、G国はお隣のK国と油田の権利を巡って紛争状態だったけど今は停戦中。
おおっぴらに武器を運ぶとまたK国とのいざこざが発生する可能性がある。
K国がG国を攻撃する大義名分にもなる。
だから今回の商談はなるべく目立たないようにしないといけないってこと。」
「なーるほどねぇ、だから人が居ても誰が誰だかわかんない難民キャンプで商談しようってか」
「そういうことだ、レーム隊員っ！」

そう言うと立っていたココが椅子に座り、足を組む。
「担当官はもう難民キャンプにいるんだ。
そんで、そいつをキャンプから連れ出して、もしくはキャンプ内で商談するつもり。」
「行くのはいいけどよぉ、ココ。
武器持った人間が、しかも現地人じゃ無いやつがそんな所にぞろぞろ行ったら怪しまれるぜ。K国の諜報官や協力者やらが居ても不思議じゃねぇ。
さっき言った、誰が誰だかわかんないってのはあるがさすがに全員で行ったらバレちまう。
今回はドンパチ出来ないんだろ?」
「そう!そうなのだよ!今日は冴えているな!レーム隊員!」
ココがビッシっとレームを指差す。
「いつも冴えてるぜ、俺は。」
レームが笑う。
「担当官の顔写真は持っているからいいけど、どうやって見つけ出すか!」
少し間を置きトージョが答える。
「ヨナに行かせればいいんじゃないか?」
「なるほど。トージョ、意見を聞かせて。」
ココが言う。
「ヨナなら子供だし、キャンプにも入りやすい。
それなりの格好をしていけば怪しまれることも無いと思う。
担当官と歩いてれば親子連れかなんかと思われるかもしれねぇから、連れ出すのもそんなに難しくないと思うぜ。」
「ダメだよ、トージョ。」
ヨナがトージョに対して言う。
「僕、アフリカ語は話せない。」
「英語くらい通じるだろ。アフリカは公用語が英語の国が多いからな。
あと、ナリにも軍関係者だろ?英語ぐらい話せなきゃ、それこそ話

にならないぜ。」
　トージョが話し終えるとバルメが言う。
「私はヨナくん一人で行かせるのには反対ですね。
　あと、トージョ。Ｇ国の公用語はフランス語です。」
「じゃあ、次はバルメの意見を聞こうかな。」
「わかりました、ココ。
　あの区域全体は治安が悪くて、しかも警備が厳しいことで有名なんです。
　以前、Ｇ国北部難民キャンプ近くのＮＧＯが治療支援をしていた病院に襲撃があり、
　民間人に死者が出てそれ以降警備が厳しくなったんです。」
「続けて、バルメ。」
「それとさっきトージョは子供だからと言っていましたが、ヨナくんの出で立ちはここらの子と違います。
　警備の目に付く可能性は高いです。
　警備に何か言われて、答えられなかったりしたら面倒なことになります。」
　吸っていたタバコを消すとレームが言う。
「おぉそうだ、バルメ。お前が行けばいいじゃん。」
「何故です？レーム？」
「バルメは前はアフリカにいたからアフリカの事情もわかるし、
　フランス語でもスペイン語でも話せるだろ？
　記者かなんかのふりして行けばいいじゃん。」
「潜入調査ということですか…私は良いですが…
　ココはどう思いますか？」
　バルメがココの方を向き言う。
「そうだねぇ、悪く無い方法だと思う。
　無理に一回で交渉しなくても大丈夫だし、バルメが潜入、確認してそれから交渉しても問題ないね。」
　さらにココが詳しく説明する。
「まず、バルメが難民キャンプに潜入、Ｇ国担当官と接触する。

その場で交渉の日時、場所を決定、もし既に注文内容が決まっていたらならその情報を回収。
商品の輸送は何回かに分けて行う。武器を運んでるとは言わずに、医療品などを運んでいると情報を流す予定。
その時はみんなにも護衛してもらうから、よろしく。
護衛の内容はまた詳しく説明するね。」
「は～い」
皆が一様に返事し、立ち上がりそれぞれしたいことをする。
「バルメ」
バルメが部屋を出る前にココが呼び止める。
「何ですか？」と言いながらバルメは振り返る。
「バルメ…アフリカだと色々思い出すことがあるだろうと思うけど…」
ココが少し黙り込んでいる間にバルメが笑顔で答える。
「大丈夫です、ココ！
ココの為なら火の中水の中どこへだって行きます！」
「うん、よろしくね、バルメ。」
「もちろんです！」
バルメは部屋を出て自室へ向かい、ココは今いる部屋の椅子に腰掛ける。
バルメなら大丈夫だろう不安は無いが、だが心配はしてしまう。
アフリカという立地、単独行動、二人組で行かせたほうがいいのだろうか、
しかしあまり目立った行動はしたくない。二人組くらいなら問題ないか。
ココは足を組み、腕も組み、床を見つめ考える。
1分程思考し両腕を上げ伸びをする。
「あーあ！お腹空いた！
ヨナー！一緒にご飯でも食べに行かないかーい？」
「あっ、ヨナ坊だけずるいぜ。
お嬢、俺も行く。」

ルツが声を上げる。
「なら俺も行こうかな。」
トージョも声を上げる。
「では、諸君！みんなで行こうではないか！
準備してー、準備！
ヨナ、バルメを部屋から呼んできて？」
「わかった」
ヨナが部屋から出てゆき、皆がそれに続いて行く。
夜にまたバルメと相談して詳細を決めよう、ココはそう思いながら

第二話

Ｇ国北部難民キャンプ内

「最近はやっとこの近辺も落ち着いて来ましたね～。」

２０代後半から３０代前半程の年齢の男。

黒色のズボンにスニーカー、緑色のＴシャツを着ておりその上から白衣を着ている。

背格好は細くもなく大きくもなく、普通といったところ。

顔は東洋系の顔立ちで銀縁眼鏡をかけており、顔も普通。

アフリカにいるせいか肌は若干日焼けしている。

彼は難民キャンプの医療テント内に置いてある椅子に座っており、飲んでいたミネラルウォーターのペットボトルの蓋を締め横の机の上に置く。

話し相手は警備兵で顔なじみになっているらしい。

警備兵の名前はモハメド・ハッダという。

「1年前はてんてこ舞いでしたよね。モハメドさん達も私達も大変でした。」

「いやはや本当に。

難民の増加、治安の悪化、物資不足、多くの問題がありましたがだいぶ安定してきまた。

ドクター達のご活躍もありましたからね。

私の若い頃とは見違える様です。」

「いやいや、私達の活躍なんてほんの微々たるものです。

警備兵の方のご活躍で私達が安心して人々を助けられるのですから。」

「そう言われますと照れますなぁ、ハハハ」

モハメドが笑うと白衣を着た男も笑う。

「あぁ、そういえばモハメドさん。

今日の午後に記者の方が取材に来るらしいのでよろしくおねがいしますね。」

「わかりました。人数や会社などは伺っておりますか？」

「どうやらフリーの女性記者ということは聞いてます…。
詳しい時間も聞いてないですが、安全上の問題ですかね。
いつもどおり、ボディチェックと武器の一時保管等お願いします。」
「わかりました、我々にお任せください。」
「では、また後ほど。」
テントから出てゆくモハメド警備兵を見送ると男は机に向き医療品在庫リストに目を通す。まだ余裕はある。
ここに来て2年。最初に比べれば物資も環境も良くなってきた。
G国北部難民キャンプは難民たちが流動的に動きやすく、人が入ってきては出て行く。
現在の規模としては中小程で人数は１５０人といったところか。
国際ＮＧＯ「アフリカ地域医療支援団」略称、ＡＡＭＳＴ（Ａｆｒｉｃａ　Ａｒｅａ　Ｍｅｄｉｃａｌ　Ｓｕｐｐｏｒｔ　Ｔｅａｍ）
その一員である医師、東野　達（ひがしの　たつ）は再びミネラルウォーターを飲む。
東野はこの難民キャンプの代表者的なものでＡＡＭＳＴから数年おきに彼のような医師が派遣される。
１年前は東野以外にも医師が派遣されていたが現在は東野のみで医療支援をしている。
初めは人の流れと同時に発生する伝染病に悩まされたが現在はある程度は解消された。
今の主な仕事といえば怪我の治療、ワクチン接種、大きな怪我をしている人の応急処置と病院への搬送等だ。
東野は在庫リストを机の上に戻し腕時計を見る。そろそろ昼くらいだ。
難民キャンプの巡回を行うためにテントを出る。コミュニケーションは信頼関係を作るのに重要だ。
「今日も暑っついなぁ」
アフリカの太陽は空のド真ん中で人も、地も焦がしている。
―――――――――――――――――――――
「ココ、難民キャンプの近くに着きました。

今は近くの喫茶店で待機してます。」
「オッケー。そうしたらバルメ、記者としてキャンプに入ったら適当に取材をしてG国担当官と接触して。」
「わかりました、担当官の顔はバッチリ覚えています。」
「担当官に会ったら、ファイルの中に入れてある日時と場所が書いてあるメモ用紙を渡して。
スペイン語で書いてあるから警備兵がもし見ても解読は出来ないから大丈夫だと思う。
もし、読まれたとしても次のアポとか適当にごまかして。」
バルメはカバンの中に入れてあるファイルからメモ用紙を確認する。
「そのつもりです。
ちなみに、この日時と場所には誰が行くのですか?」
「次はトージョに行ってもらうよー。
私が電話で対応しながら交渉する。そうすれば、直接出向かなくても交渉は出来るからね。」
「今回はかなり慎重ですね。」
「まぁねん、K国に喧嘩売りたくないし、
喧嘩を売ると商品が売れなくなっちゃうからね!」
「フフッ、今のジョーク面白いです!」
「ありがと、それじゃバルメ気を付けてね。」
「おっまかせください!ココ!」
通話が終了しバルメはイリジウム衛星携帯電話をカバンへしまう。
太陽は容赦なく照り続ける。
連日天気がよく、日差しも肌を刺すようだ。
ココが「もー!顔も腕も足も!まっかっかになっちゃうよぉー!」と言っていたのを思い出し口元がほころぶ。
それもつかの間、風も吹かない暑さの中バルメは思い出す。
(しかし、いつでも暑いですねこの国…いや、この大陸は。)

テーブルの上にあるアイスコーヒーの氷は半分も残っていない。
バルメはアイスコーヒーを取り口元へ運ぶ。
コーヒーの苦味と共に喉が潤される。
今は昔のことを思い出してる時ではない、今からすることに集中しなければと思考を切り替える。
（記者として偽っているので銃やナイフが持てないのは少し心もとないですが、
この地域も以前に聞くよりも大分落ち着いたみたいですね。ありがたいです。）
アイスコーヒーのグラスをテーブルに置く。
戦闘が起きそうなときは真っ先に逃げるようにココから言われている。
ＨＣＬＩ社がその戦闘に関与していないということも隠さなければならない。
また、そうしないと記者としてのふるまいとしておかしい。
今のバルメは記者らしく首からカメラを下げ「ＰＲＥＳＳ」と書かれている青いキャップをかぶっている。
防弾ベストではないが青い普通のベストを着用しこちらにも背中と左胸に「ＰＲＥＳＳ」と書かれている。
さながら眼帯の女性戦場記者、メリー・コルヴィンの様だ。
ＰＲＥＳＳとしての身分証明書、パスポートも偽造した物をココが用意した。
ボディチェックや身分証明書の確認を受ける可能性は高い。ＮＧＯ団体が入っているなら尚更だ。
今のバルメの名前はエリナ・コルホネンとなっている。
フィンランド人ならどこにでもいる名前にしたほうが良いとバルメも助言をした。
怪しまれることは無いだろう。
腕時計を見ると午後一時過ぎと針が示している。
（午後からの取材と伝えてありますから、そろそろ行きますか。）
席を立ち上がり、カバンを背負い、足を目的地へ向かわせる。

バルメとの通話が終わる。
G国首都近くのホテルの一室。ココ・ヘクマティアルが椅子に座っている。
他のメンバーは自由時間だ。きっと昼食にでも行っているだろう。
レームが部屋に入ってくる。
「今から作戦開始か、ココ？」
衛星携帯電話を机に置きレームの方に向き直す。
「そうだよー、レームはご飯食べに行かないの？」
レームはココが座っている椅子の席に座り、タバコに火をつける。
「もう食ったよ。
それでバルメの方はどうなんだ？」
「レームがバルメの心配なんて珍しいじゃない。」
「おいおい、俺だって仲間の心配ぐらいするぜぇ？」
「バルメなら大丈夫。
今からキャンプに向かうみたい。暗くなる前に帰ってくるよ。」
「そうか。」
タバコを呑み、息をフッと吐き出すと紫煙が彼の前で渦を巻く。
「何か言いたげだね、レーム」
「いーや、大したことじゃねぇさ。
アイツもアフリカだと思い出すこともあるだろうと思ってな。」
「そうだね。」
少し間が空きレームが言う。
「ココ。飯は食ったのか？」
「まだ食べてないよ。」
「じゃあ、外に行って何か食いに行こうぜ。」
「あれ？レームはもう食べたんじゃないの？」
「早めに食べたから腹が減っちまった。
何か、軽く食べたいんだ。」
「そっか。そしたら行こっか。」
「あいよ。」

二人は立ち上がり部屋を後にする。
エレベータでエントランスまで降り、ホテルを出ると熱風が駆け抜ける。
「あづい!!!!!」
「いや、本当に暑いなこの国は」
「よし、暑さに負けないようにガッツリ食べるぞ～！
ステーキだ！ステーーーキ！」
「えぇ～、俺そんなに食えねぇよ。」
「フレンチポテトでも食べてなさい！」
「ハハッ、そうするか。」
街へ行く、燃え盛るアスファルトの上を歩いて。

第三話

（ここがキャンプですかね。）
バルメはＧ国北部難民キャンプの入り口の前に着く。
難民キャンプというが周りには簡単な柵があり、テントも区画化されている。
以前は大規模でだんだん縮小されたということが見るものが見ればわかる。
取材の名目で来ているのでキャンプ入り口の写真を数枚撮影し入口へ向かう。
「止まってください。
取材される記者の方ですね。」
先程、東野と雑談してたモハメド警備兵がバルメを入り口の前で呼び止める。
「はい、エリナ・コルホネンです。フリーの記者をしています。」
もちろん用意していた偽名だ。
「わかりました、所持品の確認とボディチェックをさせていただきます。
ご協力願います。」
「ええ、もちろんです。」
バルメは笑顔で応じる。
カバンの中身の確認、簡単なボディチェック３０秒もかからずに終わる。
作業が終わるとモハメド警備兵はバルメに礼を言う。
「ご協力ありがとうございます。
ＡＡＭＳＴのドクターが医療テントにいらっしゃいますので、
そちらにお向かいください。赤十字が描かれているので直ぐにおわかりになると思います。」
「ご親切にありがとうございます。
お気をつけて。」
バルメは軽く頭を下げキャンプ内に入る。

（警備兵の武装はＡＫ―４７、妥当といった所でしょう。
装備もチェストリグに予備マガジン程度、ぶっちゃけ軽装備ですね。
特に書類の確認もされずにすんなり入れたのは意外でした。こちらとしてはありがたいですが。
さて、医療用テントはどこでしょう。）
テントやバラックの中心らへんに赤十字が描かれているダークグリーンのテントがある。
バルメはそのテントに近づき中へ入る。
「すみません、ＡＡＭＳＴの医師の方はいらっしゃいますか？」
テントの中に入るとフランス語で呼びかける。
「はいはい、私です。どうかしましたか？」
フランス語で返答が帰ってくる。白衣を着た男、東野である。

テントの中は机２つ、椅子が数脚ある。
また、医薬品が置いてある台、診察台、発電機、心電図を読み取る心電計、簡易的な手術器具等がテント端に置いてある。大掛かりなことはこちらでするのだろうと予想できる。
１つの机の上には包帯やガーゼ、使い捨て舌圧子、ゴム手袋等がある。内科や簡単な怪我の診察はこちらで行うのだろう。
医療用のものはきちんと整理されて置いてあるが、東野が座っている眼の前の机の上には書類や本が雑多に置かれている。
東野は読んでいた本を机の上に置きバルメの方を見る。
「あぁ、あなたが取材の方ですね！どうぞ、こちらにお座りください。
お一人ですか～？」
「えぇ、まぁ。
あ、すみません。」
バルメは東野が持ってきた椅子に座る。
バルメが座るなり東野はバルメの向かい側に座り直すと話し始める。
「遠いところお疲れ様です。

私はここの難民キャンプで医療支援をしている、アフリカ地域医療支援団体の東野達といいます。
よろしくおねがいします～。
あっ、これよろしければどうぞ。今日は暑いですからね～。」
東野が頭を下げる。その後、机の下のダンボールからミネラルウォーターを取り出しバルメに渡す。
バルメはそれを受け取る。なかなかに忙しい男だと内心思った。
「どうもありがとうございます。
申し遅れました。私、フリーの記者をしておりますエリカ・コルホネンです。
本日はよろしくおねがいします。」
バルメも軽く頭を下げる。
「エリナ・コルホネンさんですね？
失礼ですが、コルホネンという苗字ですとフィンランドの方ですか？」
「そうです。よくご存知ですね。」
これで相手に怪しまれずに済む。バルメは心の中でよしと思った。
「はい～、以前にフィンランドの方でコルホネンという苗字の方が居てその人に教えてもらいました。
何でもフィンランドで一番多い苗字だとか！」
「ええ、その通りです。エリナと呼んで頂ければ幸いです。
ヒガシノさんは日本の方ですか？」
「おぉ、そうです！エリナさんもよくご存知ですね！」
東野は驚いた顔になる。
「ええ、前に少し本で読みまして。」
「なるほどぉ。あっ、ちなみに英語は話せますか？」
「話せます。英語の方が良いでしょうか？」
バルメは話題も忙しく変わるのかとまた思った。
「そうですね、英語の方が話し慣れていますのでそちらのほうがありがたいです。
あ、私のことは適当に呼んでください。」

「では、警備の方がドクターと言っていられたので私もそうします。」
「はい～、どうぞ～。」
話が一段落終えるとバルメはカバンからメモ帳を取り出し、記者らしく質問を始める。
何故医者になったのか、キャンプの過去と現在を比べてどう思うか、アフリカの医療のこと、
政府の方針や難民のこと、今まで大変だったこと…
バルメの質問に東野は小説を感情たっぷりに読み聞かせるかの様に答える。
時々、具体例を出すがいまいちわかりにくい。
きっと彼の頭の中には映像のように記憶が残っており、その場面を頭の中で渦巻く言葉を選んで思いつた順から口に出している。
彼は自分の答えを明確に持っているが、それらを言葉としてただ口から発している。
話の道筋がうねうねと曲がりくねった山道の様になっている。
だから、完全にわからないとは言わないがわかりにくい。
しかし、彼の人を救いたいという熱意は十分に感じることが出来た。
「ドクターは何故ＡＡＭＳＴの活動に参加したのですか？」
バルメは質問する。
「私はですね、いつか正確には忘れてしまったのですが、私が１５歳か１６歳の頃にある本を読みまして。
その本に載っていた写真、子供達が銃を持っていたんですよ。他の写真には子供が食料を求めて道端に座り込んでいる写真がありました。親が居なくなってしまった子供、ゴミを漁る子供…
私は絶望しました。
自分と同じくらい、もしかしたら自分より年の小さい子供たちがこんな生活をしているなんて。
あれ？これさっき言いましたよね？」
「大丈夫です、続きをお願いします。
（さっきも同じようなことを言っていましたよ、あなた…）」

「すみません、重ね重ね。
で、とにかく自分に与えられた環境を考えたら、医者になり子供たちを救いたい。
彼ら子供には選択肢が無いのです。だから、選択肢を増やしてあげたい。
そうすれば彼らはもっと自由になれるのかもしれない、彼らがしたいことが出来るのかもしれない。そういう思いにだんだん成りました。
ＡＡＭＳＴに参加したのも日本で医師免許を取り３年程働いたら直ぐに飛び出しました。」
「なるほど、ありがとうございます。」
バルメは自分が武器商人の私兵だと知られたら、この男はどれほど激昂するだろうと想像した。
「ドクター、このキャンプ内の写真などを撮影しても大丈夫でしょうか？」
これを口実にしてキャンプの中を移動しＧ国の担当官を探す予定だ。
「もちろんです！バシバシ取りまくってください！
私も一緒に行って案内します！」
「ぜひ、お願いします。」
二人は椅子から立ち上がりテントの外にでる。
誰かしらと一緒にキャンプ内を回るのは想定済みである。
一緒に移動したとしても事細かに監視されている訳ではない。
紙切れ一枚、相手のポケットに入れたり、目の前に落とすくらい動作もない。
別に見られたとしても、これはおばあちゃんから習ったあなたにが健康に生きられるためのおまじないですとか適当にごまかせる。
しかも、この能天気な医者だ。「おぉ、それは素晴らしいですね！」なんていうに違いない。
バルメと東野はキャンプ内を回る。
東野がここがトイレですね、衛生管理は最初は大変でした～、こっ

ち側には前もっとテントがあったんですよ～などと横を歩いているバルメに説明しているが、そんなものは聞いていない。
左手に紙の入ったファイルを持ち、右手はカメラを構え適当に写真を取りつつ歩いている人の中でＧ国担当官を探す。
２分程歩くと見覚えのある顔の男が前から歩いてくる。
バルメはカメラを下ろし、目を凝らしてよく顔を見る。
（あの男で間違いありませんね。）
前から今回のターゲットが歩いてくる。
東野の言葉などバルメには聞こえていない。
よく確認し、素早く行動に移す、自然に。

第四話

バルメの前からG国担当官が歩いてくる。
東野は不審がる様子もなくあちらこちらと指差しキャンプの説明している。
「あっ、っとっと…」
バルメはすれ違う直前に左手に持っていたファイルを落とす。中に入っている紙があたりに散らばる。
「あぁ、大丈夫ですかエリナさん。」
東野が説明をやめて紙を拾うのを手伝う。
「すみません、手が滑ってしましました。」
「ドクター、自分も手伝いましょう。」
G国担当官も紙を拾うのを手伝う。バルメが思っていた通りの展開だ。バルメは担当官に対して言う。
「どうもありがとうございます。」
散らばった紙を拾いファイルに入れ終わると、バルメはG国担当官と握手をする。
「ありがとうございました、お体に気を付けてください」
「えぇ、こちらこそ、お気をつけて。」
バルメと担当官が握手をし終わるのを見ると東野が言う。
「では、エリナさん行きましょうか。」
バルメはG国担当官と握手するときに、ココからもらったメモを手に忍ばせそれから握手をした。
ファイルを落としたとき手に忍ばせたのだ。
相手へ確実にメモを握らせそれから離れた。自分の手の中に入っていたメモはしっかりと相手に渡せた。
そうすればもうここに長居する意味はない。東野の説明が終わり、医療テントに戻ったらキャンプを後にするだけだ。
バルメは東野の説明に適当に相づちを打ち、適当にメモを書きながらついて行く。
４０分程歩き回ると説明を終え医療テントに戻ってくる。

「キャンプ内の説明は以上ですね～、何か他にありますか？」
「大丈夫です。ドクターの説明で大方わかりました。
後はこちらで記事にいたします。本日はありがとうございます。」
「いえいえ、こちらこそ」
バルメが立ち上がる前に東野がバルメを呼び止める。
「あ、こちらから質問よろしいですか？」
「えぇ、もちろんです。」
何を質問するのか想像がつかないが、断ると怪しまれる。バルメは笑顔で対応する。
東野は背もたれから体を離し膝にひじを付き、手を口の前で組むと下から見上げるようにバルメに言う。
「あなた、本当に記者ですか？」
予想していない質問が飛んできた。何故この能天気な医者がそんなことを質問したのかわからない。
バルメは少し驚くが直ぐに質問に答える。
「はい、そうですが…」
「そうですかぁ？少し疑問に思う点があるんですよねぇ。」
東野はバルメが答えた後に間髪入れずに言う。
朗らかな喋り口がいきなりネチネチと相手を縛り付けるようなものに変わったとバルメは思う。
「まず、最初に私が一人ですか？と聞いたときに一人ですと答えたのが怪しかったんですよねぇ。
ここらへんの治安が良くなってきたとはいえ護衛というか、ボディガードがいないのはおかしいんですよ。土地勘もない人間がこのあたりを歩くのはまだ危険ですし。」
「…」
バルメは何も言わずに東野の言うことを聞く。
「あと、アポを取り方も若干不自然だったんですよね。私の方に直接連絡が来たんです。ＡＡＭＳＴからの連絡無しに。
私への連絡とＡＡＭＳＴからの連絡両方ってのはあるんですが、私だけへの連絡ってのは不自然なんですよねぇ。

ＡＡＭＳＴに聞いたらそのような取材依頼は聞いていないと返ってきましたし。
多分、公的に取材した後を残したくない理由でもあるんですかね。」
東野は淡々と事実と自分の意見を述べる。先程の話の方向がわからずに話す話し方とは全く違う喋り口だ。
「あと、エリナさん。あなたの体つきは一般人それじゃない。
筋力トレーニングと実際に体を動かして付いた筋肉です。
そして、１つのスポーツをやっていた筋肉の付き方ではないです。どちらかと言うと何か重いものを運んだり長距離を歩く、複合的な動作が求められ、その結果としての体付きですね。」
バルメは何も言わないが、内心焦っている。この男は何も考えていない様に見えた。ただの平和主義者の医者かと思っていた。。
しかし、この男はのほほんとした顔の下に冷静な観察眼と洞察力を隠している。
この場を切り抜ける言葉を考える必要があるとバルメは色々と考える。
自分の考えさえ見抜かれているかという思いさえある。
東野は続ける。
「私の予想ですが軍人に近い職種。正規軍人ではない。正規軍ならこんなめんどくさいことはしない。
どこかの会社のＰＭＣでもない。ＰＭＣも諜報活動はしない。彼らは銃を握るのが仕事です。
あなたは個人の兵士、私兵でしょう。身辺警護をしてその他色々なこともする。」
「い、いえ、私はただの記者です。ドクター、あなたの考え過ぎです。」
東野の予想は的中した。バルメは返す言葉が見つからない。
「では何故、私がこんなことを言うかおわかりですか。
こんなことを言わずにあなたを素直に返したほうが安全でしょう？」
「…」
確かにそうだとバルメは思う、東野がこれを言うメリットは無い。

「私はあなたのしていることに興味がある。それだけです。
好奇心です、好奇心！」
東野は体を起こしニコリと笑う。
「は、はい？」
バルメははたまた予想外の言葉に驚いた。答える声が上ずってしまった。
金銭の要求や情報の提供をしろと言われると思ったからだ。
「ん？そのままです、好奇心ですよ！」
東野は目をキラキラさせながら言う。
「私兵ですか？傭兵ですか？カッコいいじゃないですか！まるで映画やマンガみたいです！
こういう人にあったこと無いので話を聞いてみたんですよ！」
バルメは東野の喋り方が誰かに似ていると思う。
（この人、話し方や表情の様子が…キャスパーさんに似ています…）
違う、今重要なのはそんなことではない。
（そうではなくて、この状況をどう切り抜けるか、です。）
「いえ、ですから私は一介の記者です。
私兵や傭兵なんてそんなものではありません。」
「そうですかぁ？間違っていないと思うんですけどねぇ。」
「先程も言いましたが、あなたの考え過ぎです。
日が落ちてしまいますのでそろそろ失礼してもよろしいでしょうか？」
「はい、もちろんです。帰り道お気をつけて。」
カバンを背負い、バルメは医療テントを後にする。
バルメが出ていった後に東野は白衣のポケットから一枚の紙を取り出す。
「間違いないんですけどねぇ。」
その紙にはスペイン語で日時、場所が書いてある。
Ｇ国首都近郊のホテル、次の土曜日の午前１０時。
バルメがＧ国担当官に渡すはずだったメモ用紙である。
東野はバルメがファイルを落としたときにこの紙を見つけ、自分の

手の中に入れた。これだけスペイン語で書いてあったので不思議に思ったのだ。バルメが渡してしまったのは自分で用意しておいたダミーであった、これは英語で書いてある。
「整理整頓は重要ですね～。」
メモ用紙を散らかった机の上に置く。
「さてと、一服しますかぁ」
テントの外に出て、胸ポケットからタバコを取り出し口にくわえると火をつける。
日が傾いてそろそろ夕暮れになるアフリカの空へ、白い煙が消えてゆく。

バルメは難民キャンプを後にして仲間いるのホテルに到着した。
「ただいま戻りました。」
みんな集まっておりそれぞれにおかえりやお疲れ様と言う。
「お疲れ様、バルメ」
ココがバルメに言う。
「ありがとうございます。」
「メモは渡せた？」
「えぇ、バッチリです。」
「オッケー
そうだ、やっぱり交渉は私も行くことにしたの。
あと、トージョじゃなくてバルメについてきてもらうことにするね。」
「そうなんですか？」
「バルメは相手の顔を見てるし、相手も顔を少しでも見てると思うから
その方がお互いにわかりやすいと思って。」
「ココがそう言うならそうしましょう。」
ココがうなずくと振り返り大きな声でいう。
「よし、諸君！バルメが返ってきた！

夕飯だ！」
「は～い」
皆が移動し始める。
移動しながらバルメが今日あったことをココに言う。
東野という医者が居て、その医者が自分を私兵だと当てたこと、キャスパーのようだったこと。
「フフっ、なぁにその人、会ってみたい。」
「なかなかに変な人でしたよ」
日が落ちて薄暗くなったアフリカの街へ皆が行く。

第五話

「そろそろ時間だね。」
「そうですね。」
　Ｇ国首都近郊のホテルのロビーにココとバルメは入り口からではすぐに見えない場所に座っている。
　ココはいつもの白いスーツ、バルメも白いＹシャツとパンツスーツを着ている。
　現在時刻９時４５分、予定ではＧ国担当官が１０時に来るはずだ。
　少し時間が経ちホテルのドアが開く。
「あぁ～、涼しい！今日も暑いなぁ。」
　白衣を着た男、東野がのうのうと入ってくる。
　前と同じく黒いズボンにスニーカー、今日は青いＴシャツを着ており、トレードマークの白衣をその上から着ている。
「ココ、あの男！ココに話した、難民キャンプの医者ですよ！
　なんでこんな所に！」
　バルメはココに小さな声で言うと指をさす。
　ココはゆっくりとバルメが指さした東野の方を見る。
　ちょうど背中を向けていて東野はまだココたちを見つけていない。
「ココ、どうします？」
「このままで大丈夫。」
　東野が振り返り少しあたりを見渡すとバルメを見つける。
「あっ、エリナさんじゃないですか！お久しぶりです！」
　東野はそう言うと、笑顔でココとバルメの方に近づく。
「止まれ、医者。」
　ココが立ち上がり低い声で言う。
「医者というのは私のことですね？」
　東野は立ち止まり言い顔が無表情になる。
「何故、ここに来た。」
「そこのエリナ・コルホネンさんが落としたこのメモを見つけましてね。」

東野はポケットからメモ用紙を取り出し、ひらひらと振る。
「何か大切な用事かと思いまして、これを届けに来たんですよ。」
「それは必要ない。とっとと帰るんだ。」
「必要がない？何故あなたがわかるんですか？
あぁ、あなたエリナさんの雇い主さんですか。」
「これ以上私に言わせるな、帰れ。」
怒りの感情をのせてココは東野に言う。
「まぁまぁ、別に争いに来たわけじゃないですから。丸腰ですし、安心してください。
あなた達に言うこともあります。」
東野は少し口元を緩めながら言う。
「なんだと？」
「とりあえず、そっちに行ってもいいですか？
結構歩いて足が痛いんで座りたいんです。」
東野はそういうが答えを待たずココの方へ向かう。
「待て、医者。」
バルメは東野を止めると、バルメに言う。
「トージョを呼んで来て」
「わかりました、すぐに行きます。」
ココはこの医者が日本人だとわかったのでトージョを呼んで欲しいとバルメに言った。
流暢に英語を話しているが所々に日本語訛りが聞こえる。
自分も日本語は話せる。まだこの医者が日本人という確証は無いが、同じ国籍の人間が居たほうが良いだろうと直感的に思ったのだ。
1分程でバルメがトージョを連れてくる。
「なんだよ、その日本人医者ってのはよ。
俺に関係あんの？」
「ココが連れてこいといったので付いてきてください！」
そう言いながらトージョとバルメがロビーにやってくる。
トージョがココの横に来ると小声でいう。
「んで、ココさん。こいつがその日本人医者なの？」

「そうだよ、トージョ。」
「俺に何しろってのさ、ココさんだって日本語話せるでしょ？」
「話せるが日本人特有の会話の間とか細かい言い回しは少し自信がない。
　私はビジネストークがメインだからね。」
「そういうことなら、わかりましたよ。
　つか、普通に英語で話せばいいんじゃん。」
　その言葉にバルメが反応する。
「トージョ？ココの言うことに楯突くつもりですか？
　いい度胸ですね。」
「はい！はい！喜んでやらせていただきます！」
　トージョはそう言って手を上げる。
（あれ、私、置いてきぼりじゃないですか…？）
　東野は内心そんなことを思った。
「座りな」
　トージョが促すと東野は向かい側のソファに座る。
　トージョが日本語で東野に言う。
「んで、あんた。
　日本人の医者なの？つか、どっから来たの？
　難民キャンプから？」
　それを聞き東野も日本語で答える。
「日本人の医者ですよ。
　あなたがおっしゃる難民キャンプから来ました。」
「なんでここに来た？
　金か？医者って儲かるんじゃないの？」
「そこにいるエリナさんには軽く話しましたが、
　好奇心ですよ、好奇心！」
「はぁ？何いってんの？」
（エリナってアネゴのことか…名前は隠してるのか…）
「そのままの意味です。
　単純な好奇心、猫どころか自分を殺してしまうかもしれない好奇

心。
エリナさんが私兵だとわかってどんなことをしているのか気になった。
それを知りたいと思った。それだけですよ。」
「なるほどね。」
トージョは背もたれに寄りかかるとメガネを上げる。
（どうやら、この怪しげな医者が言ってることはあながち嘘じゃねぇな。
本当に好奇心だけでここに来たんだろう。
さっきアネゴから聞いたメモを渡しに来たってのは、ただのお人好しかもな…）
メモはたまたま拾ったのではなく、自分が能動的に取ったものだがそんなことはトージョは知らない。
バルメもココも知らない。
「そういえばあなた方の名前も何も伺ってませんでしたね。」
東野がそういう。
「名を名乗るなら自分から。日本人だろう、医者。」
ココが日本語でそういう。
「これは失礼、日本語話せたんですね。
私はアフリカ地域医療支援団、ＡＡＭＳＴの医師。名前は東野　達といいます。おわかりの通り日本人です。
よろしくおねがいします。」
東野が軽く頭を下げる。
ココは日本語から英語に言葉を変える。もう、この男の言うことの大枠はつかめたつもりだ。
「私はＨ＆Ｃ　Ｌｏｇｉｓｔｉｃｓ　Ｉｎｃｏｒｐｏｒａｔｅｄのココ・ヘクマティアルだ。」
ココは組んでいる足を逆に組み直す。会釈などしない、する意味がない。
東野も英語で返答する。
「ＨＣＩＬ社、海運の巨匠　フロイド・ヘクマティアルが経営している

武器運送会社。
なるほどぉ、あなた方は武器商人だったのですか。」
「そうだ、我々は武器商人。
お前ら医者が忌み嫌う人種の一人。
わかったならとっとと帰るんだな。」
「医者は武器商人を忌み嫌っているんですか…？」
「私達武器商人は武器を売り、戦争の手助けをしている。
お前ら医者は人助けが仕事、私達武器商人は人を殺す手助けが仕事。
相容れるわけ無い。
まぁ、我々の商品がある限りお前ら医者の仕事が減らないのだから、
むしろ、武器商人に感謝するべきだ。」
ココは若干顎を引き下から睨みつけるように言う。
「は、はぁ、まぁおっしゃる通りかもしれません…
確かに大方の医者はあなた方のような人たちを嫌うでしょうが、私には至極どうでもいいことです。」
東野はココから目を離さずに、特に物怖じした雰囲気もなく答える。
「何故だ？お前も医者だろう？」
「武器を手に取って戦うのは個人の勝手ですよ。そんなことまで私は口出しします。
私は平和活動家ではありません、武器によってもたらされる平和もありますからね。
しかし、私も医師という職業である以上、目の前の救える命を救う努力は最大限惜しみません。
その生命が、どの国の人間か、どんな身分か、どんな思想かはどうでもいい。
私は自分自身の指名を果たす、それだけです。
そしてあなた方は私達と同じ様に平等に兵器を売りさばく。
あなたは医者が武器商人を嫌うと言っていましたが、考え方によっ

ては意外と似た者同士かもしれませんよ。」
ココはバルメからこの東野という医者がキャスパーに似ていると聞いたが、確かに似ている気がすると思った。
しかし、キャスパーが持つ負の狂気ではなく正の狂気を感じた。
東野は自分は平和活動家では無いと言ってはいるが、この男は平和を望んでいる。
武器を手に取り戦うのは自由、その言葉に性善説として人間の可能性を見出したいのだろう。
「そうだろうか、私はそうは思わないな。」
「ヘクマティアルさんがそう思わるのもの、個人の自由ですよ。」
東野がにこやかに答える。
少し間をおいて東野が言う。
「あぁ、そうです。
エリナさんこのメモ落とされましたよ。」
ポケットから再度メモ用紙を取り出し裏側にして机の上に置く。
バルメは何も言わずにそのメモ用紙を見つめる。
「あなたがファイルを落としたときに拾いそびれたものです。」
「私が拾いそびれるなんてそんなことは…」
「あの男の人に用事があったのでしょう。
あの人はナビルさん、確かG国の軍事関連の高官でしょう?」
「何故それを知っている。」
ココが少し驚いた声で言う。
「私があの難民キャンプに派遣されたときに政府の方達数名が挨拶にいらっしゃいまして、
そのときに軍の司令官の横にいて、司令官から名前を伺ったのを覚えていました。」
「エリナさんが――――」
「ドクター、私はバルメと呼ばれています。
エリナは偽名です。その名前で呼ばれると違和感があるので普通に呼んでください。」
いつもより声のトーンが下がり気味な声でバルメが言う。

「そうだ、彼女はバルメと呼ばれている。
そう呼んで構わない。」
ココも続けていう。
「そうですか、ならそうします。
エリ…バルメさんが取材に1週間程前に高官のナビルさんがキャンプに入ってきました。
もっともそれらしい格好でですが。
相手方は私の顔など忘れてしまっていたようですが、私は覚えていました。」
東野は足を組み、背もたれにより掛かる。
「その夜にナビルさんが、まぁ、話しているのをたまたま聞きましてね
どうやら他の軍幹部と連絡を取っていました。
内容を要約すると…」
「彼らはG国でクーデターを企てていたんですよ」

第六話

「彼らはG国でクーデターを企ていたんですよ」
　東野がそう言うとバルメとトージョは驚いた様子を見せる。ココは無表情の顔だ。
「油田権利の争いが一時休戦状態。
　G国とK国はお互いの損害をこれ以上出さないようにその権利の交渉に望むということでしたが、
　国内でそれを良しと思わない派閥もいるみたいでして、その一人があの高官ナビルさんです。
　クーデターを起こすために武器、弾薬その他色々なものが必要になるということも話していました。
　武器商人が接触してくるなんて話も聞きましたよ。」
「そして不必要になったら武器商人を殺すとも。
　どうしようもないほどの強硬派とお見受けしましてね。
　今の軍司令官に全ての責任をなすりつけて、自分たちが新体制の首長になると目論んでいたんでしょう。
　あの、ヘクマティアルさんタバコを吸ってもいいですか?」
　東野は胸ポケットからタバコ箱を取り出してココに笑いながら見せる。
「あぁ、いいぞ。」
　ココは表情、体勢一つ変えずに答える。
「ありがとうございます、医者の不養生とはこのことで。」
「軽口はいい、生きて帰りたいなら話せ」
「もちろんです、そのために来ました。」
　東野は息を吹き出し煙を吐く。バルメが向かい側で煙たそうにしている。
「そこでバルメさんがキャンプへ来た。
　あんな話を聞いた後です、誰だって警戒くらいします。
　このメモさっきは拾ったなんて言いましたが、私がワザとくすねたんです。」

ココが東野が話し終わると同時に話し始める。上半身をを反らし少し顔を上げ東野を見下すようにする。
声には怒りの感情が現れている。
「ほう、貴様いい度胸をしているな。
私の商談をふいにして損害を出させたのか。クーデターなど私にはどうでもいい。
貴様はこの損害をどう償うんだ?貴様の臓器を全て売ったとしても全く足しにならないぞ。」
その話を聞いた東野はココから視線を外し下を向く。
灰皿に置いてあるタバコから出た煙が、机の方へ顔をを向けた東野の顔を包む。
東野はココの方を見ないで、そのままの体勢で言う。
「私にはどうしようもありません。
だが、私は医師だ。救える命は救う。
例えそれが死の商人、武器商人であろうと。」
東野がココの方を向き続けて言う。先程の笑顔は消え真剣な顔つきである。
「そしてまた国同士の戦争が起きれば両国の戦争難民で溢れかえる。
大勢の人間が死んでしまう。そうならば私にはそれを止める義務がある。
好奇心でここへ来たという話は本当ですが、この話も本当です。」

無表情のココの口元がだんだんとピクピクと動いてくる。
「ッフ、ッフフ…」
頑張って我慢していたがもう限界だ。
「あーーっはははは!!!
無理、もう耐えらんない!!ハッハハハハ!!!!」
ココの隣のトージョが腕を組み、ため息混じりにいう。
「ココさんが笑うのも無理ないぜ。
お前、バカじゃないの?」
「えっ、ええ、えっ?」

東野はてっきり捕まるとばかり思っていて、とっさに逃げられる様に力を込めていた足が緩む。
バルメといえば、力なく首を横に振っている。
笑うのが一旦落ち着いたココが東野へ言う。
「っはっは、はぁー、あー、呼吸困難になる！
あんたみたいな医者がいるなんて、長らく世界を旅してきたつもりだけど世界はまだまだ広いわ！
あぁ、失礼ドクター東野、貴方のような素晴らしい正義感と好奇心をお持ちの人間に会ったのは初めてです。
ご心配なく損害を償えという先ほどのお話は冗談です。あの程度の利益は我々にしてみればほんの微々たるものです。」
「そ、そうなのですか？」
東野がそう言い終えると、震える手でタバコを口元へ持ってくる。
「はい、ご心配なく。」
ココは思う。
（面白い、この人間は。自分の命の危険を犯してまで武器商人の命を救おうとする人間などそうそういない。殺さ　れそうになったことはいくらでもあるが、自分の仲間達以外の人間が自分を救おうとしたのは初めてだ。
　ぶっちゃけ、トージョとの会話が終わり自分と話し始めてくらいから笑うのを耐えていた。
バルメがこの医者はキャスパーに似ていると言っていたが、私はそうは思わない。
さっきは少しそう思ったが違う。むしろ反対方向、私と似ている。この医者と私の思うところは本質的には恐ろしくらい一緒だ。）
「ドクター東野、ご忠告そしてご報告ありがとうございます。
我々の私兵といえど一軍隊を一気にに相手にしたらやられてしまいます。」
ココはうやうやしく東野へ頭を下げる。
「あ、あぁ、いえ、こちらこそ。」
若干まだ落ち着かない東野が答える。

「そしてドクター東野、提案が一つあります。」
頭を上げたココは少し見を乗り出しながら東野へ言う。
「何でしょう。肺ならタバコのススでもう真っ黒ですから売り物になりませんよ。」
ココは苦笑いをする。
「我々武器は売りますが臓器は専門外ですので。
いえ、そうではなくて。東野さん。」

「我々の仲間になりませんか？」

「ココ、そんないきなり！」
驚いたバルメがココの方を向く。
「いきなりって、バルメのときだってーウゴのときだってー、
いきなりだったじゃーん。」
「確かにそうでしたが…」
バルメの声が小さくなる。
「俺は良いと思うぜ、ココさん。
同じ日本人だし、同じ男だし。賛成だな。」
トージョは椅子に深く座り直し頷くように首を縦にふる。
「素性がわからない医者で、最初だって嘘ついてましたし。」
バルメはココに疑問を投げかける。
「ＡＡＭＳＴの派遣医師でしょ？
嘘ついてたのは話の流れをわかりやすくするのと私達を助けるためだよ。」
「あ、そうですね…
というかなんで医者なのですか？」
「みんな銃を撃つのは上手いけど、医療に詳しい人はうちにはいないじゃない？
怪我をしてもしっかりとした医師がいればみんなが生き残れる可能性アップアップ！」
「アネゴ、ココさんの言っていることは一理あるぜ。

医者がいたほうが俺たちも少しは安心できる、間違いない。」
「トージョは黙ってください。」
「すんません。」
「私はみんなの命を預かっている立場でもあるから、
みんなが生きられるようにするのは私の仕事でもあるの。」
「ココ、私のことを思ってくれるんですね！」
「バルメだけじゃなくてみんなのこともね。」
「アネゴも良さそうだから、いいんじゃないか。ココさん。」
「ココがそういう思いなら、私も賛成です！」
「んじゃ、けってーい――――」
「待ってください！待って待って！」
東野が慌てて3人を制止する。
「私はまだイエスなんて言ってませんよ!?
3人で勝手に盛り上がらないでくささい。」
ココ、バルメ、トージョが顔を見合わす。
((あっ、そうだった。))
東野は言う。
「個人的には賛成です。しかし、私にもＡＡＭＳＴの医師という立場があります。
難民キャンプの皆さんを置いてＡＡＭＳＴを脱退するなどということは出来ません。」
「その点はおまかせあれ！」
ココは右手でグッドサインを作る。

――――――――

「えっ、ええ？」
東野が難民キャンプに戻るやいなや「Ｈ＆Ｃ　Ｌｏｇｉｓｔｉｃｓ　Ｉｎｃｏｒｐｏｒａｔｅｄ」と書かれたバスやトラックが入り口の前に並んでいる。
「あっ、ドクター！ドクター！」
警備兵モハメドが入り口あたりで手を振り東野を呼ぶ。
それを聞いた東野はキャンプ入り口に駆け寄りモハメド警備兵と

話をする。
「モハメドさん！この車は一体何なんですか!?」
モハメド警備兵はバス、トラックを手で指しながら説明せする。
「ＨＣＬＩ社が出資をしてくださっての方々が難民キャンプにいる人達を正規の戦争難民保護施設や医療施設に移送して頂けることになったんです。テントやバラックの処分など行ってくれる予定のようです。
他にも停戦になって故郷に戻れる方の支援もするとおっしゃっておられました。
ドクターが戻られる1時間ほど前から車両が続々と来たので、我々も驚きました。」
「そうなんですね、教えていただきありがとうございます。」
東野がココ達と話していたホテルから難民キャンプまで車と徒歩で2時間半程かかる。ヘクマティアルさんは1時間半の間にこの車両を手配したのかと東野は驚く。
モハメド警備兵は東野の顔に疲労が浮かんでいるのを見て声をかける。
「ドクター、お疲れのようですから我々の詰所で休憩されてはどうでしょう?
私もそろそろ交代の時間なのです。
キャンプ内で何か発生したらすぐに伝えるよう他の警備兵に言っておきますのご安心を。」
「あぁ、お気遣いありがとうございます。お言葉に甘えてそうさせていただきます。
今日は色々疲れました。」
はぁ、と息と付くと肩の力も抜ける。
「そのようですね。コーヒーでも飲んで休みましょう。」
東野とモハメドは警備兵の詰所へ向かう。
太陽が照りつける昼下がり。
風が吹き埃が辺りに舞い、空に霧散する。まだまだ暑い日が続く。

第七話

Ｇ国北部難民キャンプにＨＣＬＩの支援が入ってから一週間、全ての難民がそれぞれの場所に向かった。
東野は最終のバスを見送る。
「せんせーー！ありがとーございましたーー！」
「げんきでね！せんせーー！」
バスの窓から子どもたちが東野に手を振る。
「みんなも元気でね。」
東野も手を振り返す。
彼は既にＡＡＭＳＴを脱退した。
１日前にＡＡＭＳＴの施設班が来て医療テントや医療機器を回収した、そのときに脱退する旨を伝えたのだ。特に強く引き止められることも無く脱退することができた。任期はあと半年程残っていたが難民キャンプがなくなるということで任期もなくなったのだ。
そして、ＡＡＭＳＴには東野の名前は残して置くのでもしまた協力してくれるなら是非頼むとも言われた。
東野は最後のバスが土煙を上げながら走り去るのを見送った。
一緒にバスを見送っていたモハメド警備兵が東野に話しかける。
「これが最後のバスですね。ドクターともお別れとなると私も寂しいです。」
「私も寂しいです。でも、キャンプのみなさんの生活がより良いものになると思うと嬉しい気持ちもあります。」
「同感です。
ドクターはこの後どうされるのですか？」
苦笑いしながら東野が言う。
「実はＨＣＬＩ社にスカウトされまして。そこで働くことになりました。
キャンプの皆さんの移動を支援してくれたのも私の心残りが無いようにと、のことで。」
「そうなのですね。

ドクター東野、あなたなら大丈夫です。どうかお元気にしていてください。」
「ありがとうございます。モハメドさんもお体にお気をつけて。
こちらの寄ることがあれば必ず会いにゆきますので。」
東野とモハメドは堅く握手をする。役目は違うとはいえ共に戦った仲間。
そして東野は歩き出す。新しい仲間に会うために。

待ち合わせの場所は以前ココ・ヘクマティアルと会ったホテル。時間は以前と違い夕方だが。
東野はその場所に着いた。ドアを通りロビーに入ると声をかけられた。
「あれなら心残りも無いでしょう?ドクター東野。」
「ヘクマティアルさん。」
東野が向いた先にココが腰掛けていた、以前と同じ場所に。東野はココの向かい側の席まで歩き、カバンを置くと椅子に座る。
「ようこそ、私の仲間へ。歓迎しよう。」
ココが両腕を広げ言う。
東野は膝に肘を付き、手を口の前で組んだ姿勢になる。下から目線だけをココに向ける。
「ヘクマティアルさん。私を雇うにあたって一つだけ条件があります。」
ココは無言で広げた腕を戻し手を組み、脚の上に置く。
「私は、子供は何があっても殺さない。そして、殺させない。」
「それでもいいのなら、私を雇って頂いて結構です。」
ココは一呼吸置いて答える。
「あぁ、構わない。今の隊員にも似たようなのがいるからな。」
「わかりました。これからよろしくおねがいします。」
それを聞いた東野は体を起こし立ち上がり手を差し出す。
「こちらこそ頼むよ。ドクター東野。」
ココも立ち上がり手を差し出すと東野と握手をする。

握手を終えるとココが言う。
「では、案内しよう。新しい仲間の元へ。」
「お願いします。
あとヘクマティアルさん―」
東野の言葉を遮りココが言う。
「ヘクマティアルじゃなくていい。
名前のココって呼んでもらって大丈夫。」
「わかりました。
ココさん、私のこともドクター東野でなく東野でいいですよ。」
「うーん、東野って言いにくいから…
ドクター、ドクターでいい？バルメもそう呼んでたし！」
「えぇ、構いません。その呼ばれ方は慣れてますので。」
東野はニッコリと笑いながら答える。
「オッケー、じゃあ行きましょう。」
ココがエレベーターホールへ向かう。東野はカバンを持ち上げその後をついて行く。
ココがエレベーターのボタンを押すと扉が開く。
エレベーターに乗ると東野はココの後ろ姿を見ながら思った。
（成熟した大人のような風格もあれば、あどけない少女のような無邪気さもある。
氷のように冷ややかな冷酷さもあれば、寛大な情け深い心もある。
そして、心の中に大きな物を秘めている。何かは正確にわからないですが、何か莫大な物。
それを表に出さないようもしている。）
「難民のあれ、ビックリしたでしょ？」
ココは振り返り東野に言う。
自分が考えてことについて何か言われるのかと思っていたので、声を話しかけられ東野は少し動揺した。
「あっ、あぁえぇ。もちろん驚きました、まさか私が戻る間にあんな風になるなんて思っていませんでしたから。
そして一週間で作業を終えたことにも驚きました。」

そして薄ら笑いしながら言う。
「一番驚いたのは武器商人という職業の方があんなことをする、ということでしたね。」
その言葉にフッと笑うとココは答える。
「なぁにそれ、皮肉のつもり？
私達だって慈善事業してますよ！会社のイメージアップの為に！」
「あれ、そういう目的だったんですか…」
「まっ、それもあるけど。実際、心残りが無いようにってのは私からの配慮のつもり。
前の職場に未練があってうちで働くのに支障があるー、なんてことになったら困るからねん。」
ピースサインをしながらココは微笑む。
「だから、君にはバリバリ働いてもらうよー！よろしく頼むぞ、ドクター隊員！」
ピースサインをしていた手で東野の方をバシバシ叩く。
「ココさん、痛いです。痛い、痛い。
というか結構、力あるんですね。」
そんな話をしているとエレベーターが止まりチーンと音がなる。
またココが東野を先導する。
廊下を歩き、部屋の扉の前に来るとココが言う。
「ここで待ってて。私が呼んだら入ってきて。」
「わかりました。」
ココは扉を開け仲間達がいる部屋に入る。
「みんな注目！」
ココがそう大きな声でいうと、皆ココの方へ向く。
ヨナだけソファで寝ており、起き上がってこない。
「予め言っておいたが、我々の部隊に新しい仲間が加わる！
さぁ、入ってきたまえ！」
十分に大きな声だったので廊下にいる東野聞こえた。それを合図に東野が部屋の中へ入る。
部屋に入った東野を手で指しながらココが紹介をすると。

「彼が新しい仲間となる東野、東野…
東野、なんだっけ？」
ココが東野の方を見て首をかしげる。
（（（えー…知らないで雇ったの??））））
一同、考えることが一致した。
「東野達です。」
ココへ東野が耳打ちする。
「えー、東野達だ！
彼は医者なのでー、ドクターと呼んでくれたまえ！
では、自分で自己紹介を！」
「医師の東野達です。呼び方はお好きにどうぞ。
よろしくお願いします。」
東野は頭を下げる。それを見た一同も軽く頭を下げる。
自己紹介を終えるとココが再び話し出す。
「彼には普段の皆さんの健康管理などを行ってもらいます。
また、戦闘時はコンバットメディックとしても活躍してもらいます。
これで皆さんの生存率が上がること間違い無し！」
ココの言葉に続けて東野が話す。
「あとカウンセリング、心理療法も出来ます。」
「という訳でみんな、仲良くしてやってくれ。
あとみんなも一人ひとり自己紹介して。」
皆、自己紹介をする。名前を言い、よろしくと言ういくら位の簡単なものだ。
皆が自己紹介を終えると窓際でタバコを吸っていたレームが手を挙げる。
「質問良いか？」
「どうぞ、レーム。」
ココが答える。
「ドクター。あんた、銃を握ったことはあるか？」
レームが東野に言葉を飛ばす。声はいつもの調子で言っていて、真

意は読めそうにない。
「あります。撃ったこともありますよ。」
「じゃあ、人を殺したことは？」
レームは同じ声のトーンで話す。
いきなりそんなことを聞かれた東野は軽く眉間にシワを寄せ言う。
「それは私の医師としての実力不足で人が亡くなってしまったことがあるか、ということですか？」
「あー、質問の仕方が悪かったか。
何しろうちに来るのは元兵隊が多くてな。」
タバコを口元へ運び、息を吸い込み吐く。それと同時に白い煙も渦を巻きながら出てくる。
「銃で人を殺したことはあるか？」
兵隊ならいざ知らず、医師が銃で人を殺したなんてことがあるならそれはただの殺人だ。
あるとしても気軽に首を立てに振ることなど出来ない。
東野はココの方を見る。その困惑した表情を見たココが東野にいう。
「ここにいる全員は人を殺したことがある。何人殺したか数えらないくらい。」
それを聞いた東野は「あります。」と答えた。
へへ、と笑いその後にレームがいう。
「わかった。変な質問して悪かったなぁ、ドクター。
確かタバコ吸うんだろ？ココから聞いたよ、喫煙者仲間が出来て嬉しいぜ。」
レームが東野を手招きする。東野がレームの近くに行くと「ほれ。」といいレームがタバコを渡す。ありがとうございます、とそれを受け取ると口に加え火をつける。ふぅ、と息を吐き出す目線を動かすとソファで寝ているヨナが目に入る。
「子供…？」
「もー、ヨナ寝てたのー？
ヨナ、起きて、ヨナー。」

ココがヨナが寝ているソファまでゆき、ヨナを揺さぶり起こす。
「なんだよ、ココ。夜ご飯？」
「あそこにいる白衣を来た人。私達の新しい仲間だ。
ドクターと呼んでいい、挨拶して。」
ヨナは起き上がり、普通に座ると東野の方を見て言う。
「よろしく、ドクター。」
「お、ヨナ偉いぞー！」
ココがヨナの頭をワシワシと撫でる。横でバルメが私にもやってほしいという顔をしている。
その姿を見ていた東野はレームに質問する。
「レームさん、彼は？」
「彼はヨナくん。武器を憎む元少年兵だ。」
「元少年兵、ということは彼も戦うのですか？」
「もちろん。もう何回も俺たちと一緒に戦ってるベテランさ。」
「なるほど、ありがとうございます。」
レームに礼を言うと東野は思う。
「ヨナくん、ちょっといいですか？」
東野はヨナのもとに行き、しゃがんで目線を合わせる。子供と接するときの癖だ。
「なに、ドクター。」
「君は何でココさんの元で働いているんですか？」
小さく首を傾げながらヨナに問いかける。
「世界が見れるから。あと、みんな優しいから。」
ヨナは迷わず言う、東野の目を真っ直ぐと見つめて。
その答えに東野はうなずき、立ち上がる。
「ありがとうございます。
確かにヨナくんの言うように皆さん優しそうですね。」
まっすぐ自分を見つめて話したヨナの言葉に嘘は無いと確信した。
彼は自分の意志でここにいる、だからその意志を尊重しなければならないと東野は思った。
それを見届けたココが口を開く。

「よっし、じゃあ晩御飯だ。
ドクターあなたに作ってもらうから、よろしく！」
「構いませんよ。」
「ちなみに卵料理を作ってもらう。
これが私の隊の入隊儀式だ。
あなたは今日、軍、国家、組織、家族を一新した卵くんだ。」
「よろしく頼むよ、東野達。」

「うめぇ、超うまいじゃん！」
ルツが叫ぶ。
「ルツ、わかったから静かに食えよ。」
アールが呆れる。
「ヨナ坊の時とは大違いだな。」
トージョが肩をすくめる。
「ハッハ、ホントだよ。」
ワイリが笑う。
「私よりも上手いかも…」
バルメがつぶやく。
「医者は料理が上手いのか？」
レームが問う。
「うん、明日も食べたいくらいですね。」
マオが微笑む。
「俺もそう思う、明日もう一回でも良いくらいだ。」
ウゴが頷く。
「素晴らしい、ドクター！
医療担当と料理担当も頼むよ、君！」
ココが言う、
「ドクター、おかわり。」
ヨナが皿を差し出す。
「ええ、もちろんです。」

東野はヨナくんの言ったことは間違いじゃないと改めて実感した。

第七・五話

欧州某国ホテルの一室、皆が揃っている。
ウゴは出掛けており、東野は自室にいる。それ以外メンバーは部屋に居てそれぞれくつろいでいる。
「ケホッケホッ、んんっ、ゴホッ。」
喉の調子が悪いのだろうか、バルメが咳をしている。
それを見たココが声をかける。
「バルメ、大丈夫？風邪？」
「昨日から喉の調子が悪くて、少しだけ熱もあるみたいで。」
「ドクターが部屋にいるから見てもらったら？」
「そうですね…ちょっと行ってきます。」
バルメがソファから立ち上がり部屋から出る。
少し間をおいてからトージョ、ルツ、アールが顔を合わせる。
トージョが口を開く。
「ルツ、アール下で飯でも食いに行かないか？」
ルツとアールは、トージョの言葉を聞くと返事をして3人で部屋から出てゆく。
「ハハハッ、前に話してたことが本当になるとはな。」
部屋を出るなりトージョ言う。
「あぁ、本当だぜ。」
ルツが続けて言う。
「作戦通りいくぞ。」
アールが口元をニヤリとさせる。

バルメが東野の部屋の扉をノックする。
「ドクター、いますか？」
「はいはい、どうぞー。」
それを聞いた東野は軽快に返事をする。
バルメは東野がいる部屋に入る。東野は読書をしておりしおりを挟み机の上に置く。

「どうしました？」
「少し体調が悪くて…」
「わかりました、どうぞ座ってください。」
　促されたバルメは東野の向かい側の椅子に座る。
「まぁ、楽にしてください。いつぐらいから体調が悪くりました？
　昨日は大丈夫そうでしたが。」
　東野が問診を始める。
「昨日は咳が少し出るくらいだったのですが、今日起きたら咳がひどくなって若干熱もあるみたいで…」
「なるほど、とりあえず体温を計りましょう。」
　床においてあるメディカルバックから体温計を取り出しバルメに差し出す。
　バルメは体温計を自分の脇に挟む。しばらくするとピピピッと音がして計測が終ったことを知らせる。バルメは体温計を取り東野に渡す。
　渡された体温計を東野が確認する。
「３７度５分、少々熱がありますね。呼吸音を聞きます。
　なるべくなら直接聞きたいのですが、嫌なら服の上からでも大丈夫です。」
「直接で構いませんよ。」
「わかりました、失礼します。」

―――

　トージョ、ルツ、アールの３人はバルメが東野の部屋に入るのを確認すると扉の前まで来る。
　トージョが小さな声で二人に話す。
「いいか、風邪の診断なら聴診器を使う。その時アネゴの、フフッ、君たちなら言わなくてもわかるでしょう？」
「あぁ、なかなか拝める機会がないあのワガママボディを合法的に見られる。」
　ルツが小さく頷きながらこれまた小さな声で言う。
「アネゴ自らガバっとさらけ出すところを目に焼き付けような。」

アールも小さな声でいう。
「「フフフッ…!!ドクターの野郎だけにいい思いはさせないぜ…!!」」
見事に息の合った気合を入れると、トージョがゆっくりと音を立てずに東野の部屋の扉をあける。
その隙間から縦3列に並び部屋の中をのぞく。丁度、東野とバルメの二人の横からの見れた。話す声も聞こえる。
（37度5分、少々熱がありますね。次に聴診器で呼吸音を聞きます。なるべくなら直接聞きたいのですが、嫌なら服の上からでも大丈夫です。）
（直接で構いませんよ。）
「おぉ、ドクターの野郎しれっとした顔してるけどやるじゃねぇか！」
アールが褒めているのか褒めていないのかわからない称賛を送る。
「悪いな、東野くん。君だけにいい思いはさせないよ。」
トージョがメガネをあげる。
「お待ちかねだぜ…！」
ルツが言う。
（あ、バルメさん服を上げなくても大丈夫です、シャツの下から聴診器を入れますので。）
（わかりました、お手数をかけます。）
（いえいえ、仕事ですから～お気にせず～。）
それを聞いたトージョが思わず口走る。
「おい、聞いてねぇぞ!!」
「バカ、トージョ声がデケぇぞ！バレちまうだろ！」
ルツがトージョに言う。
「おいおい、二人とも黙ってろ。」
アールが二人に注意すると二人ともわかったよ、と言い静かになる。
（はい、じゃあ大きく深呼吸をしてくださいね。）
そう言うと東野はシャツの下から聴診器を入れ呼吸音を聞く。右の首の付根、左の首の付根、右胸上部、左胸上部と聴診器を動かす。

左の胸の下に動かす前に東野がバルメに言う。
（すみませんが、少し胸を持ち上げて頂けますか？）
（こうで大丈夫ですか？）
「おぉ、あの爆乳をアネゴに自ら持ち上げさせている…」
ルツはありえないという感じで眺めている。
「やっぱり重いのか…？」
アールがつぶやく。
「当たり前でしょう、あの胸。」
トージョがまたメガネを上げながら言う。
先程の怒りはどこへいいったのやらという感じである。
（はい、オッケーです。では後ろを向いてください。また深呼吸をしてください。）
（わかりました。）
バルメが後ろを向くと背中に再度聴診器を当て計６ヶ所の呼吸音を聞き終える。
（オッケーです。こちらに向き直ってください。）
バルメが再度東野と向き直る。
（打診をしたいのですがいいですか？手で胸を軽く打ってその音を聞きます。）
（ええ、構いません。）
「手で胸を打つ…？ってことは…」
ルツが言う。
「東野くん、君も中々にやり手のようだね。」
トージョは目を細めながら部屋の中の二人の様子を見ている。
「医者なら許されるのか…俺も衛生兵に志願しておけば…」
アールがあぁ、とため息を漏らす。
（では失礼します。また深呼吸をしてください。）
東野がバルメの右胸上部に左手を置き、右手の中指で左手の中指の第一関節と第二関節の間を叩く。
次に左胸上部、胸の谷間付近、脇から胸の間程を左右２回ずつ打診を行う。

「トージョ！俺達が触ったらぶっ殺されるようなところをあの野郎いとも簡単に！」
ルツがトージョに訴える。
「アネゴが何も反撃しない。さすが医者、恐るべしだ。」
トージョが感心する。
「クッソ俺も衛生兵だったら…！」
アールはさっき言っていたことをまだ言っていた。

―――

「オッケーです。
じゃあ、口を開けてください。はい、あーん。」
「ドクター、子供じゃないんですから。」
「あっ、ごめんなさい。前からの癖で。」
東野とバルメが少し笑う。
「ツケッホ、ンッ、ンッ。」
バルメが笑った後に咳き込む。
「あぁ、すみません、すみません。
バルメさん口開けてください。」
バルメが口を開けると、使い捨て舌圧子で下を押さえ小型ライトで喉の奥を照らす。
喉が赤く腫れている。咽頭炎だ。
「はい、終わりですね。」
東野はそう言い使い捨て舌圧子をバルメの口から外し捨てる。
「大丈夫そうですか？」
バルメが東野に聞く、いつもの強気な感じが無い。
「呼吸音、打診で特に異常はないです。喉が赤くなっているので、まぁ、風邪ですね。外の暑さで汗をかいてそのまま建物の中に入り冷房で冷えてしまったのでしょう。バルメさん薄着ですから。
とにかく大きな病気じゃなくてよかったです。
私からココさんに言っておきますので数日間は安静にしてください。」
「わかりました。薬とかなにかありますか？」

「いえ、風邪なので特に出しません。安静にするのが一番早く治ります。
　でももし咳や鼻水が辛かったら私に言ってください。市販薬を買ってきますので。」
「わかりました、ありがとうございました。」
「いえいえお構いなく、お大事にしてくださいね～。」
　バルメが部屋から出てゆく。程なくしてトージョ、ルツ、アールの3人が東野の部屋に入ってくる。
「あれ、3人も風邪ですか？」
「よぉよぉ、やるじゃねーの。ドクター。」
　ルツが座っている東野と肩を組むようにする。
「ドクター、君って人間は。大したものですよ。」
　トージョは東野の前に立つ。
「お前もおとなしそうな顔して中々やることやるんだな。」
　アールはトージョの横に立っており口元あげ笑っている。
「ん？何がでしょう？」
　東野は3人が何を言っているのかよくわからない様子だ。
「とぼけんなよ、ネタは上がってるぜ。
　これ使ってアネゴの胸ポンポン触ってたじゃねぇか。」
　ルツは東野が首から下げている聴診器を指さしながら言う。
「聴診器ですから当たり前ですよ。」
「あと、あの爆乳に手を当ててコツコツ叩いてたやつ。
　あれ本当に必要なのか？どうなんだよドクターさんよ？」
　アールがにやけた顔で東野に問いかける。
「あれは打診といって、昔からある立派な診断法です。
　高価な医療機器が無い現場ではまだまだ使える技術なんです。」
「まぁまぁ、二人共そのくらいにして。
　我々はドクターを攻めに来てるわけじゃないんですから。」
　トージョは右手でまたメガネを上げる。そのまま続けて言う。
「ドクター、アネゴの胸の触ったら感触を教えてくれ。」
「えぇ？そんなこと言われましても…」

「どうなんだ、教えてくれよドクター。俺たちの命がかかってんだよ。」
「あぁ、俺達は危険を犯したんだ。その分の情報はもらっていくぜ。」
ルツ、アールが口々に言う。
「教えろよー」「ドクター、観念するんだ」「いいじゃねぇか減るもんじゃねぇしよ。」など3人が騒いでるうちに東野がドアの方を指差しながら言う。
「あー…皆さん、後ろ……」
トージョ、ルツ、アールが振り返るとそこには鬼の形相をしたバルメが立っていた。
気のせいか赤いオーラのような物が見え、髪がゆらゆらと動いているように見えるが、東野はそれが全部見間違いだと自分に言い聞かせた。
「「アネゴ…!」」
3人が息ピッタリに言う。
「ドクターはしっかりと仕事でやっていて、あなた達のようなやましい目的は無いのです!!
お仕置きが必要なようですね!!」
「逃げろォ!」「やべぇ!」「殺される!」とか叫びながら3人が飛び出すと「待ちなさい!」とバルメが叫び追いかける。
「バルメさん…安静に…いや、あれくらい元気なら大丈夫ですか…」
聴診器と体温計をメディカルバックに戻し、本を取る。
(うん、バルメさんの胸は今までの中でダントツで大きかったなぁ。)
先程まで読んでいたページを開き、東野は読書を再開する。

ココ「これが我がドクターのプロフィールだ!」
東野「なんか照れますね。」
名前：東野　達（ひがしの　たつ）
国籍：日本
年齢：33歳
身長：トージョと同じくらい

体重：６５　ｋｇ
体格：やや痩せ気味
好きなもの：枝豆、牛乳、読書、人の笑顔
嫌いなもの：酸っぱい食べ物、非人道的な人間
タバコの銘柄：Ｌｕｃｋｙ　Ｓｔｒｉｋｅ（たいていどこにでも売っているから）
使う銃：Ｈ＆Ｋ　ＭＰ５、Ｈ＆Ｋ　Ｇ３６Ｃ、Ｍ９２
経歴：帝都大学医学部卒、帝都大学附属病院勤務、元ＡＡＭＳＴ（アフリカ地域医療支援団）派遣医師
トレードマーク：白衣（換えが５着ある）
日本人の医師。専門は内科、外科、循環器科。麻酔科医の資格も有しているので頑張れば一人で外科手術が出来る。また、大学病院時代に臨床心理士の資格も得た。
困っている人間を放っておけない、弱者の味方でありたい、助けられる命を助けるという利他主義者。しかし、人を助けるためにときには人の命を奪わなければならないということもＡＡＭＳＴ派遣医師時代のとき痛感した。助けられる命を助けられなかった時は自分を責める癖あり、時に涙してしまう。
子供を殺さない、殺させないというのは東野が「子供には未来がある。大人がそれを奪う権利などは絶対的に一切無い」という信条の為である。
ココの仲間になったのは好奇心と支援の礼、そして自分のココの目指すところが同じであると直感的に感じたため。
医師としての腕は非常に優秀であり、ＡＡＭＳＴ派遣医師時代のときは多くの命を救っている。また、観察力、洞察力に優れ、医師としての技術を磨く上で身についたものと考えられる。本人曰く「ただのお人好しの凡人です。」と言う。
使う銃はコンパクトで軽量な物を好む。これは他の隊員と比べて体格が小さく非力であるためである。射撃はレームとルツに教えてもらっている。レーム曰く「器用で筋がいいねぇ」とのこと。

第八話

砂漠のど真ん中にある周囲とは不釣り合いな白塗りの壁の豪華な建物。その建物は前はホテルだったが、あるマフィアの幹部が丸々買い取ったらしい。ホテルの周りには小さなコーテジが何件かある。もちろんこれも買い取られている。

元ホテルから一定間隔で銃声と男の悲鳴が聞こえる。

最初の2、3発までは男も叫び声を上げていたが6、7発後にはその声も無くなり銃声だけが聞こえるようになった。

銃声を背に男と女が歩いている。

男は短髪にヒゲ、サングラスをかけており目付きの悪い青い瞳を隠している。緑色のTシャツとカーキのデニムを履いている。

女は茶色いロングヘアーによれよれのテンガロンハットを被っている。服装は日本で見かける女子学生服のようだ。

「ところで、チナツ。」

「うん？」

「何でパンツはいてないんだ？」

「秘密。悩殺されたい？」

「バカ、たとえ素っ裸で歩こうがピクリともこねぇよ。

熟女なら話が別だがな。」

「ふーん。」

「とにかく都会に行こう。」

「そだね。」

オーケストラの二人は砂漠の中を歩き次の街を目指す。

ココの仲間がホテルの一室に集まっている。銃を手入れしたり酒を飲んでいたり、本を読んでいたりしてそれぞれくつろいでいる。

ココ、ヨナ、トージョは別の部屋で授業をしているようだが、笑い声が聞こえる。ルツとバルメが部屋をのぞきに行くと、ココが部屋から出てくると言う。

「いい大人がせっかくのオフに、部屋の中でゴロゴロ。」

「このホテル居心地いいしさ。」
ルツが頭をかきながら言う。
「それではココ、私とデートしましょう。」
バルメがココに提案すると「オッケー」と返事が来る。ヨナを連れて行こうとココが言うとバルメがこの世の終わりの様な顔をしたが、授業中とのことで連れて行かない様だ。
バルメの顔も素晴らしい笑顔に戻る。
「ヨナも授業終わったらちゃんと、ありがとうございましたって言うんだよー。」
ココとバルメが部屋から出てゆく。
「ココさんの言う通り、オフの日でも皆さん集まっているんですね。」
東野がレームに話しかける。喫煙者仲間、銃の扱いを教わっているなどで東野とレームは仲がいい。
医者と傭兵という真反対の関係も、磁石のようにお互いを刺激しているのかもしれない。
「あぁ、異国では特にやることも無いしな。俺もこの国はもう3回以上は来てるんだ。
観光地も、もう見たさ。」
「言われてみれば皆さんもう何回も来てる所で何をするって無いですよね。」
「ドクターはここは来たことあるのか？」
レームが東野に質問する。
「いえ、ありませんよ。でも、皆さんがこのホテルにいるなら自分も居たほうが良いのかなと思って…」
「へへ、別に気にするこたぁねえさ。」
レームは手にしていた酒を置き、タバコに火をつける。東野もそれに合わせるようにタバコを取り出し一服する。
そんな話をしているとヨナが勉強部屋から出てくる。どうやらトイレらしい。
レームは顔を動かさずにヨナが部屋から出てゆくのを横目で見る。
（なーんか嫌な予感がするねぇ…）

レームはそう思い東野に小声で話しかける。
「ドクター、武器といつもの道具持って出かける準備してこい。」
「えっ、でも今日は…」
東野は少し驚いた顔になる。この国は治安がよく戦闘は発生しないとココから聞いたのだ。
「とりあえず、準備してきてくれ。」
「レームさんが言うのならそうしましょう。」
東野は強く頷く。二人は大部屋を出て行きそれぞれの自室に戻る。

東野は自室で床に置いてあるメディカルバックの中身を確認する。レームが言っていたいつもの道具のことだ。
赤地にスター・オブ・ライフのシンボルが描かれている肩がけのメディカルバック。基本的な医療器具全般、緊急外科手術器具が入っており、これさえあれば応急処置は可能である。
医療器具の他に横のチャック付きポケットにはＭ９２と予備マガジンを入れる。
未だに銃を手にすると手が少し震えてしまう。
東野は自分の両手のひらを見つめると、開いたり閉じたりして自分の両手が動くことを確認する。
緊張するとしてしまう癖である。これをすると自分の脳と身体がしっかりと繋がっていることがわかり安心する。
「ドクター、準備はいいか?」
レームが部屋の扉を開け声をかける。
「はい、大丈夫です。いつでも行けます。」
東野はレームの方を向きそう言うと、白衣を翻しながら立ち上がり自室を出る。
廊下を歩いていると東野がレームに問う。
「レームさん、先程も聞きましたがどうして急に戦闘準備を…
あと、戦闘なら私よりも他の人のほうが適任かと思いますが…」
「ドクターに来てもらったのは万が一のためだ、君なら人も救えるし銃も撃てる。

いまから行く理由は、何となく、嫌な予感がしたんだよ。しっかりとした理由を言うんだったら殺し屋の情報が来てたからだ。奴らはこういう治安のいい国で油断してる所を狙うんだ。
まぁ、俺たちが行って何もなければ良いのさ。」
「そういうことですか…それなら、何もなければいいですが。
もし、何もなかったら観光地の案内でもお願いします。」
「おっ、いいぜ。案内して差し上げよう。」
二人はエレベーターに乗りロビーまで降りるとココとバルメが行くであろうショッピングモールへ向かう。

「素晴らしい、このデザイン!そして免税の国!」
ココはショッピングモールの時計屋のショウウィンドウを見ている、ちょうど中庭側にショウウィンドウがあり辺りにはテラス席もある。
ココが見ている時計は男性がつける様な少し大型、シルバーで機械式、文字盤にクロノグラフが3つある時計。わりとゴテゴテした時計が好みのようだ。
値段は控えめに言っても安いとは言えない値段だ。この国の一般的な会社員の一ヶ月分の給料など軽く吹き飛ぶ。
「買おう!!」
ココの姿を後ろで見守っていたバルメがそれを聞くと勢いづきながら言う。
「ココ!私が買ってプレゼントしましょう!!」
「えっ、そんな、バルメ悪いよ…」
「デートしてくれたお礼です!ていうか愛の証です!」
二人共何故か顔を若干赤らめながら話している。
「ホントに?いいの…!」
「ええ、もちろんです!」
バルメは店の中に入るために入口へ移動する。ココが喜んでいることが嬉しくガッツポーズをする。
「んふふ〜」

喜びに浸っているココの右手を何者かが掴み、引っ張る。
それと同時に女の声が聞こえる。
「武器を売って生きる女。いつかは殺されるとわかっているのに。
何で？教えてよ？」
ココはとっさに振り向き手を掴んできた女の腕を掴み返し、頭を女の頭になすりつけながら叫ぶ。
「殺し屋如きが私に問うか!!私を、殺せたら、答えてやる!!
オーケストラ!!!」
「何だこいつ!!離せよ!」
女は相手が威勢よく攻勢に出るとは思っておらず、たじろいてしまう。
ココの声を聞いたバルメは銃を抜き、さっきココがいた中庭側へ駆け寄る。
チナツがココを振りほどくとテラス席にいた師匠がココめがけて銃を撃つ。
同じく二階からヨナがテラス席のパラソルを巻き込みながら飛び降りココを伏せさせ、遮蔽物へ移動させる。
チナツは師匠の方に駆け寄りながらバルメを狙い、発砲する。
バルメはチナツに狙われており柱の影に隠れている。
師匠は容赦無くココとヨナに向け発砲を続ける。

真っ昼間のショッピングモールで殺し屋と武器商人の銃撃戦が始まった。
銃声は喧騒を切り裂く。しばらくすると一時の静寂と主張の激しい炸裂音のみとなった。

第九話

ヨナのあとを追いかけていたレームと東野が大通りを歩いているとパシ、パチと突如乾いた破裂音がする。
「レームさん、銃声が。」
「あぁ、アルシュロップショッピングモールの方だ。急ぐぞ、ドクター。」
「わかりました。」
二人は大通りをショッピングモールの方へ走り出す。
距離が近くになるにつれて乾いた破裂音が、火薬が着火し銃弾が発射されたときのバシン、バシンという炸裂音になる。拳銃の音と共にアサルトライフルやサブマシンガンが発砲した連発音も聞こえ始めてきた。
遠くから警察車両のサイレンも聞こえる。
「だいぶ派手にやってやがるな。」
「そのようですね。こんな街中で銃撃戦なんて。」
「さっきも言ったが街中の方が不意打ちしやすいのさ。俺が殺し屋でもそうする。」
「私もそうしますね。」
二人が3，4分程走るとアルシュロップショッピングモールの入り口へ着く。
警察も既に到着していたようだが、入り口にパトカーが1台破壊され、煙を上げながらなぜか垂直に立っている。
その傍らには警察官が倒れている。
「おいおい、マジかよ。」
「レームさん、警察の方を助けないと。」
「ほっとけ、行くぞ。」
「いえ、悪いですが見捨てられません。
レームさんは先に行ってください、すぐ行きます。」
東野はレームの目を見つめ訴える。
東野は仲間や善良な人間の人命がかかっていると頑固になり、割と

言うことを聞かないということをレームはしっている。少し前、平時に足を捻った時も大丈夫だと言っているのに、しつこく具合を見せてくれと東野に言われ結局レームが折れてしまった。レームも、確かにいつもよりは治りが早かったから感謝はしている。
説得するだけ無駄だと思いながら、レームは東野に言う。
「ドクター。お前の悪い癖だ、時間がない。」
レームの言葉に食い気味に東野は答える。
「1分、1分で全員の確認、処置をします。」
「30秒、いや45秒やろう。」
「さすがレームさん、優しいですね。」
東野は口角を上げニコリと笑う。
「へっ、知ってるよ。とっとと来いよ。」
そう言うとレームはショッピングモールの中に入り銃声の方へ向かう。
東野の周りには3人の警官が倒れている。見る分には派手に出血している人間はいない。
一人に駆け寄ると脈もあり息もしている、「大丈夫ですか?」と呼びかけると「あ、あぁ…早く応援を…」と返事もある。負傷は腕や足に擦過傷。メディカルバックからガーゼと包帯を取り出し「これ自分で巻けますね?」と警官に渡すと「大丈夫だ、ありがとう…」と返答があった。
壁にもたれかかっている二人目は後頭部に挫傷と傷がある、多分後ろの壁に強く打ち付けたのだろう。この人も意識は覚醒している。冷感パック取り出しタオルでつつみ「これを後頭部に当てておいてください。」といい三人目に移動する。脳挫傷、脳震盪はこの場ではどうしようもないので救急隊に任せることとした。
三人目は座り込み無線で本部と連絡を取っている様だ、処置は必要ない。
煙を上げるパトカーのからシートの布やプラスチックが燃える臭いとガソリンの臭いがする。
それと一緒に肉が焼けている香ばしい、臭い。

動物の毛が焼けるときの硫黄臭の混じった、臭い。
慣れない人間がこの臭いをかぐと吐き気を催す。
車両の中から黒焦げた左腕がダラりと力なく出ているのを東野は見つける。パトカーへ東野が近づく。
中を覗くと一応人間の形をしている警官がいた。
顔面が焦げ燃え尽きた薪のように炭化、胸あたりの衣服は燃え皮膚に癒着しておりその皮膚も真皮、皮下組織が見えてしまっている。腹部からは赤い腸が出ている。
右腕は方から先、右足の膝から先は吹き飛ばされており骨とみずみずしい筋肉が見えている。
それを見た東野は顔色一つ変えず何も言わずに振り返りレームの元へ走り向かう。
レームは中庭に入る直前の壁の前にいて、インカムで他の仲間に応援を呼んでいた。
「はいはい、皆さん状況開始ですよぉ。」
東野はレームの後ろにつく。
「着きました、ちょうど４５秒です。」
「オッケー、一応武器構えとけ。」
「わかりました。」
そう言われた東野はＭ９２を取り出しマガジンを挿し、セーフティを外しスライドをコッキングする。
「まだ撃つな。合図したら俺の後ろから撃て。
落ち着いて撃てば当たる。訓練通りにするんだ。」
「わかりました。」
状況を見ようと東野は中庭の方をうかがい見る。
そして初めて見る殺し屋とはどういうものなのか気になった。
殺し屋　オーケストラを見た東野は目を疑った。
「片割れが、こ、子供、しかも女の子じゃないですか…!?」
「子供だからって油断するなよぉ。もうバルメが撃たれてる。」
大丈夫だ、足撃たれただけだし、バルメは頑丈だからな。」
東野の頭の中から殺し屋に子供の女の子がいたという驚きは頭か

ら離れ、レームに問いかける。
いつも朗らかで明るい東野に少し焦りが見える。
「えっ、足のどこですか？」
「太ももだよ。」
「太腿のどこらへんでした？」
「そこまではさすがに見えなかった。」
「早く止血をしないとマズいです。」
「もちろん、わかってるさ。
ヨナくんもいるから大丈夫だ。」
そう話していると中庭の花壇に隠れていたヨナが師匠に向かってＭＰ５を乱射しながら突撃する。
師匠もヨナに向けてＡＫを乱射している。
「まったく、これだから少年兵ってのは嫌いなんだよ。」
レームはそう呟くとカラビナを取り付けたパラコードとポケットから取り出すとカウボーイの様にくるくると回し「よっ」っと言いヨナの足元目掛け投げる。
投げられたパラコードはヨナの右足に絡みつき、ヨナは転倒する。
「命中、さすが俺～。」
レームはパラコードを引っ張りヨナを、自分と東野の方へ引き寄せる。
師匠の追撃は無い。チナツが止めたようだった。
「ヨナくん一本釣り～。」
ヨナを引き寄せるやいなや、レームの顔面にヨナの蹴りがクリーンヒットする。
「おぉ…痛そう…」
思わず東野が言葉を漏らしてしまう。
「何するんだ、レーム!!
あと少しで仕留められた!!」
ヨナは怒りの表情でレームに怒号をぶつける。
「落ち着けよ。
どうしたいつもの紳士的な君が今はまるで獣の様だぜ。」

レームはいつもの口調で諭しながら、ヨナの足に絡まったパラコードどほどく。
「確かに仕留められただろうよ、だが君も死んでたね。
殺し屋の乗りに乗せられてじゃねーよ。邪魔されてムカつくか？
俺はそれ以上にムカついてるぜ。少年兵の戦い方ってのは本当に頭にくる。」
レームは加えていたタバコに火をつけ、息を吸い吐き出す。
「いいか、覚えろ。」
「うちは殺し合いなんてやらない。やるとしたら一方的な殺し。
捨て身の突撃が必要な状況は訓練に訓練を重ねたテクニックで補え。
そして忘れろ、少年兵よ。」
横で見ていた東野は戦闘時のレームを見るといつも驚いてしまう。
普段のレームと戦闘時のレーム、まるで別の人間だと思う程のオーラを感じる。
まさに殺しのエキスパートなのだろう。
レームがヨナへの説教を終えるとココとバルメが向かってくる。
バルメは左足の太ももを撃ち抜かれておりココに肩を貸してもらっている。
ココが呼びかける。
「ヨナ、レーム、ドクター。」
「ヨナ、こいつで誘導して援護もする。
ココを守って逃げ回れ、出来るか？」
レームがヘッドセットをヨナに渡すと、ヨナは頷く。
「ココ、手を離さないで。」
「了解。」
ココとヨナはショッピングモールの裏手へ回るように走り出す。
「ドクターはバルメの手当をしてやれ。」
「そのつもりです。
バルメさん、そこに座ってください。」
「ったく、何ヘマってんだよ。」

レームはそう言うとオーケストラに向けて発砲を始める。
しかしチナツがレーム達の方を向き盾で防ぐ。
「チッ、クッソ防ぎやがったマジかよ。」
「４５口径は重いよ！」
チナツは盾で・４５ＡＣＰを受けながら言う。
「絶好の不意打ちのタイミングだったんだがねぇ、いいカンしてるぜ。」
「敵を褒めないでください、レーム！」
「バルメさん、早く座って頂けます？」
東野がバルメにそう促す。いつもより少しだけ顔が怖い。
「あ、はい…」
バルメはちょっと萎縮してしまった。
東野はバルメが座るとメディカルバックを床に置き、
救急用ハサミを取り出し左足太腿部分のジーパンを切り、傷の具合を確認する。
撃たれたのは左足太腿の外側部分、大腿動脈に損傷は到達していない、貫通射創ではなく深い擦過射創。
とはいえ銃創自体は負傷の中では重傷だ。
ドクターが手当をしている横ではレームと師匠が撃ち合っている。
師匠は「シケた音混ぜんじゃねぇ！俺の音楽をブチ壊す気か！この野郎!!」と叫びながらこちらにＡＫを乱射している。
それに向けレームも軽口を叩きながら応戦している。
東野はそんな銃声にも気を留めずに淡々と処置を行う。
「弾は抜けてます、とっとと止血しましょう。
あと、あまり見ないほうがいいですよ。気分が悪くなりますから。」
止血帯を取り出し傷口より上の部分を縛り上げる。これで一時的に出血を止める。
続いてコンバットガーゼを2枚取り出し傷口に二重にして当てる。
その上から更に救急用外傷包帯を、手早く巻きつける。
ものの1分程で処置が終わる。
「包帯は巻き終わりました、止血帯を緩めます。

一旦血がまた出て来ますが、ガーゼに止血剤が入っているので直に止まります。
というか、カスッたとは言え風穴開けてるのによくピンピンしてますね。」
「身体が頑丈なのが取り柄ですから…」
バルメは驚いた。
いつも動きがゆったりと緩慢である東野がとても素早く傷の手当をする姿、手の動きに一切の迷いが無く正確に必要な動作を行う。
表情を見てもいつものニコニコした顔ではなく、自分たち傭兵や軍人と変わらない目付きで手当を行っていた。
それに普通の人間なら怖がる銃声の中、しかもこっちに向かって乱射されている状態で平然と処置を行う平常心、一応は銃声に慣れているとはいえ中々肝が座っているとも思った。
「うるせぇ！死ね、ジジイ！」
銃声が一旦鳴り止むとオーケストラの師匠が叫びながらＡＫをこちらに投げつける。
「こんな奴ら放っといて行こ！師匠！」
チナツが盾を捨て師匠の手を引きショッピングモールの外へ飛び出す。
レームがオーケストラが立ち去ったのを確認してから言う。
「行ったか。よし、移動だ。
ドクター、バルメを支えてやれ。」
「すみません、ドクター…」
「いえ、これが私に出来る唯一の仕事ですから。」
東野はバルメに肩を貸し立ち上がる。
レームは携帯で他の仲間にピックアップするように伝える。
バルメが口を開く。
「レーム、あのテンガロンの小娘があのイノシシ男をうまく制御しています。」
「バルメもそう思った？まるで武器管制システムだ。」
「しかし、多分まだ１６，１７歳くらいの子供ですよ？そんなこと…」

東野が口をはさむ。
「それくらいの年齢なら社会的に働ける年齢だ。
多分、あのテンガロンは何人も殺ってる。」
「嫌な世の中ですね、本当に。」
「ドクター、あなたらしくないですね。」
肩を借りているバルメが東野の顔を覗き込む。
「いえ、子供を殺さないと誓いながら子供に殺されそうになるなんて。
少し滑稽に思えまして。」
「君は君の信念があるならそれでいい。
他の人間がことを済ますだけさ。」
普段ネガティブなことを言わない東野がそんなことを口走ったのので、レームは東野を励ます。
「あの男と、テンガロン、なんとか切り離しを考えよう。」
大通りに出ると他の仲間が乗ってきた車が到着しバルメと東野が乗り込み、トージョ降りレームと共に指揮に回る。
ウゴが運転する車はスキール音を上げ発進した。

第十話

ウゴの運転する白いＳＵＶは交差点を抜け海岸線沿いの道へ出る。
海岸線の歩道を走っているココとヨナをアールが見つける。
「いた！見つけた！」とアールが声を上げると、マオが「拾いますか？」とバルメに判断を仰ぐ。
「いいえ、並走です。この車を盾に。」
バルメがそう言うとウゴはココ、ヨナの盾になるように車が並走させる。
その後ろからは既にオーケストラ　チナツが運転する赤いピックアップトラックが追いかけてくる。
荷台には師匠が仁王立ちしており、ネゲヴＬＭＧを片手で軽々と持っている。
オーケストラの車がウゴの運転する車と並走する為に加速し、間を待たずに横並びとなる。
「軽機関銃を片手で持つなんてどんな腕してやがるんだ！
ドクター俺の足押さえて支えてくれ！」
アールはそう叫ぶとＡＵＧを手に持ち、車から身を乗り出すと射撃を始める。
「わ、わかりました！」
東野はアールの両足を腕で抱きかかえるようにしてアールが車から落ちないように踏ん張る。
「タイヤ撃て、アール！」
マオもサンルーフから身を乗り出しＧ３６で射撃を始める。
「わかってるよ！喰らえ！」
アールはタイヤを狙って引き金を引くが。ただでさえ不安定な射撃姿勢に加え地面のギャップを拾った車がバンプし照準が定まらない。
車内にいるバルメも東野のメディカルバックから取り出したＭＰ５で応射する。
荷台に乗っている師匠はネゲヴを腰だめで乱射している。発射さ

れた弾丸は容赦無くウゴの運転する車に襲いかかる。
幸いＥＮ―Ｂ６相当の防弾化をしている車なので５．５６ｍｍＦＭＪでも耐弾性があり、弾は車体にめり込んだり跳弾している。
ガラスももちろん防弾ガラスだ。
マオの撃った弾がチナツの運転する赤いピックアップトラックの後輪にあたり、パシュという空気が抜ける音と同時にピックアップトラックが左右に振られる。
そのままスピンするかと思いきや車を立て直し加速し、先のブロックを左折する。
「…あ〝っ、ヤバイ、ヤバイヤバイ!!」
いつも冷静なマオがいきなり焦り始める。マオは横を走っているココに向けて叫ぶ。
「ココさん！Ｍ２です！
奴らリアシートにＭ２重機関銃を固定してる！」
「えっ、何考えてんの!?」
走っているココの顔が呆れと驚きが混じった顔になる。
「５０口径だとこの車の防弾板だと防げませんよね？」
東野がバルメにきくと、バルメは答える。
「えぇ、そのとおりです。この車の防弾板なんていとも容易く貫通してきます。」
「それはなかなかスリル満点ですね。」
「なーに言ってんだドクター！
当たったら腕や足なんて簡単に吹き飛ぶぞ！」
アールが車内に視線を向け東野の顔を見ながらいう。
「えぇ、今まで何回も見たことありますから大丈夫ですよ。」
「ハッ、なら問題ないな！」
「撃たれたこともありますよ。」
東野が口角を少し上げ、ニヤリと笑う。
「二人とも敵が来てるのに雑談してる場合ですか!!!
後ろから奴らが来てますよ！」
アールが車の後ろに視線を戻すと交差点をドリフトしながら赤い

ピックアップトラックが曲がってくる。
「来た！」
「エンジンを狙え！エンジン!!」
マオ、アールが叫びフルオートで射撃する。
「よ、横薙ぎにされるっ！」
ヨナに手を引かれながら走るココが言う。
オーケストラの車はどんどん距離を詰めてくる。
荷台では師匠がネゲヴを腰だめで撃ちまくっている。
マオ、アールもエンジンを狙い射撃を加えている。
もう、オーケストラの車、ウゴの車。３台分も離れてない距離になる。
「ダメだもうヤバイ！車内に戻れ！」
アールがマオにいうと二人は車の中に戻る。
「アンサンブルだぜ！」
車が近づき、そして師匠が叫ぶとチナツはアクセルを踏み込みハンドルを素早く切り、パワースライドの要領で車を横滑りさせＭ２の銃口を皆の乗っている車に向ける。
「発射！」
ハンドルに増設した赤いボタンを押すとＭ２重機関銃の発射レバーがチナツお手製工作によって押され弾丸が発射される。
重機関銃という名前の通り重々しい名前とは裏腹にダダダダダダという軽快なリズムだ。
しかし、周りの音が聞こえなくなるくらいの発射音、車の中にいてもわかる衝撃波、音速の３倍で飛来する弾丸の３つがごちゃまぜになりながらウゴの運転する車に突き刺さる。
リヤガラスは粉々に砕け、車体後方にも数発当たる。
被弾の衝撃で車体が左右に振られ、左後輪にも被弾しタイヤとホイールが粉々に砕け散る。徹甲弾ではなく通常弾だったため後方の防弾板はギリギリ耐えている。
しかし、このまま並走すると横っ腹を撃ち抜かれる。
「対ショック姿勢!!」

ウゴが叫ぶ。
「「とっくに対ショック!!」」
マオ、バルメ、アール、東野は頭を下げ腕で頭を抱える。
ウゴは左後輪が無くなりハンドルが左に取られるのを押さえつけ右に精一杯ハンドルを切り、アクセルを踏み込む。
４輪駆動のＳＵＶは残りの３輪で無くなった１輪を引きずりながらガラガラと音を立て歩道に向かう。
歩道に歩行者がいないのが幸い、歩道と車道を隔てるポールに車が激突し停止する。
車は慣性に従い、激突した勢いのまま前方につんのめり後方が完全に浮いた状態となった。
「なにっ!?」
Ｍ２重機関銃を撃ちながらオーケストラの車はポールに激突し止まった車の横を通り抜ける。
横薙ぎには出来なかった。
Ｍ２重機関銃の弾薬が尽きそのまま走行しているとエンジンオイルに引火しフロントグリルから火が上がる。
「師匠!急ぐのだ!」
「チッ、クソがッ。」
チナツが運転席から降り、師匠も荷台から飛び降りコンテナ群の方に走り出し身を隠す。
ウゴの運転していた白いＳＵＶは後方がゆっくりと地面に向かい落ちだし、そして完全に着地する。
「痛ってぇ…マジかよ…頭がクラクラするぜ。」
アールは頭を擦りながら身体を起こす。
「みんな大丈夫か。」
ウゴが皆に呼びかける。それぞれが「あぁ。」「問題ありません。」など返事をする。
「とりあえず、外に出よう。」
マオが皆を移動させるように促す。
全員が外に出ると東野は乗っていたメンバーの怪我の具合をすぐ

さま確認する。
「皆さん、外傷はなさそうですね。無理せず座ってて下さい。
もしかしたら、むち打ちになってるかもしれないので後で確認しましょう。」
マオが右手を東野に差し出しながら話しかける。
「ドクター、手を捻ったみたいだ…
車が衝突した時にダッシュボードの所に手をついてしまってね…」
東野が差し出された右手を見ると手首から小指にかけて手の甲側が腫れている。
「ちょっと触ります、痛かったら言って下さい。」
「わかった…」
東野はマオの右手を左右から掴む。ちょうどゲームのコントローラーを持つ感じだ。
左右の親指をマオの指の付け根から手首に向かって数回押し上げながら移動させる。
「痛っつ…!」
「ここですね?」
東野は再度マオが痛がった部位を軽く押す。
「そこ、そこだから押さないで。」
状況と疼痛を訴える場所から察するに掌側橈骨手根靭帯損傷および骨間手根間靭帯損傷。いわゆる手首を強くついたときにする捻挫の一つだ。
見たところすべての指に力が入っているので靭帯が完全に断裂している場所はなさそうだ。
「捻挫です、軽く固定しましょう。
なるべく力を抜いて下さい。」
メディカルバックからテーピングバンドと医療用ハサミを取り出しマオの手をどんどんテーピングで固定してゆく。
親指の付け根あたりを斜めにグルリと一周、その後それを覆うように手首から親指と人指し指の間に一周。
これで橈骨と手根骨の緩みをもとに戻す。

手首から薬指と小指の間をまたぎ、斜めに手首に戻るように巻き橈骨と手関節を締める。
そして手関節に2周強めに巻き、手首を固定するとともに橈尺関節の固定を行う。
「これでしばらくは大丈夫です。
少しなら動かしても痛くないようにキツめに巻きました。」
バルメが驚いたようにマオも東野の素早く正確な手さばきに息をのむ。
「もしかして、君ってすごい優秀な医者だったりする?」
マオは思わず聞いてしまった。
「いえ、ただのお人好しなそこら辺にいる人間です。」
東野はニコッと笑い答える。
その横ではバルメが車に身を隠しながらあたりを見回している。
バルメがあたりを見渡すと海に通じる階段の所にココとヨナを見つけた。
ヨナは階段をゆっくり上がり様子を伺おうとしている。
ヨナが頭を少し出した瞬間銃声が聞こえる。
「まだ、奴ら生きてます。ヨナくんを援護しないと。」
バルメは立ち上がり車の中から銃を取り出そうとする。
「うっ…!!」
だが、ショッピングモールで怪我をした左足から崩れ落ちる。
「ダメです、バルメさん。
あなたも立派な怪我人です、無理しないで下さい。」
「しかし、ココとヨナくんが。」
「レームさんとトージョさんが既に裏に回っています。
先程、無線が来ました。身を隠して安全を確保しろとのことです。」
東野はヘッドセットをつけている右耳あたりをコンコンと叩く。
「そうですか…わかりました。」
バルメは表情を曇らせながらも座り込む。
「俺は大丈夫だ。」
「俺もとりあえずは大丈夫だ。若干、頭が痛いがな。」

ウゴとアールがドクターに伝える。
「わかりました。
アールさんこの後はどうしましょう。」
「レームが身を隠してろって言ってたんならそうしてよう。
ルツとワイリが狙撃ポイントで待ち構えてるんだろう。
というか、ドクターは大丈夫なのか？」
「私は大丈夫です。メディカルバックがクッションになったようです。」
「医者が自分のこと大丈夫って言うなら大丈夫か。
ドクター、あのコンテナの方に銃構えとけ。」
「わかりました。」
東野はＭ９２を構えボンネット越しにコンテナの角、オーケストラの方向に照準を合わせる。
ウゴは後方の警戒を行いアールも車体後方で銃を構えている、マオとバルメは前方の警戒を行っている。
まだ、ヨナと撃ち合っているようだ。
オーケストラの師匠が大声で話しているが何を言っているかまではわからない。
そして、オーケストラの師匠がコンテナの角から飛び出してくる。
東野が指をかけた引き金を引くよりも早く、３３８ラプア・マグナムの弾丸が師匠の心臓を貫通する。
師匠が崩れ落ち膝を着く、同時に銃声が聞こえ頭が脳をぶちまけながら弾け飛ぶ。
その約３秒後に２回目の銃声が聞こえてくる。
「これが狙撃…」
東野はそう呟く。
師匠が頭を撃たれ倒れると、甲高い金切り声の様な悲鳴が聞こえてくる。
「あの女の子ですか、無理もないです…」
東野は照準器を覗いている目を細める。まだ、チナツが何か叫んでいるのが聞こえる。

叫び声が終わるとフラフラとした様子でコンテナの影からチナツが出てくる。
「私は…無力だ。」
東野は目をつぶり、銃声を待った。
銃声より先にガキュンという金属が破断されるような音が聞こえ目を開ける。
倒れ込んでいるチナツが東野の目に映る。チナツは横に落ちているベレッタＭ８０００とロザリオについていた十字架を拾うと立ち上がり東野の方を一瞥する。
目が合う、だが双方とも銃を撃たない。
すぐにチナツは走り出しコンテナの奥へ消え東野の視界から消える。
奥にいるレームとトージョが発砲する音が聞こえる。
その銃声もすぐに無くなりインカムから「行っちまった。」というレームの声が聞こえる。
その声を聞いた東野はＭ９２のセーフティをかけると腕をダラリとさげる。
「行ってしまったようです。」
「そうか、他のみんなと合流しよう。」
アールは皆に呼びかける。
「いえ、このまま戻るみたいですよ。」
バルメはココが手をグーにして、腕を振っているのを見るとそう言う。
横に柄の悪そうな細身の男と警察官がいるのも見えた。
「姉御、支えるぜ。」
「ありがとうございます。」
バルメはウゴの肩を借りて立ち上がる。
「こっちの道だ、行こう。」
アールが先導しその後ろに他のメンバーはついて行く。
ゆっくりと元いたホテルへ戻る。
歩いていると皆、空腹を感じた。もう、１時をとうに過ぎている。

東野は胸ポケットからタバコを取り出し火をつける。
ふぅー、と息を吐き出す。
空腹は紛れたが心の霧は晴れなかった。

第十・五話

「コッヘル鉗子！」
「はい！」
　東洋系の顔立ちで銀縁眼鏡をかけた男が看護師に叫ぶ。現在、外傷で右側頭部に発生した血腫を除去し縫合する段階だ。男は目を細めながら、器用に鉗子を操り素早く縫合を行う。手術用帽子をかぶっている額からは汗が流れ出ている。
「縫合完了、次の病院行きの車両に乗せて下さい。」
「わかりました。東野先生、次の患者麻酔導入完了してます。
　15分後にオペに入ります。」
「わかりました。急いで準備します。」
　東野は手術用エアーテントから出ると横に置いてあるゴミ箱へ手術衣と手袋を捨てる。そして準備用テントに入り手術の準備を行う。
　メガネを外し顔を洗うと、汗が流れスッキリとする。手術用エアーテントはある程度空調が効いているとはいえ、手術衣を着ていると暑いのだ。
　朝8時から連続6人目のオペだ。朝食だけ食べ昼食抜きで行い既に8時間は経過している。
　一息付く間も無く民間人、軍人問わずに負傷者が立て続けに来る。これが深夜まで続くのだ。
　顔を拭くと手術衣を着て、手洗いを始める。休んでいる暇はない、素早く丁寧に手術時手洗いを行う。
　手洗いを終え手袋をつけ、手術用エアーテントに向かう。
「準備できました。お願いします。」
「はい、開けます。」
　中から看護師がファスナーを下げて入り口を開ける。テントに入ると15歳くらいの子供が手術台に寝ている。
「容態は？」
　東野が看護師に尋ねる。
「不発弾で左足を負傷しています。術前計画では切除と…」

「私が執刀ということは…整形外科のユルヤナ先生は手が空いてないんですね？」
「はい、他のオペを今行っています。
術前計画はユルヤナ先生がされたものです。」
「わかりました、計画書を。」
「こちらです。」
東野は渡された術前計画書をに目を通す。四肢切除は実際に執刀した経験が三回がある。
（不発弾で左足、脛中程下から負傷。現在は止血してあるが壊死が始まっている。
切除は可能な限り膝から上、執刀医の現場判断で変更しても良い…ですか。
ユルヤナ先生、私が執刀すると知ってて書きましたね。）
計画書を台へ置きいつでも見られるようにする。
「オペを開始しましょう。
計画では可能な限り膝より上の切除と書いてありますが、この子の将来を考え膝下の切除とします。
お願いします。」
東野はメス、と言いオペを開始する。

―――

「ふぅ、今日も疲れました。」
東野が担当するすべての手術が終わり寝るテントの前でタバコを吸っている。午前２時３２分、空には星が輝いている。
ここはアフリカにあるＬ国南部、ＡＡＭＳＴ医療支援キャンプ。東野がＡＡＭＳＴに登録し初めて来た場所である。
Ｌ国では政府、新政権の内戦が発生し多くの負傷者が発生している、男、女、老人、子供、民間人、軍人。どの人間も傷ついている。東野が支援しているのは政府側で、相手は新政権側である。新政権側は金で民兵を雇っており装備の差で政府側を圧倒している。
通常、ＮＧＯが軍に対しての支援は行わないが軍の負傷者が軍病院のキャパシティを超えているらしく、軍の支援ではなくあくまでも人

道支援ということでこのキャンプでも治療を行っている。
そして支援キャンプの人手不足も解消されない、物資は問題ないのだが。外科手術ができる医師は自分の領域を超えてそれを行わなければならない状況だ。現に東野の外科の専門は心臓血管外科であるが整形外科の手術も行っている。それに加え回数をこなさなければならない。
東野はゆっくりと煙を吐き出し、吸い殻を灰皿へ捨てる。
「報告書を書いて寝ますか。」
テントの中に入りファスナーを閉める。
報告書を書き終えたのが1時間半後、そして床につく。

床についてすぐに朝になってしまった。
東野は着替え外に出るとL国兵士と医師たちが話している。
「ですから、あなた方に来ていただきたいと何度も言っているでしょう!」
「しかし、我々は…」
東野はその話の輪の中に入ってゆく。
「どうしたんですか?
緊急のことでしょうか。」
医師の一人が答える。
「あぁ、東野。緊急の話といえば緊急なのだが…」
「自分から話しましょう。」
L国兵士が口を開ける。
「先程も話した内容ですが、前線付近のメディック1名が昨日の戦闘で負傷してしまい後送するまでの手当が難しい状況です。
現在、我が部隊のメディックが残り2名しかおらず重傷者の搬送等も難しくなっております。
ですから、AAMSTの先生方どなたか1名でいいですので我々の手伝いをしてもらえないでしょうか、というお話です!
3日でよろしいのです!そうしたら新たなメディックが来るのです!」

Ｌ国兵士は内容を述べるが、医師達は苦い顔をしている。
第一に危険な場所に行きたくないということだ。このキャンプが完全に安全とは言い切れないが、少なくとも前線のメディックに比べれば安全だ。
第二に軍への介入という形になってしまう可能性があるということだ。ＮＧＯが一つの軍の兵士を助けるために前線へ行くというのはあまり良い形ではない。あくまでも全体的な人道支援であるべきなのだ。
「先生方、お願いです！どなたか１名でよろしいのです！」
「我々はあくまでも医療支援が目的で…直接的なものは…」
「ですから、そこをなんとか！」
「私達だけの判断だけではそれはできないのよ。」
「まだ、民間人もいるのです！」
「うーん…」
押し問答を聞いている東野がゆっくりと手を挙げる。
「私が行きましょう。上に掛け合います。」
「東野！危険だぞ！」「そうだ、新政権側の民兵がいるんだ。」「危ないわ！」
他の医師は口々に東野に言葉を投げかける。心配しているのだ。
「民間人がいる地域はどこでしょう？」
東野は兵士に質問する。
「はっ、この付近です。」
兵士は地図を取り出し場所を指し示す。この医療支援キャンプから北に向かった市街地だ。
「そうしたら私はその地域限定で動きましょう。
それなら民間人を助けるという名目で活動ができると思います。多分それなら上も承諾します。」
「先生！ありがとうございます!!」
兵士は東野の手を握り強く振る。
「では、自分は待機しておりますので、出発可能になりましたら声をかけて下さい。」

兵士はキャンプ入口に停めてある車に向かった。
兵士が離れると医師達が東野に詰め寄る。
「東野、本気か？」
「えぇ、本気ですよ。」
「戦闘している地域なのよ、危険よ。」
「ここだって安全ではありませんから、同じですよ」
「オペをする医師が…」
「３日間だけです、申し訳ないですがお願いします。」
皆、詰め寄るがちょっと待って下さいと静止する。
「皆さんが心配してくるのはわかりますが、軍人も人間です。
民間人が取り残されているとなれば放っておくわけにはいかないでしょう。
みなさんが心配してくれるのは感謝しますが、私には行く義務があるのです。」
東野の言葉に医師達は押し黙ってしまう。
一人の医師が言う。
「わかった、君の考えを尊重しよう。そして医者がすべきことは人の命を救うことだ、君の考えは素晴らしい。
必ず戻ってきてくれ。」
「もちろんです、皆さんありがとうございます。」
東野はテントに入り衛星電話を取り出しＡＡＭＳＴ本部へ電話かける。
これこれこういう理由です、承認をお願いします、と東野が話すと少し待ってくれと言われた。
５分程待つと相手が言った、民間人がいる地域での活動のみ許可する、軍人だけではなく民間人の治療も行うこと、指定区域以外の危険地域の活動は自己責任となる、これが条件だ、書類は直ぐに作成するので電子署名をしろと言われた。東野はもちろん快諾した。
電話を切ると、持ってゆく物の準備を始める。ＡＡＭＳＴと書かれた赤いメディカルバックにどんどんものを詰めてゆく。
準備をしているとパソコンがメールが来たことを知らせる通知音

を発した。先程の書類だ。電子署名をすると直ぐに送り返した。
必要なものを詰めたバックを肩に掛け東野はテントを出る。入口に数人の医師がおり、見送ってくれるらしい。
「東野、気をつけろよ。」
「戻ってきてね。」
「皆さん大げさですよ。
負傷者が居るのはある程度戦闘地域から離れた場所ですから、大丈夫です。」
東野は笑顔で見送る医師に話す。
「では、先生行きましょう。」
「わかりました。」
東野は車に乗り込む。車が走り出すと先程の兵士に話しかける。
「で、実際はどうなんです?少なくとも安全ではないでしょう。」
「そ、それは…」
兵士は口ごもる。まさか出発早々そんなことを言われるとは思わなかった。
「大丈夫ですよ、覚悟してきてますから。
まさかあそこで本当のことは言えないでしょうから。お願いします。」
「…市街地南部に我々、北部に敵がいると言った状況です。
民間人もまだいるため侵攻もしずらく敵兵はそれを逆手にとっています。」
「なるほど、なかなか危険ですね。」
「先生の身は我が部隊が守りますので、治療をお願いします。」
「えぇ、こちらこそお願いします。」
ニッコリと笑顔で兵士を見ると不思議な顔で見返される。
(なぜ、この医者は戦場に行くってのに笑顔なんだ…不気味な医者だ…)
東野はその顔を横目に窓を開けタバコに火を付ける。
―――
市街地南部につくと政府側の軍人が土のうで陣地を組んでいるの

が見られた、他にテントや装甲車もある。銃声も聞こえてきた。
東野と兵士を乗せた車が止まる。
「ここ周辺が現在、我々が占領している地帯です。
先生は市街地手前で活動をお願いします。」
「わかりました。」
東野と兵士は車を降りる。東野は車から降りると赤文字でＡＡＭＳＴ、赤十字が描かれた腕章をメディカルバックから取り出し、左の二の腕に白衣の上から付ける。次は腕章ではなく同じものが描かれた布を取り出し、兵士にそれを自分の背中に付けさせる。
「先生、念の為これの持っていてください。」
先の兵士がＶｅｋｔｏｒ　Ｚ８８とホルスターを差し出してくる。
しかし、東野は手のひらを差し出し受け取るのを拒否する。
「私はあくまでも医療要員としてここに来ています。武器の携行は望ましくないでしょう。」
「敵兵が来る可能性もあります。携行をおすすめします。」
少し考えたあと東野は手を伸ばし銃を受けとる。
「…わかりました」
東野はホルスターを腰に巻きＶｅｋｔｏｒ　Ｚ８８を挿す。
銃の扱いはＡＡＭＳＴに登録したときに教育を受け、実際に撃った経験も一応ある。
「負傷した者はあちらにいます。先生、お願いします。」
兵士が手を指した方向に負傷兵や保護された民間人がいるタープテントがある。
「もちろんです。」
東野はそちらに向かう。
Ｌ国のメディックは2名とも現在、市街地前線の方におり後方の治療がほぼできていない状況であるということは先程聞いた。
軍人は基本的にはやはり銃創が多く、やけど、破片や瓦礫等による創傷、打撲。形態は様々だ。民間人は擦過傷などの小さい怪我が多い。
物資が入っているとみられる木箱はタープテントの横に1つだけ

置いてあった。
それを見た東野は近くにいたＬ国兵士に言う。
「医官…いえ、軍医や看護師はいないのですか？」
「いない。今は俺達が出来る限りの処置をしてるだけだ。
あんた、医者だろ？早く直してやってくれ。」
兵士は苛立ちの表情を浮かべながら吐き捨てる様に言うとどこかへと行ってしまう。
それを無言で見送った東野は木箱に近づきふたを開けて中身を確認する。
緊急圧迫包帯、消毒液、輸液用のリンゲル液、医療用モルヒネ、強心剤、外科用術具などが入っていた。
（本当に最低限の物しか入っていない…）
東野は木箱を閉めると、自分が持ってきた手術用手袋をはめると重傷者から治療を始めた。
重傷者も止血処置はしてあったので輸液を行う。止血帯を緩めると再出血してしまうような者は縫合を行い、四肢が切断されてしまっている者は傷口の保護をし、やけどの者には消毒液で傷口の化膿を防ぎ保護をする。
幸い、前線からの負傷者は現在は軽傷の民間人が主であり大きな処置を必要な者はいない。
東野が懸命に治療をしていると、到着した時間から既に４時間程経ち昼過ぎになった。
大方のことはやり終え少し落ち着いた。
東野を連れてきたＬ国兵士が話しかける。
「先生、そろそろ昼食を取られては？」
「もうそんな時間ですか。そういえば、私朝食も食べてませんでした。すっかり忘れていました。」
「これが先生の分です。我々の戦闘糧食ですが…適当な場所で食べてください。」
「全く問題有りません、頂きます。」

東野は戦闘糧食を受けとる。真空パウチされたパン、野菜と肉のスープ、チョコレートバーだった。後ろのカロリー表示を見ると合計で２５００　ｋｃａｌに届く程だった。こんなものを運動をせずに毎日食べていたら3日で太ってしまう。朝から何も食べていない東野にとっては丁度いい。

真空パウチを切り食事を始める。味はそこそこだ、パンが異様にパサパサで口の中の水分が全て持っていかれてしまう以外は。

昼食を食べ終えタープテントから少し離れた所でタバコを吹かす。

周りが迷彩服を着ている兵士しかおらず、その中で白衣を着ている東野だけ景色から浮いている。そしてＬ国兵士達も異様な目で東野のことを見ている。聞こえてくる声もなんだあの医者は、大丈夫なのかあいつなどだ。

タバコを吸い終わるやいなや、一人の兵士が担架で運ばれてきた。

「ここだ！ここに置け！」

「大丈夫か！」

担架を運んでいる兵士が叫んでいる。

東野はその様子を見るとタープテントに駆け寄った。

「撃たれたのですか？」

「見りゃわかるだろ！そうだ！」

「とっとと、やってくれ！仕事だろ！」

「わかりました、どいて下さい。」

二人の兵士を両手で押しのけた。

東野の顔は無表情だが、若干眉間にシワが寄っている。先程の兵士の言動にほんの、ほんの少しだけ苛ついたのだ。

寝ている兵士の腹部には緊急圧迫包帯が巻きつけてある。意識は朦朧としており、血圧の低下が考えられる。

（この様子だと、腹部の銃創…もたもたしていると失血死してしまう…）

医療品が入っている木箱に近づき止血剤を探す。

（パウダータイプでも、パッドタイプでもいいから何かないでしょうか…）

直ぐに箱の奥の方に2箱ではあるがパッド型止血剤があるのを見つけた。
（よし、これがあればだいぶ楽になりますね。）
止血剤を取り出すと、まず輸液を始める。そして腹部の包帯を解く。傷口は3ヶ所あり血が溢れ出してくる。兵士をの持ち上げ背中側を見ると、そこにも傷があり弾丸は貫通したものだとわかった。東野は腹部と背中の傷に丸めた止血剤を突っ込む。４０秒程で止血剤が血を吸い膨らむことで患部の止血をしてくれる。消毒液で傷口を丁寧に拭き、新しい包帯で巻く。
包帯を巻くと言ってもたった一人で、寝ている男の腹部に大きい包帯を巻くのだから慣れていない人間ではなかなかうまく行かないのだが東野は平然とやってのける。
（輸液で血圧は保てるでしょうから、病院に運んで外科手術で正常な状態に戻せればなんとかなりますかね…）
「大丈夫なのか。」
担架を担いでいた兵士の一人が東野に尋ねる。
「とりあえずは、ですね。」
「そうか。実はそいつ前線のメディックの一人なんだ。
運悪く撃たれちまって、前線での重傷者の治療が出来なくなっちまった。」
それをうつむいて黙って聞いていた東野だが、兵士はいきなり叫んだ。
「俺たち政府側は装備も人も足りねぇんだ！クソッ！
せめて、弾を銃を！よこしやがれ!!そしたらあのクソッタレ共にしこたまブチ込んでやるのに!!!
なんだって、民兵ごときに！仲間が…！国の奴らが!!」
兵士の心の声だった。自分の国で余所者が闊歩し、自分達にそれを止められるだけの力がない。兵士は握りしめた拳を振り上げることもなく震わせている。その震えに同調し肩に掛けてあるＡＫがカタカタと音を立てている。
もう一人の兵士もうつむいて地面を見つめている。

それを見た東野は顔を上げる。
「私が前線まで行きましょう。」
「バカヤロウ！お前みたいな医者がでる幕じゃねぇ！」
兵士は叫ぶ。
しかし、東野はそれに食い気味に答える。
「いえ、前線で処置をしてここまで運べればその分生存確率は上がるでしょう。
もちろん、私は危険に晒されますが。」
「お前、正気か？戦場を舐めてるだろ!?飛び交う弾丸とバカでかい銃声。それを聞いただけで震え上がっちまう兵士だって居るんだ。敵がこちらに銃を向けて殺そうとしてくる。あちらこちらで爆発だぁ、叫び声だぁが聞こえる。お前みたいな医者じゃ５分も持たねぇよ、すっこんでろ！」
「さぁ、やってみなければわかりませんよ。実際の戦場ではないですが医療現場という戦場にはいました。」
「同じにするんじゃあねぇ。命の奪い合いだぞ。」
「命をやり取りするってことなら全く同じです。」
しばらく東野と兵士は言い合っていた。
兵士は前線に医者など連れて行ったら足手まといだと思っている、しかし実情は劣勢で猫の手もならぬ医者の手も借りたい程だ。上官に言ったら多分即刻オーケーが出るだろう。使えるものは何でも使え、しかも自ら言い行ってくれるならこちらも大助かりだ。
だから、ここで食い止めたいのだ、一般人を戦場に連れて行たくないという兵士のプライドだ。
東野は東野で人命救助が目的で更に市街地に行けばまだ民間人がいる。民間人を助けるという可能性を少しでも自分の手で上げたいのだ。この人間は顔こそ優しそうだが、自分の信念を突き通そうとするとしつこく、頑固になる。
１０分程言い合いをすると兵士がわかった上官次第だと言い、その旨を上官に伝えにいった。ここで議論しても埒が明かない。上官命令なら自分は実行するしかないと諦めを付けたのだった。

兵士は直ぐに戻ってきて行った、ついてこい医者、と。
東野はそれにわかりましたと答え自分のメディカルバックを抱え兵士について行き前線へ向かった。

市街地内につき車を降りると銃声は大きくはっきりとしたものになり、あちらこちらで叫び声が聞こえる。
降りた場所は迫撃砲陣地になっており周りには多くの兵士がいる。
東野を連れてきた兵士は地図を開き説明する。
「ここが俺達のいる場所だ。」
兵士は市街地中央より南２ｋｍほど手前の場所を指差す。
「ここから市街地中央に進む。中央より南側は味方が多い、が、敵も浸透してきているから気をつけろ。北に行くにつれて敵は多くなるという認識を持て。
武器は携行してるか？」
「念のため、拳銃を持っています。」
東野は右手で腰のあたりをポンポンと叩く。
「わかった。行くぞ、ついてこい。」
兵士と東野は歩いて市街地中央へ向かう。
少し歩いたところで東野が言う。
「そういえばお名前を伺ってませんでした。
私は東野　達といいます。言いにくいでしょうからドクターとでも読んでください。」
「そうさせてもらう。俺はローレンス・オリセー軍曹だ。
ローレンスとでも軍曹とでも読んでくれ。」
「わかりました、軍曹。」
東野は笑顔で答える。
「ハッ、気楽なもんだ。」
呆れ口調で言った後、ローレンス軍曹は胸ポケットからタバコを取り出し吸い始める。
それに合わせ東野もタバコを吸う。
「医者の不養生、だな。お前達、医者はこういうのを止めろって言う側

だろう。」
　ローレンスが皮肉を言う。本心で言っているわけではなく、単なる冗談として言った。
「確かにそうですね。長生きしたいならこんなものは吸わない方がいいです。」
　指と指の間に挟んでいるタバコを自分の目の高さまで上げて、続けて言う。
「ですが、人はいつか死ぬ。どんな人間にでも死は平等に訪れる。死ぬのが病気か、戦争か、早いか、遅いか。ただそれだけ。
　そして、私は死を恐れていない。恐れるのは他人の死です。」
　タバコをくわえ、息を吸い吐く。
「だから、いいんです。」
　それを聞いたローレンスは言う。
「よくわからねえな。答えになってるような、なってねぇような。」
「自分でもそう思います。」

　しばらく歩き市街地中央のすぐそばに着いた。
「ここからは油断するな。味方部隊から離れるなよ。」
「わかりました。負傷した人がいたらここにつれてくるか、私が向かいます、軍曹。」
「わかった、下に伝えておこう。俺はこの近くで指揮をしている、何かあったら回りの奴らに言え。」
　味方の、土嚢を積んだ機関銃陣地、家の2階に陣取っている部隊などが展開している。
　もう、双眼鏡などを使えば敵が待ち構えてるのがありありと見れる距離だ。
　東野は既に負傷者が集められていた土嚢陣地の1つで治療を始める。
　銃撃音、爆発音、声、エンジン音、いろんな音が頭上を通りすぎて行く。
「優先順位をつけないと…」

そう呟き患者たちを一通り見回した東野は頭の中でトリアージをする。実際にトリアージカードは無いが、頭の中で優先順位を決め記憶する。彼にとっては容易いことだった。
「よし、やりましょう。」
メディアバックから取り出した手術用手袋をつけると治療を開始する。
やれることと言っても大がかりなことはできない。先程と同じように止血をし傷口を清浄に保つ、簡易な縫合が出来そうならしてしまう。血圧を計り、低いものにはリンゲル液を投入する。また、負傷者が運ばれてきてその処置。それの繰り返しだ。
「ドクター!こっちに来い!!」
不意に隣の陣地にいるローレンス軍曹の叫び声が聞こえる。
「直ぐに行きます!」
東野はそう答えるとメディアバックを抱え移動する。
敵からは直接見えない位置になので撃たれはしなかった。
東野がローレンス軍曹のいる陣地にたどり着く。横にはＬ国の兵士が土嚢からＡＫを構えている。
「軍曹、どうしました。」
「前線で負傷者だ。しかも、さっき運ばれたメディックが担当していた地域でだ。お前、行けるか？
行くなら俺と数人の兵士が付いて行く。もちろん、お前は軍人じゃないからこれは命令じゃない。行かなかったとしてもお前に何も損は発生しない。」
「なるほど。軍曹、その地域に民間人はまだ取り残されていますか？私の上との条件は民間人がいる地域のみでの活動となっています。既に退避しているなら私はそこへ行けないです、私が誓約を破るとＡＭＳＴ全体に迷惑がかかってしまいます。」
「いる。大勢とは言わないがある程度の人数が建物の中に避難している。国民を助けるのも我々の義務だからな。」
「それならば。
行きましょう。」

「そんな安請け合いでいいのか。ここならまだ安全だ。最前線だと本当に死ぬかも知れんぞ。」
「先程も言いました、私は死を恐れていない、恐れるのは他人の死だと。」
それを聞いたローレンス軍曹は鼻で笑う。
「まるで宗教だな。よし、お前ら行くぞ！」
回りの兵士が返事をすると最前線へ向け移動を始める。

――――

「あそこだ！移動する！
援護射撃を！お前らはここに残って回りのと交代しろ！」
ローレンス軍曹はハンドサインで援護射撃方向を示すと兵士がＬＭＧやＡＫで射撃を始める。
「今だッ！行けッ！」
東野とローレンス軍曹は銃撃音を背に受けながら全力で負傷兵のいる土嚢陣地へ向かう。
制圧射撃をしてる間は敵も撃ってはこないと思われるが、めくら撃ちで応射している敵もいる。
５，６秒ほど走ると味方の土嚢陣地の中に飛び込む。
東野は勢いよく飛び込んだので一回転して危うく頭を打ちかけた。
「スリル満点ですね。ハァ、もう一度やりますか？」
東野は地面に手と膝を着いて少し息を荒らげながら言う。口角が少し上がっておりおどけた顔だ。
「バカ野郎、気が可笑しくなったか？」
「そんなのは元からですよ。」
「違いないな。おい、負傷者はどこだ。」
ローレンス軍曹は少し笑ったあと陣地の兵士に訪ねる。
「ジャジリ一等兵であります。あちらに寝かせておりますが…」
兵士が顔を向けた方向にジャジリ一等兵が寝かされている。年の頃ならまだ１８歳か１９歳、顔にあどけなさが残っている。
彼は左手が肘から先が無くなっており、包帯で傷口が巻かれてい

る。その包帯からは血が滴っている。顔も火傷をおっており腹部にも包帯が巻かれている。
目は閉じており、口を半開きにして胸を大きく膨らませて呼吸をしている。
「どうした、負傷した状況を教えろ。」
「敵の手榴弾であります…こちらに投げ込まれ、それに気付いたジャジリ一等兵が投げ返したのですが彼の目の前で爆発しあの様に…」
「わかった。他の者は警戒を続行しろ。
ドクターやってくれ。」
「わかりました。」
ジャジリ一等兵に東野とローレンス軍曹が近づく。
「だ…誰で…すか…?」
ジャジリ一等兵が絞り出すように声を出す。
「俺だ、ローレンス・オリセーだ。今、医者を呼んできた、もう安心だ。」
「軍曹…でありますか…申し訳ありません…このような…」
「大丈夫だ、お前のお陰で皆が助かったんだ。今から治療するから、安心しろ。」
ローレンス軍曹はジャジリ一等兵の残った方の手を握る。ジャジリ一等兵もそれを辛うじて握り返す。
「処置をします。楽にしていてください。」
東野はメディカルバックから医療品を取りだし処置を始める。止血、輸液、傷口保護。手際よく進める。
処置はほぼ終わった、後送が可能なときに彼を戻らせるだけだと。
しかし、先程まで息をしていたジャジリ一等兵の呼吸がおかしくなる。
口は息をするように動いているのに胸が動いていない。まるで、呻き声の様な、啜り上げる声の様な音が聞こえる。東野はそれを見逃さなかった、そして即判断する。
「死戦期呼吸(ギャスピング)…!
軍曹!!」
東野は叫び軍曹を呼ぶ。

「どうした、治療は終わったんじゃないのか？」
「説明はアトです！心肺蘇生法（CPR）を!!」
「わ、、わかった！」
　ローレンス軍曹は直ぐに胸骨圧迫を始める。
「しっかりと胸が沈み込むまでしてください!!最悪、骨が折れても構いません!!死ぬよかマシです！」
　東野はそう言いながらメディカルバックをあさり小型ＡＥＤとアンビューバックを取り出す。ＡＥＤは通常の物より小型で持ち運びがしやすいタイプだ。
「軍曹はそのまま続けてください！」
　ローレンス軍曹が心臓マッサージをしているが、医療用ハサミで器用に衣服を切り小型ＡＥＤのパッドを貼る場所を露出させる。皮膚にパッドを貼り付け、小型ＡＥＤの電源を入れる。
「患者から離れて下さい」という音声が流れる。ローレンス軍曹は胸骨圧迫を止め一旦離れる。心電図解析中という表示が液晶モニターに表示され、数秒経つと「電気ショックが必要です」と音声が流れる。
「離れて！」
　東野が叫ぶ。誰もジャジリ一等兵に触れていないことを確認すると通電ボタンを押し電気ショックを流す。しかし、ジャジリ一等兵は息を吹き返さない。
「私が代わります。軍曹は私が合図したらこれを口に当てて押して下さい。」
　東野がローレンス軍曹にアンビューバッグを持たせ胸骨圧迫を再度始める。見るとローレンス軍曹が行っていたときよりも勢いよくやっており、しっかりと胸が沈み込んでいる。
　約５ｃｍ以上沈ませそして６ｃｍを超えない、一分間に１００回から１２０回、しっかりと沈み込ませ戻ったのを確認してから再度沈み込ませる、肘は曲げずに掌の基部でしっかりと押す。
　模範的な胸骨圧迫の姿、東野はこの感覚を体に叩き込んである。
　横目で一心不乱に胸骨圧迫をする東野を見たローレンス軍曹はこの男のどこにそんなエネルギーがあるのだろうと思った。そして、こ

の状況でなぜこの男は冷静に判断し行動できるのか不思議に思った。ここはほぼ最前線の場所、敵兵の銃弾がこちらに向かってきているのだから。

２分程の時間胸骨圧迫をしてもジャジリ一等兵の反応はない。小型ＡＥＤから「患者から離れて下さい」という音声が流れる。心電図解析が行われると「電気ショックが必要です」という音声がまた流れる。東野が「離れて！」というと通電ボタンを押す。

だが、依然としてジャジリ一等兵の自発呼吸は見られない。

もう、小型ＡＥＤのバッテリーはあと２回しか持たない。予備バッテリーは持ってきていない。

「軍曹、変わって！」

東野がローレンス軍曹に言うと「わかった！」と返事の後、胸骨圧迫がまた始められる。

東野はその間にメディカルバックの中からエピネフリンと書かれたアンプルと注射器を取り出す。アンプルの蓋を折り、注射器で溶液を吸い上げ、しっかりと空気を抜いたのを確認する。

それをジャジリ一等兵の残っている右腕に注射する。そして、空になりそうな輸液パックを交換する。

「軍曹！もっと強く！」

軍曹に激を飛ばしながら、東野は無くなっている左腕の切断面の止血具合を再度確認する。止血材がしっかりと血を止めているのを確認できた。腹部の傷口も確認する、こちらも包帯の圧迫で止血できている。

胸骨圧迫をローレンス軍曹から東野に交代する。

また、２分程経つと小型ＡＥＤから音声が流れる。

電気ショックが必要だ、通電ボタンを押す。

体がすこし動くと、大きく胸が動き始める。

呼吸音も正常だ。

東野はそれを確認すると小型ＡＥＤの液晶画面を心電図モードにする。一定のリズムの正常な拍動が流れている。

「拍動、戻りました。このまま安静にしておけば大丈夫だと思いま

す。」
　ローレンス軍曹に東野が伝える。
「そうか…よくやってくれた…」
　安堵の表情を浮かべたローレンス軍曹がそう言う。
「礼は要りません、仕事ですから。」
　東野も笑顔を見せる。
「それで、ドクター、悪いがしばらくは移動できん。
　現在時刻だと、味方部隊が移動中だ。」
　ローレンス軍曹は腕時計で時間を確認しながら言う。
「敵も直ぐに近くにいる。味方の到着を待ってから移動だ。お前も後方に戻す。
　味方が着くまで休んでおけ。いつ今みたいな自体が起こるかわからんからな。」
「わかりました。タバコを吸っても？」
　自分の胸ポケットのあたりをトントンと叩く。
「かまわんぞ。」
「ありがとうございます。」
　東野は地面に座り、壁に寄りかかってタバコに火をつける。
「おい、医者、俺達にもくれよ。」
「１本でいいからよ。」
　警戒をしている兵士たちが首だけ動かして言う。
「いいですよ。」
　東野はポケットから新品のＬｕｃｋｙ　Ｓｔｒｉｋｅを取り出すと兵士達に渡す。
「おっ、新品じゃねえか。悪いな、へへッ。」
　兵士達はそれを受け取るとくわえタバコをしながら警戒に戻る。
（戦地ではストレス解消が限られてきますからね、いいでしょう。）
　東野はそう思いながら煙を吹いた。
――――
　一時間半程の時間が経った。時刻はちょうど１５時半を回ったところだ。

火線は未だに収まらず、敵民兵もＬ国政府軍も殺し合いを続けている。
東野がいる陣地の兵士達も散発的に撃ち返している。味方部隊が到着する時刻まであと３０分程と少し、それまでこの地域一帯を保持する必要がある。
ジャジリ一等兵の容態は既に安定している。東野の適切な応急処置のお陰だ。味方部隊が合流すれば彼を後送することも出来る。
今、東野が出来ることと言えば、姿勢を低くして辺りを見回し民間人がいないか探すくらいだ。
何となしに今いる場所から道路を挟んだ反対側の建物を東野は見た。２階の窓にさっきまでは居なかった人影の様なものが見えたのだ。
（見間違い…？）
中は暗く良く見えない。東野はローレンス軍曹に頼み双眼鏡を借りるともう一度、建物の中を見た。窓枠のところから外を覗いている人間が見えた。背は高くない。多分、年が１２，３歳くらいの子供、男の子だろう。
東野はローレンス軍曹に双眼鏡を返しながら言う。
「軍曹、双眼鏡ありがとうございます。それと、あそこの建物の２階に人、多分子供がいるみたいです。」
東野は先程見た建物の方向を示した。
「あそこか…助けに行きたいのは山々だがこの状況だと難しい。敵との交戦もまだ止んでない。味方部隊の合流を待ってからだ。」
「わかりました。」
東野はそれを了承した。
それを言うやいなや、近くで爆発が起こった。ドンッ、ドンッ、ドンッ、と東野とローレンス軍曹のいる位置よりも約２００ｍ奥の家屋に３発命中した。
「クソッ、迫撃砲だ。お前ら伏せろ！
民間人もいる地域にぶち込むなんて奴ら狂ってやがる…！」
東野はジャジリ一等兵に多い被さるようにして彼を守る。

飛翔音などは聞こえずにいきなり爆発が起きる。また、同じようにドンッ、ドンッ、ドンッと先ほどより土嚢陣地側に弾着した。
「爆発規模から見て８１ｍｍ程度か…この距離なら伏せていれば大丈夫だ。土嚢より上に頭を出すなよ！」
「こちら側は敵の迫撃砲陣地に対射撃できないのですか？」
東野はローレンス軍曹に問いかける。固定されている陣地ならばそこへ砲弾を降らせるのは難しくないことだ。
だが、ローレンス軍曹はその問いに即答する。
「できないな。」
「こっちが使ってるのはＬ１６　８１ｍｍ迫だ、民兵共は東側の８２ｍｍ迫だろう。俺たちの迫砲陣地からだとだと、街中央部より奥、ちょうど我々がいる位置がギリギリ射程距離ってとこだ、精密な支援なんざ当てにならない。それで、こちらには１００ｍｍ以上の重迫が今はないからな…相手はどうだか知らないが、持っていると考えるのは妥当だろうな。」
「そうなのですか…」
「武器も弾薬も足りていない、これが現状だ。この砲撃もやり過ごすしかない。」
東野はその言葉に頷き答える。そう言ってる間にもまた砲撃が降り注ぐ。修正射を終えたのだろうか、先程よりも近距離に落ちる。ドドン、ドドン、ドドンと一定のリズムで爆発が起こる。土嚢陣地の中の兵士達は姿勢を低くして砲撃を止むのを待っている。東野も同じだ、ジャジリ一等兵を庇う。
鼓膜を劈（つんざ）くような轟音と衝撃波。爆発が起こった後には砂が風に運ばれてくる。霧雨の雨粒のような砂埃があたりに漂う。また、轟音と衝撃波、まだ止まない。この鉄と砂埃の雨はいつ降り止むのだろうか。轟音と轟音の間に聞こえる悲鳴や叫び声、東野がこの音が嫌にスローモーションに聞こえた。日本にいた頃にテレビで見たであろうバラエティ番組の芸人かなにかのスローモーションシーンの声に似ている感じだ。ピッチが低くウォォアと唸るよう、聞いたものが笑いか不快感を呼び寄せる声、少なくともこの場所で通常の人間なら笑い

はないだろう。
実際の時間にしたら４，５秒ほど、それが２０秒にも３０秒にも感じられるのだ。
東野は口角を上げている。
彼は感じていた、これも生きるということか。
東野は今までに心的外傷後ストレス障害（PTSD）になってしまった兵士の話を聞いたことがあった。皆が口を揃えて言うことがあった「生きている実感がしない。」これを必ず言うのだ。他には「できるならまた戦場に戻りたい。」「頭の中に声が聞こえる、爆発音が聞こえる。」これもよく言われる。
日本にいて命の危険に晒されたことなどなかった。こっちに来てからも数回危ないことはあったがここまでではなかった。
まさにこの場は自分が知らなかった命をやり取りする場所の１つであると認識した。ここに来るときに銃撃の中を走ったのとは訳が違う。もしここに砲弾が落ちてくればここにいる全員が人間から肉片になる、その後には何にも成り得ない。
手術が成功したとき、人を助けたとき、人から感謝されたとき、東野はそういうことに生の実感を得ていた。それは言わば人から与えられて初めて得られる実感、人間が織りなす社会の中で得られる人為的な実感だった。
これは違う、自分の生命に対する危機感から感じる、もっと奥深く本能的な、生命が自らの死を忌避する願いだろうか。心の奥底とかそんな物ではない、もっともっと根本的な恐怖が叫んでいるのだ、そう、お前は生きていると。
東野は思う、あぁ、これは病みつきになる、だけどこの感情はしまっておこう。自分を現実に引き戻した。
「そろそろ止むか…？」
ローレンス軍曹が伏せた状態で時計を見る、修正射終了後の迫撃砲による砲撃が始まってから約２分経っていた。弾着の間隔から最大射撃ではなく、持続射撃の砲撃であるとローレンス軍曹は踏んでい

た。あたりを耕すなら2分の持続射撃でも長いくらいだ。
最後の1発が飛来した。その砲弾は先程、東野が子供がいるといった家の屋根を半分吹き飛ばした。皆、まだ伏せていてそのことには気づいていない。
最後の砲撃が爆発してから15秒ほど経ってからローレンス軍曹が口を開く。
「止んだな…
よし、お前ら警戒に戻れ。土嚢から銃を出すときは必ずよく確認してから出せよ。」
兵士たちは顔を上げる、その顔は安堵の表情であるが疲れも見て取れる。迫撃砲弾の轟音と衝撃波、いつ死ぬかわからないという状況に2分間も晒されればそうもなる。
「ドクター、とりあえずは大丈夫だ。ジャジリの様子はどうだ。」
ローレンス軍曹が東野に言う。
「負傷等はありません。容態も変わりなさそうです。」
東野は体を起こしローレンス軍曹の方を向いて言う。
「ならいい。というか、ドクター…お前…」
ローレンス軍曹は困惑した顔で問いかける。
「何故笑ってるんだ?」
そう言われて東野は何も答えず、すぐに手で自分の頬を触る。笑っているときの頬が上がり具合といよりかは、ニヤケ顔の片方だけの頬が上がった状態だ。考えは押し込んだが表情が残っていた。
「あ、あぁ、軍曹、気にしないでください。癖なんです。」
「何の癖だ…まったく…?」
「気になさらないで下さい」
ローレンス軍曹はその言葉を聞いて鼻で笑い、状況確認を始めた。東野もあたりを見回し始めた。すぐさま先程子供がいた建物の屋根が崩壊しているのを見つけた。
「軍曹、あそこの建物…!さっき私が伝えた子供がいた所ですよ!」
「あぁ、さっきの砲撃が当たったんだろう…」
「砲撃が止んでからまだ時間が経っていません。すぐに行けば助けら

れます。」
「どうやって移動する？俺たちが行ったら蜂の巣だ。」
「私だけで行きます。」
　それを聞いたローレンス軍曹は呆れる。
　今いる土嚢陣地から目的の建物までは道路を斜めに横断しないと行くことができない、しかも2階部は確認できるが1階部は他の建物で半分ほど隠れてしまっていて全容の確認は難しい。また、1階部付近にたどり着くだけでも大人が全力で走ったとしても6秒はかかる、足場は良いとは言えない。その間は敵陣地からの銃撃が飛んでくる、もちろん今見えていないとこからもだ、たどり着いたとしても現在地からの援護は非常に厳しい位置取りになってしまう。
「バカ野郎、お前だけでも無理だ。奴らは民間人であろうと発砲してくるクソ野郎共だぞ。赤十字背負ってるから撃ってこないなんて保証なんてない。」
「大丈夫です、たどり着いて帰ってきますので。」
「何故だ、何故、そこまで固執する。」
　ローレンス軍曹にはこの東野という人間の行動が理解出来ない。この医者が言っていた、自分の死は怖くない、他人の死が怖いというのは本当なのだろうか。あまりにも利他的すぎる。
　東野は言う。
「私は自分の死は恐れない、恐れるのは他人の死です。」
　自分が考えていた言葉をそのまま東野から聞いたローレンス軍曹は顔を歪めながら小声で吐き捨てるように言う。
「狂ってやがる…」
　そして一呼吸置き言う。
「わかった、好きにしろ。
　こっちも仕事だ、できる限りの援護は行う。」
「ありがとうございます。ジャジリさんをお願いします。」
　東野はそう言うと靴が脱げないようにしっかりと紐を結び直した。腰につけている銃も脱落しないように確認した。
「ここに来るときと一緒だ、3，2，1で飛び出して全力で走れ。わ

かったな？
　お前らも制圧射撃をするんだ。」
「わかりました。」
「「了解しました、軍曹！」」
「行くぞ、３，　２，　１，　」
「行けっ!!」

　その声を聞いた東野はクラウチングスタートのような体勢から一気に土嚢を飛び越え道路に走り出す。
　東野が飛び出すと同時に背中から発砲音が聞こえる。だが、背中以外からも聞こえる発砲音もある。先程まで兵士たちが打ち合っていた陣地からだ。それはすぐ過ぎた。
　交差点の様になっている場所の奥に敵陣地があった。ここから射線が最も長い時間晒される。白衣を纏った男が走ってゆく横姿を見てすぐに備え付けのＭ２重機関銃が火を吹き、ダダダダダともドドドドとも聞こえる音を発しながら東野に向けて５０口径の弾丸が飛んで行く。
　その音を聞いたローレンス軍曹はもうダメだ、と目を背けたくなった。
　１つの弾は頭の後ろを通り抜けた、１つの弾は腹の前を通り抜けた、１つの弾は翻る白衣を掠めた、１つの弾は喉元の前を掠めた、１つの弾は地面を叩いた、１つの弾は走っている右足と左足の間をすり抜けた、１つの弾は目の前を掠めた、１つの弾は頭上を通りすぎた。
　５０口径だけではないＡＫの弾も当たらなかった。
　放たれた弾丸は全て東野の周りを通過して行った。磁石がお互いに反発し合う、と言うよりか東野は何かに覆われていて、まるでそれに沿うように弾丸を通過して行ったのだ。かすり傷一つ負っていない。
「どうなってやがるんだ…」

ローレンス軍曹は目を疑った。
まさかあの火線の中を無事に援護も無しに通り抜けるなど自殺行為も甚だしい。すぐに撃たれて死んでしまう、なのにあの医者は体のどこにも弾丸を受けず通り抜けた。神の加護かそれとも奴の信念が弾丸を弾いたのか、そんなもので撃たれないようになるなら俺達は苦労しない。そう思いながら東野の背中を見つめていた。
東野はその弾幕の中を通り抜け目的の建物の1階部にたどり着いた。幸いにも敵民兵の陣地からは晒されていない、だが元いた味方陣地からも姿は見えなくなる。
入り口はすぐ見つかった、家と家の間にある人が一人通れるくらいの道に面していた。東野はその入口から1階に入る。家の中にあまり物は見当たらない。椅子、机、棚などがあった。入り口から見て奥の壁に二階に通づる階段があった。だが、普通の階段と違うのは足場が陽の光で照らされている、屋根が砲弾で破壊されたせいだ。
東野はゆっくりと階段を登り2階に上がる、階段の途中からでも青い空が見えている。
ゆっくりと頭を出すと屋根の瓦礫がベッドや衣装タンスのようなものを押しつぶしていた。その向こうに見えたのは部屋の角でうずくまった少年、運良く屋根が崩れなかった側にいたらしい。
「大丈夫かい、そのままそこにいてね。」
東野が少年に声をかける。その声を聞いた少年は顔だけ上げ東野の顔を見るとうなずいた。それを見た東野は2階に上がる。屋根がポッカリと崩れ落ちており壁はその崩れた側の上部が欠けている。これ以上崩れそうな気配はない。瓦礫につまずかないよう壁伝いに少年に近づく。窓があり、ギリギリ見えるように頭だけ出すとローレンス軍曹達がいる陣地が見えた。その窓の下を這うように移動し角にうずくまっている少年のもとにたどり着くと少年の前でしゃがむ。
「おじさん…誰？」
少年はL国で話されている言語で東野に話しかけた。
「僕はお医者さん。君を助けに来ました。」
東野もL国の言葉で返す。

その言葉を聞いた少年はまた顔をうつむかせしゃくり上げるような声を出し、肩を上下させながら言う。
「お父さんも…お母さんも…どっか行っちゃった…」
それを聞いた東野も視線を床に落とした。この子も戦災孤児、東野はキャンプでも同じ境遇の子供を何人も見た。彼らは戦争で両親を亡くした、戦争の動乱の中で両親とはぐれた、そのような子供。孤児院や難民キャンプに行ければまだ良い。どこかの武力勢力に加わって使い捨ての少年兵になるか、捕まって人身売買の商品になるか、ストリートチルドレンとなってしまいただ飢え死ぬか、殺されるか。
彼の両親は捕まったか、殺されたか、それとも運良く難民キャンプに逃れたのかわからない。少なくとも東野が出来ることはこの少年をＬ国政府に保護してもらうか、東野がいたＡＡＭＳＴの医療支援キャンプに連れていき保護することだ。
「ここから逃げましょう。もっと安全な場所に行くんです。」
「そこに、お父さんとお母さんはいる？」
東野は言葉につまる。嘘を言うのか、本当のことを伝えるのか。東野の良心は後者を選んだ。この少年に嘘を言ったとしてそれは後々の心の傷になるかもしれないと思ったからだ。
「わかりません。けど、手がかりはあるかもしれません、もしかしたら無いかもしれません。
それでも、僕についてきてくれますか？」
少年は少し考えたあと言う。
「…うん、行くよ。」
「わかりました、行きましょう。気をつけて。」
東野がそう言った時に何か物音がした。一階からだ。東野はローレンス軍曹の部下の誰かが来たのではないかと一瞬思ったが、その可能性は低いとすぐに払拭した。
東野は少年に背を向けしゃがみ階段の方を見る。瓦礫だらけのこの部屋に隠れられる場所はない。
一階を物色しているらしく物音がまだ聞こえてくるが話し声はしない、どうやら一人のようだ。

その人物は2階へ通ずる階段を昇る。瓦礫がジャリやガリッと音を立てる。
帽子のようなものが見え、すぐに柄の悪そうな顔が見える。上半身はタイガーストライプと暗色草むら系迷彩を合わせたような軍服を着ている、ズボンも同じだ。
背中にはＡＫ系の銃を背負っている。
その男は2階に上がると東野の方をみる。
「どっかの野郎が走ってきたと聞いたけど、何で医者がここにいんだ？」
その男の話す言語はＬ国の言語ではなかった。しかし、語学に堪能な東野はこの言語を知っている、そして話すことが出来る。
分類的にはインド・ヨーロッパ語族に位置する、特にセルビア語に語彙が非常によく似ている。
その言語はバルカン半島にあるＴ共和国で話されている言語だ。
その男の帽子は黒いベレー帽であり、赤い盾の中に龍をあしらった部隊彰であった。その下には英語で「ＢＡＬＫＡＮ　ＤＲＡＧＯＮ」とある。
東野はＢａｌｋａｎ　Ｄｒａｇｏｎの名を聞いたことがあった。バルカン半島一帯で悪事を働いている無法者の民兵組織、大金を払えばどんな紛争でも行き暴虐の限りを尽くす。
東野はＴ共和国の言葉で言う。
「私はＮＧＯの医師です。民間人救助の名目で来ています。」
「んなことは知らねえよ。後ろにガキがいるみたいだなこっちに寄越せ。」
「それは出来ません。この子は保護施設まで私が連れて行きます。」
それを聞いた男の顔は不快の表情になる。
「いいから寄越せって」
男は東野の前まで行き、
「言ってんだろッ!!」
蹴りを思い切り東野の腹に入れる。軍靴での蹴りだ重い一撃だった。

「…ッグ」
それをまともに受けた東野は自分の腹を押さえてうずくまってしまう。
「手間取らせんじゃねぇよ、クソッタレ。」
そう吐き捨てた男は、東野の後ろに居る少年を連れ去ろうと腕を引く。しかし、少年はそれに抵抗した。早く来い、クソガキ!と男が文句を言っている。
「…やめなさい!」
東野は痛みを我慢し、少年の腕をつかんでいた男の手を振りほどく。
「何しやがる!」
男は東野がもう痛みから回復したのかと驚くのと同時に東野にもう一度蹴りを入れる。
東野はしゃかんだ状態でそれを両手で受け止める。そして素早く男の軸足の左足を内側から右足で払い、同時に受け止めた右足を自分側に寄せる。
すると男はバランスを崩し背中から倒れる。
「1階に逃げて!!」
東野は少年に叫ぶ。
だが、少年は恐怖で足が竦み立ち上がることができない。部屋の角で頭を抱えこんでうずくまっている。

「テメェ、舐めた真似しやがって!」
男は左足で東野の胸のあたりを蹴ろうとする。しかし、それを予想していた東野は体を反らし右肩で蹴りを受け止める。
東野はつかんでいる男の右足を、自分の左脇に抱える。相手のアキレス腱の辺りに自分の橈骨の出っぱりが当たるようにする。
そして、自分の両足を内側と外側から絡める様に男の右足をホールドする。ホールド出来たら体を横に倒しそのまま身体を反らす。
「痛ッてぇ!やめろ、このやろっ、ってぇ!」
アキレス腱固めをされた相手は痛みにのた打つ。その間に東野は

左足で、男が右肩に下げたＡＫのスリングベルトに引っかけそのまま男の腕から引き抜く。東野のホールドはプロレスや総合格闘技で用いられる相手の足を完全に固定する仕方なので、エスケープ方法を知らない一般人は技から逃れることは出来ない。
東野は上体を更に反らし圧迫を強くする。
「あああ!!やめろ!!
あっ、がっ、足がっ、切れる!!」
アキレス腱固めは強く極めれば、まるで自分の足の筋が切られるのではないかと思わんばかりの激痛となる。
「大丈夫ですよ、実際に千切れはしませんから。」
「そういう問題、じゃっ、ねぇ！
やめッ、てくれ！」
「このままこの少年を連れ去らずにおとなしく帰るなら止めましょう。」
「わかった！わかったから、はっ、離してくれ！」
「本当ですね？」
そういうと同時にアキレス腱への圧迫を少し強くする。
「いっでぇ!!嘘じゃねぇ、嘘じゃねぇ！」
「その言葉、信じましょう。」
東野は足のホールドを解く。
「はっ、はっぁ、ふざけんじゃねぇ…」
男は床に座り込んだまま自分の右足首をさする。
「そこにある銃はそのままにして、おとなしく戻って下さい。」
東野は白衣についた埃を払いながら言う。
「はっ、へへっ、わかったよ…」
男は立ち上がる、その様子を東野は鋭い眼光で見つめる。
「戻るさ…
テメェとガキを殺したらな!!」
背中の腰ベルトと上着の間に隠してあったＴＴ―３３トカレフを抜き、男はそれを東野に向ける。
が、それすら察知して予測していたのだろうか、男が銃を構え顔の

前に持ってくると同時に左手でトカレフの銃口を自分の体の外へ向け、なおかつ下方向に向けるようにする。右手は顔や喉元を守るためにその前に持ってくる。

銃と言えど銃口さえ向いていなければ怖くはない。

銃口がそれると左手を男の手首から滑らせハンマーやリアサイト辺りをしっかりとつかむ、右手はバレル部のスライドを上からつかむ。そのまま、雑巾を絞る様にして互い違いに捻る。この動きを全て一挙動で行った。

すると意図も簡単に男の手からトカレフが離れ、東野の手に収まった。そして、東野は相手を抱きかかえるように手を回し、相手を寄せ鳩尾に膝蹴りをぶち込んだ。

男は膝から崩れる。そのまま、尻もちをついた。

「あぁ、これ装填(ジャ)不良になって(ム)ますよ。」

東野が相手から奪い取ったトカレフのエジェクションポートを見るとスライドが少し下がっており、薬莢が2つ見えている。二重装填、ダブルフィーディングジャムだ。

「…んだと…？」

男は鳩尾を押さえながら東野の顔をみる。

「精度の良い弾丸を使ってないか、このトカレフはコピー品の粗悪品か、あなたのメンテナンスが悪いか」

そういうと東野はマガジンを抜き、銃共々放り投げる。

「あなたはあまりよく訓練されてないようですね、一般人相手に近接格闘で負けるなんて。民兵は元軍人が多いと聞いたのですがそんなことはないのですかね。」

「これ以上の私達に危害を加えるのなら許しません。

おとなしくそこで動けるようになるまで待つか、ここからすぐに出て行くか。」

東野の顔は無表情だが、冷徹で尖った眼光で見下ろしている。もし、普段の同僚が今の東野の顔を見たら彼のこんな顔を見たことがないと口を揃えて言うだろう。

１０秒ほど静寂がな時間が流れる。

「どうしますか？」
東野が再び男に問いかける。
しかし、男は無言のままうつむいている。この男はなにか企んでいる、素直に帰りそうにないと東野は身構えている。
「…ハァハッ、ハァー」
男は先程まで短くしていた呼吸を一旦整えた。その徴候を東野は見逃さなかった。
男が息を吐ききると、後ろに振り向き角にいる少年に向かって駆け込んだ。人質にでもするのか。距離は２ｍもない、一歩半踏み出して手を伸ばしたらうずくまっている少年に手が届く。東野は男の呼吸の様子からこの男が何かしら行動をすることを予測していた、男が振り返った瞬間に東野も男に素早く手をのばす。
しゃがんでいる状態で振り返ってから駆け出すのと、そのまま前に駆け出して手をのばすのでは後者の方がわずかに速い。
東野は男の後ろの襟元を掴む。男はそのまま少年の方に行こうとするが首が絞まってしまう。東野は膝を付き腰を回すようにして男を後ろに引き倒す、また尻もちをついた。
引き倒れた男は東野の方を振り向きざまに右手で東野に殴りかかる、その右手には手のひらに収まる程の屋根の瓦礫を持っていた。
東野はそれを左頬と鼻の間あたりに食らった。モロに直撃はしなかったが、頭が後ろに傾くくらいの勢いはあった。鼻血が出た。
男は腕を振り上げる。
そして、東野の顔面目掛けて振り下ろした。

東野は振り下ろされた腕を左手で掴む。
「人間としての倫理観すら無いのか。」
空いている右手で腰にあるＶｅｋｔｏｒ　Ｚ８８を抜くと、男の腹に向け引き金を引いた。ダブルタップしたので、パンッ、パンッと発砲音がして９ｍｍ弾が男の腹を貫く。
「ダァッあ!!」
男が叫び声のようなものを上げ、仰向けに倒れる。手で撃たれた場

所を押さえている。
「なん…で医者が…銃を持っ…てんだよ…」
　東野が口を開く。
「私は2回もお前にここから逃れる機会をやった。それなのにお前は逃げるどころか私を殺そうとし。」
「この少年さえ手に掛けようとした。」
「許されない。」
「どうなんだ。」
　いつもの口調ではない。表情は先程と変わらない無表情、眼光も同じ様に冷徹で尖った眼光。
「ホンの冗談…じゃねぇか…よ」
　東野はその答えを聞いて、ふらふらと頭を振った。
　そして、銃をホルスターにしまい立ち上がった。
　少年にL国の言葉で話しかける。
「もう、大丈夫ですよ。そのまま目をつぶって僕と行きましょう。」
「銃の音がしたけど、大丈夫だったの…？」
「えぇ、大丈夫ですよ。」
　東野は少年の方に行き背中におんぶすると階段へ向かう。階段を降りる前に立ち止まった。
　次はT共和国の言葉で言う。
「運がよかったら誰かが来て助かりますよ、何も止血をしなかったら5分持てば大したものです。医者が言うんだから間違いありません。
　あと、何故医者が銃を持っているかという質問ですが。」
「自分で考えるか、調べたらいかがでしょう。」
　そう言い階段を降りていった。
「…テ…メェ、つざけんな…待ちや…がれ…!!!
　待てっ…て、死ぬのかよ…!!おい…助け…!!」
（こういうの一度言ってみたかったんです。）
「あの世で、後悔してください。」
　東野はその言葉を残して入ったところから路地に出る。
　時計を見ると30分程の時間がすでに経っていた。そろそろ政府

軍の味方部隊が合流する頃だ。
路地を少し歩くと眼の前に人影が現れた、距離がある、東野はＶｅｋｔｏｒ　Ｚ８８に手をかけた。
「待て、待て、ドクター！俺だ、ローレンスだ！」
「…軍曹！良かった！」
「やっと味方部隊が合流した。弾薬も持ってきてくれた、他の戦線の余りだがな。
表通りの敵陣地はもう潰してある。出ても大丈夫だ。」
「わかりました、ありがとうございます。
あと、この子はどうしましょう。」
「ん？」
ローレンス軍曹は東野が背中に抱えている子供をみて驚く。
「生きていたのか！砲撃が直撃したというのに。全くの強運な坊主だ。
まだ、中に生存者は誰かいるのか。」
「生存者…はいませんかね。」
東野は先程までいた建物の２階部を見上げる。
「どうかしたのか。」
「いえ、何でもありません。」
「そうか、ならいいが。
ドクターはその坊主を連れて後方に下がってくれ。ジャジリも心配だ。」
「構いませんが、メディックの代わりがいなくなってしまうのでは？」
「１人だけ確保できた。流石に前線に民間人をずっとおいておくのは気が引けたんだろう。」
「そうなのですか。」
「ともあれ、後送用の車両がある。それに乗り込んでくれ。」
「わかりました。軍曹、御武運を。」
「お前には叶わなそうだけどな。」
そう言ったローレンス軍曹は表通りに出る。
東野も続くようにして表通りへ出る。少年を背中から下ろし、もう

目を開けて大丈夫だよと言う。
兵士に後送用車両を尋ねそれに少年と乗り込んだ。
少年は窓のそとの景色を見ている。
東野はタバコを吸うのに窓を開けようとにレギュレーターハンドルに手をかけた。だが、子供がいるから自制しようと手を引っ込めた。外の景色を眺めるのもいいかと思い、東野も頬杖を付き目を窓の外へ向けた。

車両は程なくして市街地南部に到着した。
少年はＡＡＭＳＴの医療支援キャンプに送られることになった。
現在の保管されている安否表と照合するらしい。
東野は一服した後、負傷者の手当を始めた。
疲労感はあるが動けない程ではない。手を動かし自分のすべきことをした。

―――

約束の3日が過ぎた。
再編成された部隊は民間人の捜索を主に行ったらしい。後方に送られてくるのが民間人が主になっていた。
そして、どうやって調達したのか航空機爆弾で敵の後方迫撃砲陣地、司令部を爆撃したらしい。
ローレンス軍曹達は無事で、軍病院に送られたジャジリ一等兵の容態も回復しているとのことだった。
少年の父母は医療支援キャンプにて保護されていた。とても強運な少年だ。
人員が補給され東野はＡＡＭＳＴ医療支援キャンプに戻る事となった。
来た時と同じ様に車で医療支援キャンプまで戻る。
車に揺られながら窓を開けてタバコを吹かしていると、数台のトラックとすれ違った。
すれ違ったトラックの助手席にやけに色の白い女が乗っているのを見た。

東野は特に何も気に留めずにそのトラックを見過ごした。

――――

「と、まぁ、これが前のキャンプでの一大イベントというか、一大事でしたかね～」

東野がココや皆に昔話を話した。

全員がドン引きしている。

「なんで弾に当たってねぇのか不思議だわ…」

ルツがつぶやいた。

「全くだぜ。」

トージョもそれに同調した。

「みなさん、意外と当たらないものだとかおっしゃってませんでした？」

東野が問いかける。

「いや、お前のそれはおかしい。」

アールが言う。

「そ、そうなんですか…」

東野は驚いた顔でうなずいた。

「民兵と素手で戦って…しかも、銃を突きつけられてそれに対処したって…ドクターは何か格闘技を？」

バルメが訊ねる。

「子供の頃から柔術をやっていまして。拳銃とかの対処は大学時代に部活動でクラヴ・マガをやっていまして、なかなか珍しいでしょう？」

「それもなかなか、おかしい話ですね」

バルメはクスクスと笑う

「さ、みんなドクターの昔話も聞けたことだしお昼にしよっか。」

ココが皆に言うとそれぞれ部屋を出ていった。

「おかしいのかなぁ…？」

まだ納得してない様子の東野は首をかしげながら部屋を出ていった。

第十一話

私は三日と待てなかった。
あのココとかいうムカつく武器商人とその一味を殺しに行くのに三日と待てなかった。
私は奴らが泊まっているホテルを見つけた。師匠の仇を討つ。
私は外の非常階段を一番上まで上り、柵を乗り越え屋上に向かった。
屋上の手すりを飛び越え、Ｍ８０００のスライドを引く。
数歩あるくと声が聞こえた。
「動くな。」
「私に銃を向けた瞬間、死ぬぞ。」
あの女の声だった。
私は目線だけ送り、声の方向を見た。あの女は何かしらの機械室の建物の上にいた。
上から私を見下ろしている。
そして、この女が一人でのこのこと出てくるはずがない。
「師匠を撃ったヤツより凄腕か。」
「居る方向、検討すらつかない。」
「負けた。」
私はＭ８０００を下に置く。
それを見たあの女は建物の上から飛び降り、そして言った。
「わかってないなぁ。元より勝負じゃないんだよ。アタリかハズレかの運試しだ。」
「天気を見るように、三日以内に屋上ルートで来る。これに賭けた。」
「明日だったら気力、集中力を欠いた私がやられていた。
まぁ、よかった。話したいことあったし。」
なにを言うんだろうか、この女は腹の中の読めない嫌味な女だ。
「はぁ？」
「チナツ、どうしてパンツ履いてないんだ？」
突拍子も無い質問をあの女がする。本当に何を言うのか。

「んっ…！ムッカつく女だ!!」
　私は思っていたことを言った。
「本気で聞いてる。もちろん、タダとでとは言わない。」
　あの女は笑った顔で言う。この笑顔にもムカつく。
「教えてくれたらその代わりに出会い頭のお前の質問に答えてやろう。」
　顔の表情が戻る、いつものすべてを見透かしたような澄ました顔。
「いつか殺されるとわかっていて、それでも私が武器を売る理由。」
　その答えを知りたかった。それでもこの女が武器を売る理由。
　私は口を開く。
「私が師匠と組んだ初仕事の日、標的のマフィアの家は川の向こうにあった。下半身ずぶ濡れなのが気持ち悪くて、こっそり下着を脱ぎ捨てた。」
「その後の戦闘はやたらと弾が当たって、師匠より多くの敵を殺したので褒められた。」
「ぶっ、パンツを脱ぐと射撃の腕が上がる…」
「そうだよ！」
「ッハッハッハ！いい話だ。」
　あの女はヘッドセットのマイクの部分を握りしめて、大笑いしている。
「今は？」
「履いてるよ、しつこいな！」
　私はスカートめくり上げ、パンツを見せた。あの女が視線を送って確かめたのを見たら、すぐに手をスカートから離した。
「ンフーフ、じゃあ私の番だな。」
　あの女は足元においたＭ８０００を蹴り、ヘッドセットのマイクの部分を握っている手を更に握り込んだ。
　強風が吹く。
「――――――――――。」
　だけど、私にはハッキリと聞こえた。
「恐ろしいヤツ。」

心からの言葉を言った。人間の世界を取り囲むJormungand（巨大な蛇）にでもなるつもりなのか。
この女は神でもなく、悪魔でもなく、蛇になろうとしているのか。
「そう？私は君を気に入り始めた。」
「飼ってやってもいい。考えろ。」
その問いに私は即答する。
「無理だ。
私はお前を許せない。三日と待てない程に。」
師匠の残したロザリオをあの女に見せつける。仇を討つのだ。
私は叫んだ。
「我らオーケストラは死の音楽を標的に叩き込むアーティストだ！
見損なうな、武器商人！我々は何者の下にも付かない！」
ヒップホルスターからベレッタ　Ｍ８４を抜きココ・ヘクマティアルに突きつける。
引き金を引くよりも早く、Ｍ８４が私の手から弾け飛んだ。
狙撃されたんだ、こんなにも早く正確に。
あぁ、銃声が聞こえる、銃の破片が右手を傷つけ血が飛んだのが見えた。
私は死ぬのか。死ぬってこういうことなのか。
目をつぶる時間さえなかった。
私の体に何かが衝突してきた。
あぁ、ダメみたい。
視界の中でココ・ヘクマティアルの顔が斜めになってゆく。
二回目の銃声が聞こえる。
「えっ…？」
私はまだ生きていた。床に倒れ込んでいる、私の上には誰か人が覆いかぶさるように乗っていた。
目を動かすと医者が身につける白衣のようなものを着た男が私の上にいた。
「何だコイツ、どけッ！」
私はもがいた。

「もう、終わりにしましょう。ココさんの勝ちです。あなたは負けて、今のところ私は勝っています。」
男が言う。あの女も、お前も勝ってない。
「どけッ！私は負けてない！お前ら全員皆殺しにしてやる！」
「そうですか、素晴らしいです。なら私からやってみなさい!!」
白衣の男はそう言うと上半身を起こす。銀縁眼鏡を掛けている、アジア人のような顔だった。
そいつは私に馬乗りになった状態で自分のホルスターからＭ９２を取り出し、私に差し出した。
「さぁ、取るといいでしょう。そして、私を殺しなさい！」「どうしました、早く取りなさい。私を殺してみなさい。」「狙撃が怖いならもうあなたは負けています。」「負けてないのならそれを証明するんです。」「どうしました、殺し屋が医者一人殺せないのですか！」「これを手に取り、私に向けて、引き金を引く。それすらもできないのか！」「どうした、殺し屋！やるべきことしないのか！」「なら、普通の人間に戻りますか!?」「さぁ、早く私を殺せ！」「震えていますね、恐怖ですか。」「まだ、生きていたいのですか？」「どうする、あなたが選びなさい！」「殺すか、生きるか！」「そのちっぽけな復讐をするなら、私を殺せ！」「私は死ぬのは怖くない、ほら早くしなさい。」「右手が使えないなら助けましょうか？それとも逆の手で撃つか！」「皆殺しにしないのか？」「本当は死にたくないのでしょう？」「生きたいのならそう言いなさい!!」「考えなさい生きる意味を！」「死んだらなにか残るのか！」「生きて何かを残すのか！」「私を殺してから、考えるか!?」「殺るなら早く！」
「早く！」
「早く！」
「早く!!」
――――
「…ッッグ、、うぇ…いや……もう…いや…
な、に…なんで…わたし、…ッヒ…の人生、意味なんて…誰も…い、、いっないの…」

チナツちゃんは泣き始めた。怒りには怒りを以て制す。カウンセリングだったら大失敗ですが、緊急ですから。
「もう、終わりです。死なずに生きて行きましょう。
今日までのあなたは死にました。新しいあなたが生まれたのです。」
私はＭ９２をホルスターにしまった。新しい人生の門出に銃などはふさわしくでしょう。
「わ、私…しっしっ、ッウ…ふぅ、し、死に…死にたくないの…？」
「ええ、今の私にはそう見えます。」
私は微笑みながら言いました。そして、チナツちゃんの右手を取り白衣のポケットから取り出したガーゼと包帯を傷口に巻きつける。馬乗りのままですがまだ、何をしでかすかわかりませんからしょうがないです。
私は少しだけ頭を動かし、うなずいた。横にいるココさんに合図を送った、もう大丈夫かと。
ココさんもうなずいた。だが、その顔は無表情だった。
「さぁ、立ち上がって行きましょう。そして、気が済むまで泣くといいです。」
私はチナツちゃんの上からどき、体を支えるようにして立ち上がらせた。チナツちゃんの視界にココさんを入れないようにした。いまは私とチナツちゃんだけの世界に彼女を閉じ込めておかないと、今の状況が崩れてしまいますから。
チナツちゃんは素直に立ち上がり私に支えられながらですが、フラフラとおぼつかない足取りで歩き始めました。私は何も言わずにむせび泣くチナツちゃんの横を一緒に歩き、屋上から室内に戻りました。
「…ッヒ、ッフウ…うぅ、うぁ…アッ、ハァはぁ…オェ…」
チナツちゃんはまだ落ち着いてない様子なので、ゆっくりと階段を降りながら自分の部屋へ向かいました。幸い最上階から２つ下のフロアでしたので苦労なく階段で降り自分の部屋にたどり着きました。
扉を開けチナツちゃんを部屋に入れ、私はゆっくりと自室の扉を閉

じました。

――――

東野がチナツを自室に連れて行き、ベッドに横たわらせる。時間は午後１１時半を回ろうとしている。

「今日は寝ましょう。疲れているときは寝るのが一番いいですから。」

チナツは何も答えずに開いた目から涙をこぼしながら嗚咽を漏らしている。

それを見た東野はチナツの両目に自分の右手のひらを優しく置き、語りかける様に言う。

「落ち着いて。ゆっくり息を吐いて、吐ききって。大きく息を吸って、ゆっくりと吐いて。そう、上手です。」

これを1分程繰り返すとチナツの呼吸も落ち着いてきた、まだ少し速いがさっきよりは十分に遅い。この程度なら過換気症候群の恐れは無いだろう。

「そう、ゆっくりと呼吸をして。目を閉じて。ゆっくり…ゆっくり…」

東野は右手をチナツの頭の方に滑らせる。目は閉じていた。呼吸の様子や胸の動きから見てまだ寝ていとみてチナツが寝るまでずっとそのままの体勢でいた。

東野はチナツの顔を見て思った。この子は何歳なんだろうか。三日前に見たときはチラッとしか顔が見れなかったが、今見るとまだ幼さが残る顔つきだ。やはり、１６、１７歳くらいだろうか。

自分と同じようなアジア系の顔つきで髪の毛も茶色に染めている様子は無い多分地毛だ。名前もチナツと聞いてるので、日本人かと思ったが目の色が黒ではなかった。それと年があってるとしたら身長が日本人平均よりも大きめ、多分１６５ｃｍはあるだろうか、たしかココさんと同じくらいだったと東野は思い出した。

しかし、着ている服もヨーロッパではあまり見かけない日本の学生服のような洋服だ。

情報が必要だ。

チナツの呼吸が深くなっている。腹部を見ると腹式呼吸になっていた、眠りに落ちたのだろう。

東野はかざしていた手をどかした。５分程待ちしっかりと眠っているかを観察した。狸寝入りをされて逃げ出されては非常に困る。
どうやらしっかりと寝ている。東野はゆっくりと立ち上がり自室を後にした。
自室を出た東野はまっすぐココのいる部屋へ向かった。
扉をノックし、私ですと声をかけると入ってと返事があった。部屋に入るとココは窓際で椅子に腰掛け、外の景色を眺めていた。
東野はココの横まで行き口を開いた。
「あんな無理な申し出を承認して下さりありがとうございます。」
「あの子は。」
ココは窓の外を眺めたまま問いかける。
「私の部屋で寝ています。」
「そう。」
ココはそれしか言わなかった。東野は叱咤を言われたり、平手打ちの１つを貰うのだろうか思っていた。
沈黙が流れる。空調の音や、外からのクラクションの音が聞こえた。
何も言わないココにどういうことを言えばいいかわからないが、東野は言った。
「あの子の処遇は…」
「君はどうしたいんだ、ドクター。」
ココは顔だけ東野に向ける。貼り付けたような無表情、眉も口もピクリとも動いていない。
「ココさんはあの子を飼っても…仲間にしても良いとおっしゃられていました。適切な治療をすれば精神面の回復は十分に見込めます。」
「それは私の意見だ。
君の意見を聞いている。」
「私は……最初に言いました…子供は殺さないし、殺させない。例えそれが、私の雇い主の命を狙った殺し屋でも。
そして、彼女の力はココさんの力にもなる。あなたなら彼女を飼い慣らせる。」

「私はここで彼女を雇うことに賛成します。雇わないのなら近くの病院に入院させます、保証人機構を使えば可能です。それすらもダメならば私を解雇してください、私の見込み違いでした。」
東野はココの目を真っ直ぐに見つめる。ココが口を開く。
「君のことは解雇しないし、入院もさせない。ここでしっかりと治療をして仲間にしようじゃないか。私はあの子を気に入ったんだ。」
「ありがとうございます。」
東野は頭を下げて感謝する、口には笑みを浮かべて。
「いいよ、お礼なんか。治るとしたらどのくらいの時間がかかるの？」
ココの顔に表情が戻る。いつもの不敵な笑みだ。
「約1ヶ月から2ヶ月、彼女の努力、回りの人の協力でしだいで短くなることもあります。」
「わかった。何か必要なものはある？」
「特にありませんが、皆さんになるべく早く伝えたいことがありますので大部屋に集めて頂けますか？」
「うん、すぐ伝える。」
「ありがとうございます、先に大部屋に行ってます。」
東野は部屋から出るとポケットに手を入れ壁に寄りかかっているレームが正面にいた。
「あの可愛い子ちゃんを救って嬉しいか、ドクター？」
レームは問いかける。
「ええ、それが私の使命ですから。」
「ココを危険に晒してもか。」
東野の言葉にレームは食い気味に言う。
「私があの子助けられなかったら、レームさん。あなたがあの子を殺していた。そうでしょう？」
「前にレームさんが言っていました、君には君の信念がある、他の人間がことを済ますと。今回はレームさんではなく私がことを済ましたんです。」
「俺はココから何も聞かされてなかった。もしかしたら、お前を撃ってたかもしれないぜ。」

「私はレームさんを信頼していましたから。」
「信頼だぁ？」
「あなた程の凄腕傭兵なら咄嗟に狙いを外したり、引き金を引かなかったり、もしくは正確に射撃が出来ると信頼していたんです。」
「そして私の信念は何故か弾丸をハジく。」
東野は口角を少しあげ不気味な笑みで言う。
「……」
レームは押し黙った。信頼されているということはわかった。チナツを撃とうとした時に東野が出てきて狙いを外したのは確かだ。東野の信念もわかった。だが、腑に落ちない。
ココを危険に晒したこと、その相手を助けたこと、東野の狂信的な利他主義、東野の死ぬことへの恐怖心の無さ、東野の子供は絶対的に助けるという信念、医者という職業柄、自分への信頼、仲間への信頼。全てきっちりとはまりそうなピースなのに上手く噛み合わない。
ハァーとレームは大きい溜め息をつく。考えるだけ無駄だと思った、何も考えてない頭空っぽな奴か、考えすぎで頭がおかしくなったそのどちらかだ。
レームは笑いながら言う。
「とんだ大バカ野郎だな、ドクター。」
「はい、よく言われていました。」
「同じ言葉だが、君は君の信念を持つんだな。」
「言われなくともそうします。
大部屋で話したいことがありますから、皆さんに集まってもらっています。レームさんもお願いします。」
「あいよ」
ドクターとレームは大部屋に向かった。

第十二話

東野が大部屋に入り5分ほどでヨナ以外の皆が集まった。
「ヨナ君は…寝ているのですかね？」
東野がココに言うと、ココは「部屋でグッスリ寝てたよ」と言った。
東野は「そうしたら、ヨナ君にはココさんから話しを伝えて頂けます？」と言うと快諾してくれた。
東野は皆のいる方に向き直り、立ち上がる。
「夜分にすみません、皆さんが思われていることと私がこれから話すことは一致しています。殺し屋　オーケストラの片割れ、テンガロンハットを被った女の子を私が助けました。」
一同、何も言わない。じっと東野を見つめている。
「ココさんはあの子を仲間にすると言っていますが…」
仲間にするということはココが直接言った方がいいと思い東野はココの方を見る。それを察したココは口を開く。
「ドクターの言うとおり、殺し屋　オーケストラ　チナツを仲間にしようと考えてる。反対の人はいる？」
皆はオーケストラの二人と戦闘をしたのでその力は十分に理解している。機動力のあるチナツを戦闘員とするのは作戦の幅を広げることが出来る。
バルメが手をあげて言う。
「私は反対とまではいきませんが、賛成もしたくないです。」
バルメは続けて言う。
「あの子はココや私たちを殺そうとやってきました。仲間にしたらいつ命を狙われるかわかりません。何かの拍子に襲ってくる、寝首でも掻かれかねません。どこかの病院に入院させて放置した方がいいと思います。」
「だからこそ、仲間にするんだよ、バルメ。
あの子を放置したらまたきっとまた襲ってくる。だから手の中で転がしておけば安全。」
「確かにそうですが…」

「精神面のケアはドクターにやってもらうから安心して。ドクター、みんなに説明を。」
「わかりました。」
　東野はそう言うと白衣のポケットからメモ用紙を取り出した。皆に伝えたいことを簡単にまとめてある。
「最初にこれは必ず皆さんに守って頂きたいことがあります。
　私以外の人、もちろんココさんも含みます、私の許可無しにチナツちゃんへの接触は禁止します。治療はここのホテル行います、なので部屋に立ち入る、声を聞かせる、顔を見せる、そのレベルでの接触禁止です。
　ココさん…あの子の色々な情報とかってわかりますか…？お願いするのを失念していました。」
「ンフーフ、そう言うと思ってうちの情報部にいって用意しといたよ。」
　ココはジャケットの内ポケットから折り畳んだ紙を出し東野に渡した。
「ありがとうございます。読むので少し待って下さい。」
　東野は受け取った紙を広げ目を通す、顔写真、名前、国籍等が載っている。
　氏名：チナツ・マリア・ヴィアダーナ
　国籍：イタリア（日系イタリア人、祖父が日本人）
　生年月日：１９８Ｘ年　４月１０日
　年齢：１７歳
　兄弟、姉妹は無し。父、母は死亡。祖父、祖母ともに既に他界。親類関係は特になし。
　両親は殺し屋　オーケストラによって行われた無差別殺人より２００Ｘ年Ｘ月Ｘ日に死亡。自身は奇跡的に生き残ったが公式には消息不明となった。
　殺し屋　オーケストラのメンバーとなり師匠（コードネーム？）と呼ばれる人物と行動を共にしている。師匠と呼ばれる人物は自身の両親を殺害している。行動を共にしている理由は不明。

移動には偽造パスポートを利用していた模様。
この他に実践経験や使う銃の情報が書いてあった、東野は必要な情報だけを読み取り理解する。
「なるほど…そういうことか…」
「あの師匠とかいう男はチナツちゃんの両親を殺害しているみたいですね、しかも無差別殺人で。」
レーム、ココ以外のメンバーは驚きの声をあげる。
ルツが東野に言う。
「おかしいじゃねえか。何で自分の親の仇と一緒に殺し屋なんてやってんだよ。」
「あぁ、いつでも殺っちまえるのに何でだ。」
アールもルツの言葉に同意して言う。
東野は用紙を見ながらルツ、アールの質問に答える。
「多分、心的外傷後ストレス障害の状態ですね…ＰＴＳＤからの心理機能回復が間違った方向に向かったのでしょう。両親は殺され自身はその現場で生き残り加害者と対面、心理的サバイバル、生存戦略の選択肢の１つとして殺し屋の仲間になり自分への被害を減らすというのを選択した。だから、無差別殺人の後に師匠と呼ばれる男に付いていったのでしょう。ストックホルム症候群に似た症例ですね…彼女の記憶は無意識に抑圧されている。また、その反動として防衛機制も攻撃的行動を取ることで心理的な均衡を保っていたと…自分の加害者が殺された時の反応、今までの行動、全て合点がいきますね。」
「いや、全然わかんねーよ。」
トージョが突っ込みをいれる。
「え？」
用紙から顔を上げ皆の顔を見回すと、全員ウンウンと首を縦に振っている。
「ドクター、わかりやすく説明して。」
ココが東野に言う。
「あ、わかりました、つい癖で。

とても端的に言うと、彼女は無差別殺人の被害者ですが自分自身が被害者ということを忘れてしまっている状態、というとわかりやすいでしょうか。」
「忘れるなんてことあり得んのか？
おかしいぜ、両親を殺されてそいつの横にいてそれを忘れるなんて。」
ルツがさらに東野に問いかける。ルツは東野の言う内容が矛盾しているように聞こえるようだ。
「正確には忘れてはいないんです。無意識に思い出さないようにしている、と言った方が正しいです。」
「強い心理的なストレスを受けたとき、例えば両親が死ぬ、親しい友人が死ぬ、恋人に振られる、他なんでもいいですが、そういう時に人間は防衛機制というものが働くんです。ストレスから心を守るための機能です。
その機能が強く働いたせいで記憶が無意識まで抑圧され、無意識が両親が殺されたという記憶を思い出さないようにしている。また、それだと心の平穏というか均衡が取れないので、殺人という攻撃的な行動で発散をしていたと考えらます。」
「普通は強いストレスや悲しみを受けたときはそれを乗り越えたり、受け入れることで通常の生活に戻っていくのですが、それが失敗すると薬物依存症、アルコール依存症、殺人、強盗などをしてしまうんです。」
レームが言う。
「イラクやらアフガン帰りの兵士がよくなってるな。」
東野は答える。
「全くその通りです。戦争の強いストレスによって様々な悪影響が出てきている状態ですね。」
アールが東野にまた質問をする。
「さっき、ストックホルム症候群に似てるとか言ってたけど、人質が犯人に恋愛感情とかを抱くとかいうやつだろ？あれって一時的なもんじゃねえのか？」

「じつは恋愛感情を抱くというのは誤りなんです。人質に取られるという危機的な状況からの生存戦略の１つとして被害者が加害者との間に心理的な繋がりを構築するのがストックホルム症候群です。非常に単純に言ってしまえば加害者に協力すれば助かるだろうという感じですね。
　そのせいで自分が被害者であることを認識できなくなってしまう。この状態は解放されたあとにも続くと言われています。
　何しろ症例が少なくて…私も初めて出会いました。」
　次はマオが東野に尋ねる。
「それって治すことは出来るのかい？素人考えだけど、相当難しいんじゃ…？」
「たしか、通常のＰＴＳＤの治療方法で可能です。
　カウンセリング、認知行動療法などを通じて、安全を思い出させる…うーん、何と言えばいいのでしょう…
　危機回避行動を取らなくても大丈夫ということを認識させる…その記憶をスルーさせる…自分の心の平穏を維持するために殺人をする必要はないと認識させる、といった感じです。
　それと、彼女のトラウマ経験が実際に彼女自身を苦しめているかどうかは話をしないとわかりません。」
　マオの次はレームが尋ねる。皆、東野に質問を飛ばすということは慎重になっている証拠だ。そして、東野の回りくどい説明の仕方は専門知識を持ってない人間にとっては矛盾を孕んでいるように聞こえてしかない。
「おいおい、人を殺さなくて良いって思わせるってそれじゃあ俺達の仲間にするにはちと問題じゃねえか？」
「医者がこんなことを大っぴらに言えませんが、人を殺すための目的を変えるのです。今までは自分自身を守るために、これからは仲間を守るためにという具合に。」
「そんなこと出来んのか？医者からしてみれば人の心ってのはそんなにすぐには動いちまうってか。」
「皆さんも同じですよ、そして私もです。

理由はともあれ国や国民を守るという職業から、今はココさんの護衛をしている。それはココさんに心を動かされたから。ココさんに雇われたときのことを思い出して頂ければ、それか、自分が銃を持ち人を守るという道を選んだことを思い出して頂ければわかりやすいかと。」

東野は見ていた用紙を折り畳み白衣のポケットへしまう。

そして姿勢を前のめりに座り直し、皆をゆっくりと見渡しながら言う。

「私がこれから彼女、いえ患者に行おうとしているのは、心の治療ではありません。

心、認識、無意識から意識までの再構築です。」

「今までの自分を過去へと追いやり、新たな自分を作らせる。　その一部分に我々がピースとして入り込む。」

東野はそう言い終わるとソファにドカッと座り直し体を上げる。

「とまぁ、偉そうに語らせて頂きましたが今のところの所感といった感じです。

チナツちゃんと話した後に現状は私から逐一報告しますのでご安心ください。」

「なんだかこっちの頭が痛くなってくるぜ」

ルツがそういう。

「すみません、わかりやすく説明するのが難しくて。」

ココはパチンと手をたたき皆に言う。

「はい、じゃあ今日はもう遅いしこれでお終いね。

明日からのことは朝に言うから寝坊しないように！」

「「あ～い」」

皆がそう返事をすると立ち上がりそれぞれ扉から出てゆく。

ココと東野だけは部屋に残った。

皆が大部屋から出てゆくと東野が口を開く。

「ココさんには治療の詳細を伝えておきます。」

「わかった。」

「あくまでも現状での方針です。今後大きく変わる可能性もありますのでその点は留意してください。
まず、1週間は完全に何もさせません。睡眠、食事、洗面、お手洗い以外の行動を一切させずにベットにいさせます。私が何か話をさせたり聞いたりもしません、あくまでも補助のみです。
1週間経過後、私との面談を開始します。
そのときにチナツちゃんの置かれている心理状態が理解できると思います。そのまま、治療を開始し攻撃性が落ち着いた状態になったら他のメンバーとの会話を始めましょう。
そして、信頼関係を築きます。」
「先程も言いましたが、私以外の人は私の許可なしの一切接触禁止にします。食事を取りに行くのも、生活に必要なものの補充も、すべて私がします。
ココさんがあの子を仲間にしたいと強く思っているのなら他の皆さんにもこれだけは強く言っていただけるとありがたいです。」
「他のみんなにもそれは言っておくね。特に、ルツ、アール、トージョに。」
ココが少し笑い肩をすくめ言う。
「はい、おねがいします。」
東野もそれにつられ少し笑いながら言う。
「あと、この薬の調達は出来るでしょうか？」
東野はポケットからメモを取り出し、ココに渡す。ココはそれを受け取ると少し首を傾げながら内容を読む。
「ええとなになに、物質名、セルト…ラ…リン。セ、セルトラリン？アメリカではゾロフト、日本だとジェイゾ…ロフト？　ＳＳＲＩ。せ、せ、選択的…セロトニン？…再取り込み～…阻害薬であってる？」
「はい、それであってます。物質名がセルトラリンで販売名はゾロフト、ジェイゾロフトという名前です。ＳＳＲＩ、選択的セロトニン再取り込み阻害薬という種類の薬です。
それの２５　ｍｇの錠剤をとりあえず２０錠お願いしたいです。」
「これは何の薬？」

ココが尋ねる。
「ＰＴＳＤ治療に一般的に用いられる薬の一つです。フラッシュバックを減らしたり、抗不安作用があります。」
「なるほど、うちの部署に問い合わせてみるね。」
「ありがとうございます。
ちなみに手に入れられるでしょうか…？こういう薬は市販していないものなので。」
「ミサイルや銃、はたまた戦闘機まで扱ってる会社がこんな薬の一つや二つ、楽勝よ！」
ココは手でグッドサインと作りウィンクをする。そしてゆっくりを手を下げるといつもの不敵な笑みを浮かべる。
「それじゃあ、ドクター。よろしくね。」
「はい。任せてください。」
東野はその言葉に強く頷き大部屋をあとにした。

「さぁて、久しぶりに頑張りますか。
チナツちゃん、あなたを苦しみから解放してあげます。」
廊下を歩きながらそう呟く。
自室の前につくとゆっくりと扉を開け、中に入り開けるときよりさらにゆっくり扉を閉めた。

第十三話

襲撃から翌朝。部屋で眠っていたチナツは目を覚ました。
霞む視界に見えるのは白熱電球が発する淡いベージュと太陽光に照らされた天井だった。右手で目をこする、目が少し腫れている気がした。
チナツは首だけ動かすと机に向かって何か書物をしている白衣を着た銀縁眼鏡をつけた男が視界に入る。
その様子を横目で察した男はこちらを向く。
「おはようございます、よく眠れましたか？」
男は朗らかに笑いながら言う。確かこいつは昨日、屋上で私を助けた得体のしれない男。ただ、ココ・ヘクマティアルの仲間だということはチナツにもわかった。
「…私を、どうする気だ。」
昨日はこの男の剣幕に負けて泣き出してしまったが今は違う。助けた恩義に何か漬けこまれるかもしれないとチナツは思った。こいつもあの女の手下だ、何をされるかわかったものではない。
「まぁまぁ、とりあえず、お水どうぞ。」
机においてあるミネラルウォーターが入ったペットボトルが差し出される。チナツは体を起こしそれを受け取る、見たところ未開封だ。男も自分用のものを取り出しフタを開けて飲み始める。その様子を見たチナツも同じようにフタを開けミネラルウォーターを飲む。ミネラルウォーターが喉を潤す。昨日、頬を流れた涙で失った水分を取り戻したような気がした。
「いまは8時半です。少し遅いですが朝食を食べましょう。あ、その前にシャワーを浴びますか？」
男は私が何かを言おうとする前に話しかける。これでは相手のペースに乗せられてしまう。
「…あんたもあの女の手下だろ。私をどうする気だ。」
「どうもしませんよ。今は完全に私の独断で動いています。」
「このままブタ箱送りか。それとも、どっかに私を売り飛ばすんだ

ろ。」
「そんなことは絶対にしません。絶対に。」
男の表情が真剣な顔つきになる。少しだけその顔が恐かった。
「あぁ、自己紹介が遅れました。私は東野達、医師です。
ドクターと呼んでいただけると嬉しいです。」
「…医者ぁ？」
チナツは眉を寄せる。なぜ医者があの女の手下にいるんだと思った、全員軍やら警察が出身だと聞いていたのだ。こんなひ弱そうな医者なら簡単にここを飛び出せるとも思った。
「そうです、医者です。専門は内科、外科、循環器科です！」
男は人差し指を立てながらフフンと胸を張らんばかりの様子で言った。男は手を下ろすと優しい表情で話しかける。
「朝食、先に食べましょう。」
調子が狂う。この男の話には脈絡がないように感じられる。前の言葉と後ろの言葉に繋がりがない、話題がいきなり飛ぶ。なんだか聞いてると少し疲れるてしまう。
ドクターは机の上に置いてあったサンドイッチが乗った皿を渡してくる。チーズとハムが挟んであるのが一つ、レタスとスライストマト、スライスしたゆで卵が挟んであるものが一つだった。チナツはそれを受け取らない。さっきの水は未開封だったがこっちには何が仕掛けてあるかわからない。
「いらない。食べたくない。」
「どうしました？何か嫌いなものでも？」
ドクターは首を傾げなら問いかける。
「いらないって！」
チナツは声を荒ら上げ言う。
ドクターは少し困った顔をして皿を机の上に戻す。そして一頻り考えると言ったら。
「大丈夫、何も入っていません。これホテルのルームサービスですから。」
そう言うとチーズハムサンドを半分に千切り、片方を自分の口に運

ぶ。
「うん、おいひいですね～。」
首をうんうんと縦に振りながらサンドイッチを食べた
「口に物入れながらしゃべるなよ…みっともない…」
チナツは薄目でその様子を見ながら言う。
この男が自ら口に運んだということは大丈夫なのだろうか。チナツはチーズハムサンドの片方を手に取り口に入れる。何の変哲もないチーズハムサンドの味、おいしい。チナツはもう一口を口に入れる。そういえば昨日から何も食べてないことを思い出した。食べる気力さえなかったのだ。
「じゃあ、もう一つはここに置いて起きますね。シャワーとお手洗いは入口の扉の手前です。
私は扉の前にいますので、何かあったら言ってください。」
ドクターは皿を机の上に置く。そして本とノートとペン持ち、椅子を持ち上げて扉の方へ向かう。こちらはからは直接見えなくなった。
「変なやつ…」
チナツは最初のサンドイッチを食べ終わるともう一つへ手を伸ばす。さすがに毒やら何やらの話はもうないだろうと思った。口に入れると野菜のみずみずしさが口の中に広がる。スライスゆで卵はほんの少しだけ半熟になっておりパサパサ感がなく食べやすい。こちらもおいしかった。
２つ目を食べ終わるとミネラルウォーターを飲む。

１５分ほど経ち体がベタつくのが気になった、シャワーを浴びたい。そこまで清潔さに過敏な方ではないが前にかいた汗が皮膚に張り付いているような感覚だ。あの男の画策を暴くのは少しあとにするか、従順なふりをして油断させるのだ。
そう考えたチナツは東野を呼ぶ。
「おい、医者。」
「はいはい、何でしょう。」
扉の方からドクターが現れる。

「シャワーを浴びさせろ。」
「ええ、どうぞどうぞ。タオルや着替えは中に用意してあります。着替えはルームウェアの様な楽なものです。
今着ている服は後でクリーニングに出しますから適当に置いておいてください。」
「わかった。」
どこまでも用意周到なやつだ。チナツはベッドから降りシャワールームの方へ向かう。入口の前にはドクターが座っている椅子が置かれていた。それを確認するとチナツはシャワールームに入る。
学生を脱ぎ、下着を脱ぐ。脱いだものはランドリーバスケットがあったのでそこに入れておいた。
ふと鏡を見る。目の周りが赤く腫れている、髪も油分でベトベト、テカっている。首周りはなにかのススで少し黒くなっている。肩が少し赤くなっている、昨日倒れたときに軽く打ったのだろう。
殺し屋をやっていたのに傷一つない体、体型もスレンダーで胸もＩＤくらいはある、少しだけ自慢にしている。
もし学校に行ってたらボーイフレンドの一人でもいたんだろうか。
チナツは両腕で自分の体を抱く。そしてため息を付いた。
「私、なんで、こんな風になっちゃったんだろう。」
そして腕をだらんと下げると浴槽の中に入り、シャワーを浴びる。ぬるめのシャワーを浴びるのがお気に入りだ。ヘアシャンプーで髪を洗う、そして体を洗い、顔を洗う。
身体が洗われ、心も洗われる。シャワーを浴びる時にはどこからともなく少し憂鬱な気分になる。そしてそれを掻き消すために目をつぶり頭から流れる水をかぶり続ける。
シャワーヘッドから流れ出る水が浴槽の底に当たり連続的に音を出す。この音を聞くと心が安らぐ気がする。
１分程シャワーに当たり続けた後、お湯を止め浴槽から出る。バスタオルがかけてあるのでそれで身体と髪を拭く。
洗面台の横の棚の上に服と下着が置いてあったのでそれを身につける。シンプルな白いブラとショーツ、水色のゆったり目なＴシャツ

とベージュの七歩丈のパンツ、本当に部屋着だ。
「というかなんで下着サイズ知ってんだ…」
チナツは服を着たあとに思った。
服を着たらドライヤーで髪を乾かす。腰にかかる程の長髪ではないが、しっかり乾かすのには１０分くらいの時間がかかる。生乾きは嫌だ。
「ふぅ…」
髪を乾かし終えた。
すっきりした、そう思った。チナツはシャワールームから出る。
扉の前の椅子に座っているドクターは本を読んでいた。
チナツに気づいたドクターは顔を上げ何も何も言わず微笑むとまた本に目を落とす。
チナツはその様子を見て言う。
「ベッドに戻ればいいんだな。」
「ええ、そうしましょう。」
ドクターは顔を上げ言う。
「ふん…」
おとなしくベッドに戻る。
ずっと寝転がるのは腰が痛くなるので１つの枕をクッション代わりに背中に挟み壁に寄りかかるようにする。
横を見ると窓から外の景色が見える。
ビル、青空、遠くの山、浮かぶ雲、それぞれがありありと目に映る。
（あぁ、今まで下ばっかり見て歩いていたから。こういう景色をゆっくり見るのは久しぶりかも。）
しばらく景色を眺めていた。外から聞こえる少しばかりの雑踏の音、部屋の空調の単調な音、それ以外は何も聞こえない。ただ、時間が流れる。認めたくないが快適な空間だ。
（眠い…）
外を眺めていたら眠気が沸き起こった。まだ、朝の１０時前だというのに。満腹になり何もやることがなくただ、ベッドの上で楽にしているだけ、チナツは考えてみたら眠くならなほうが不思議だと思っ

た。
寝ようとしまいと思うほど眠気は大きくなりゆっくりとまぶたが重くなる。
（寝ても大丈夫か…な…？）
チナツは数回、頭を上下させると、ゆっくりと頭がもたげ眠りへとついた。

私は引き金を引き今回のターゲットを撃ち殺した。
「ははっ、楽勝なのだ！」
部屋を出ようと扉に向かう。ドアノブに手を掛けて回そうとするが回らない。
「何だよ、さっきは開いたじゃん！」
私はそのまま扉に蹴りを入れた。扉は勢いよく開きそのまま足をつくと、黒い空間へ身体ごと落ちていった。
落ちていきながら、スーツを着て口が裂けた仮面を付けた男が目の前に見えた。そいつは何も言わずに私をただ見ている。また、扉が見えた、だけど開けるのが怖い。また落ちてしまうのではないか。
仮面の男はただ私をずっと見ている。
膝を抱えうずくまって目を閉じてもまぶたの裏に男がいる。そして私は私を外から眺めている。一人ぼっちだった。仮面の男は首を傾げて目から涙を流していた。
鏡で自分の顔を見るとその後ろから誰かから襲われる気がした。そのままどこかへ連れ去られる気がした。ただ、私が映っているだけなのに。立っているのに足に力が入っていない、下を見ると膝から下がぽっかり無かった。気づくと同時に身体が糸が切れた操り人形の様に崩れ落ちた。
次の扉を開けることができない。ありもしない妄想が頭の中を駆け巡った。
幾多の人間がいる白い部屋の中で椅子に座っていた。周りの人間

は誰も私を見ていなかった。皆同じ方向を向いていた。泣き叫んだって何も変わるわけじゃないけれど、私は泣き叫んだ。「わからない。わからない。もうどうしようもないんだって。前にも後ろにも進めないんだから。」そう叫び扉を開けるとまた黒い空間へ身体が落ちていった。目の前にコンクリートの床が見えた、手を伸ばした。あぁ、このまま地面に激突して私は死ぬんだ。

体がビクンと跳ねチナツは目を覚ました。

はぁ、とため息をつく。

（また、同じ目覚め方…）

いつも見る夢、最終的には地面に激突しそうになりその寸前で目が覚める。そしてあのスーツの男は誰なんだろう、会ったことすらないのに夢に出てくる。寝たというのに気分が悪い。

頭を傾け机の上の置き時計に目をやると午後１２時半過ぎになっていた。

また、ため息をつくと目をつむる。自分の呼吸音、心臓が鼓動する震えを感じた。

「起きましたか？」

ドクターが扉の前の方から出てくる。チナツは目を開け視線だけを動かしドクターの方を見る。ドクターはそのままベッドの方に向かい机の上に置いてあるマグカップにミネラルウォーターを注ぎチナツに差し出す。

「お水をどうぞ。」

チナツは両手でそれを受け取り一口、二口と飲み口を離すと息をつく。ドクターは笑顔でマグカップの方に手を差し向けるとチナツはマグカップを渡した。

「お昼にしたいのですが、その前に血圧だけ測らせてください。」

「あぁ。」

「ありがとうございます。」

ドクターはは机の下のメディカルバックからデジタル血圧計を取り出す。圧迫帯を開きチナツの右腕上腕部に巻きつける。

「少しきつめに巻くので痛かったら言ってください。」
「……」
チナツは何も答えないがドクターは気分良さそうに、今にも鼻歌でも歌い出しそうな感じで手を動かしている。
「はい、じゃあ測定するので楽な姿勢にしてくださいね。」
ドクターはデジタル血圧計の測定ボタンを押すと血圧計がブブブブと音を立てて圧迫帯に空気を送り始める。チナツは目を閉じゆっくりと呼吸している。1分ほどで測定が終わると「もう一度測ります。」また測定ボタンを押し血圧計を測定する。

測定が終わり記録した結果を目を細めながら見ていた東野の表情をチナツは目を瞑っていたので見ることは無かった。

第十四話

東野　達は計測ミスかと思い２度の血圧測定をしたがミスではなかった。

（１回目は上が１６５の下が１０５、心拍数が１０８、２回目が１６７の１０９で１０２…）

血圧測定をするつもりは初めはなかった。だが、コップを渡すときに微かにチナツの手が震えていて、腕と肩に妙に力が入っている様子を東野は見逃さなかった。

（ベットに安静にしていて、しかも、起床すぐにこの血圧は高すぎる…そして高齢者ならまだしも１７才でこの数値は確実に異常値ですね…）

（身体は休めていても精神が休まっていない、常に周りを警戒しているから常時緊張状態に置かれている、ということですか…

よく今まで身体が持っていましたね、何かしら異常を訴えるのが普通なのですが…）

ノートに測定記録を取る。自分の所感も書き込んだ。日本語で書いたので読まれてもチナツには判読は出来ない。

「はい、終わりました」

チナツは何も言わずに目を瞑っている。

「昼食は何がいいですか？大抵のものならこのホテルは出してくれますよ。」

「何でもいい。」

東野の問いかけにチナツは素っ気無く答える。

「そうですか…そしたらサラダとフルーツ、トマトパスタにでもしましょう。」

東野はそう言い部屋の机の上の電話からルームサービスを頼む。不足しがちなビタミン類を補いたいのと、あまり高カロリーなものはベットで横になっているだけのチナツには健康に良くない、大雑把だがカロリーを考え基礎代謝＋αのカロリーを取れれば良いと思っている。

「しばらくしたら来ますから待ちましょう。」
チナツはその声には何も答えない。ただ目を瞑っている。
(薬剤の投与はまだ早いですかね…始めは生活スタイルの改善から、体と頭が通常の環境に適応してくれると嬉しいのですが…)
考えを巡らせる、少なくとも一週間はこの状態を維持して孤独は敵ではないと思わせる、生きることへの欲を溜めさせるのが目的だ。重篤なフラッシュバックや明らかな不眠、下痢や頭痛などの体の不調が出たらの対処の方が良さそうだ。
３０分程経つと扉のノックされルームサービスですという声が聞こえた。東野はチナツに目をやると瞑っていた目を見開き扉の方を睨んでいたのを見た。まだ警戒が解けていないのを改めて確認できた。
「はい、いま出ます。」
東野は立ち上がり扉の方へ行き食事を受け取る。そして机の方へ戻り、食事を置くとチナツの分をトレーに乗せて差し出す。チナツはそれを受け取り太ももらへんに置く。
「食べましょう、いただきます。」
手を合わせそう言うと東野は食事を食べ始める。それを横目で見ていたチナツもサラダから口に運ぶ。サンドイッチの野菜同様みずみずしい食感で少しかかっているバルサミコソースの酸味が食欲を刺激する。そこまで空腹を感じていなかったチナツだが一口食べると意外とお腹が空いていたのがわかった、サラダをまた口に運び咀嚼する。
一方東野はトマトパスタを食べている。カロリーや栄養も考えてトマトパスタにしたが単に東野の好物でもあった。だが、フォークに巻くのが下手で日本人らしくズゾゾと豪快に音を立てて食べてしまう。
それを聞いたチナツが眉間シワを寄せて言う。
「おい、すすって食べるな。行儀が悪いぞ。」
東野はチナツの方を振り向く。唇にトマトソースがついているが気付いていない、

「あっ、あぁ、すみません。日本人の悪い癖ですねー。」
チナツは器用にパスタをフォークに巻きつけパクっと食べ飲み込むと、呆れながら言う。
「…全く、これで本当に医者か…」
「普通の医者ですよ、一応。」
「…フンッ」
チナツは東野から目線を外し食事を食べ始める。
だが、東野はまたズゾゾと音を立ててしまう。外科手術は得意中の得意なのに変なところで不器用な男だ。
チナツは叫ぶ。
「だから、音を立てるな！」
「あっ、あれっ？すみません！」

騒がしい昼食が終わった。あの後、東野は扉のイスの所で食事をした。
13時半、部屋は再度静寂に包まれる。
何もすることがないチナツは枕を背にベットの上で横になり窓の外を見ている。東野は扉の前のイスに座り医学書らしき本を読んでいる。
14時、15時、16時と何も起こらない時間が進む。あるかといえば時々トイレに立つくらいだ。
チナツの頭の中は怒りと不安と安らぎの感情が混ざり合っていた。ここに寝転がりただ外を眺め遠くの雲の動きを見る安らぎ、しかしこうされてるのはココ・ヘクマティアルの意思でなっているかと思うと怒りが湧いてくる、私を飼い慣らそうとしているとしている。そしてこの東野という医者が私の治療らしきしていることについての疑問、自分の独断だというが信用が出来ない。
考えても仕方がないことだが頭の中を考えが走り回る。逃げ出した方がいいのか、このままここにいたほうがいいのか。
時間は過ぎ外は夕暮れの日差しになった。
（復讐はどうしたんだ、私。こいつらの仲間になんてならない、この医

者も誰も彼も信用できない。）
少し薄暗くなった部屋の中でチナツは頭の中で自分を思い出す。こんな奴らに絆されたりしない。
（思い出せチナツ！私は殺し屋、殺し屋　オーケストラだ！）

東野が部屋の明かりを付け、チナツに話しかける。
「１８時半過ぎですけどお腹は空いてますか？まだなら、夕食はもう少し待ちますよ。」
「食べる。」
チナツはその問いに答える。
「わかりました、うーん、夕食はリゾットでもどうでしょう。お肉も食べて栄養をつけましょう。」
「あぁ」
また３０分程で食事が部屋に運ばれてくる、リゾットと小さいサラダ、焼いた牛肉だ。昼と同じように東野からチナツに食事が渡され、二人同時に食べ始める。
チナツは少し急いだ様子で食事をしている、東野の方をチナツは見るが特に変わった様子は無くのほほんと実に美味しそうに牛肉を食べている。
食事をしおえルームサービスが食器を受け取ったのが２０時前。チナツは就寝の時間を待っていた。
そして２２時になると東野が出てきて「電気を消しますね、おやすみなさい。」と言い部屋が暗くなる。扉の方の明かりはダウンライトがついていた。
（２時くらいまで待とう、さすがに医者といえど寝るはずだ。）
チナツはそう思い目を閉じる。寝ないように気をつけなが時々開け、音を聞き東野の様子を伺う。
銃はどこにあるだろう部屋の中を見回す。外からの光に照らされて目を凝らせば様子は見える。
机の下のメディカルバックを見つけ、その中に入っているかもしれないと思い後で見ることにした。銃でなくても刃物の類があるかも

しれない。武器が何もなかったとしても奴らの誰かから奪うそれかどっかから適当に調達すればいい。
（医者…あんたは命を助けてもらった礼だ、殺さないでおいてやる。）

午前２時０７分、チナツは起きていた。
ゆっくりと掛け布団をどけて、足を下ろし靴を履く。
扉の方にいる東野の方を見ると、イスに座って上半身を壁に預け頭を下に落とし寝ている様子だった。
すぐ横にあるメディカルバックに手を伸ばし音を立てないようサイドジッパーの袋の所に手のひらを置く。
硬い感触はない、何か布の様な柔らかい物のようだ。反対側のサイドジッパー部も同じように探る。こちらも硬い感触は無い。
上面中央部にあるコの字になっている部分を開けようとゆっくりとジッパーを引っ張る。ジ、ジジ、ジと音が出たが小さい音だ。上面部を開くと中には厚手のビニール容器に手術器具のような物、ゴム手袋や包帯、大きめのガーゼや注射器、何かの薬品が数種類入っていた。その他にチナツが何に使うかわからない様なものもある。
（武器になりそうなのがあんまりない…）
少し漁っても小さめの刃物くらいしか見つからなかった。
チナツは袋に入った小さめの刃物、医療用メスをポケットに２本突っ込み、１本は袋から取り出し右手に持つ。
メディカルバックは開けっぱにしてゆっくりと立ち上がり振り返る。まだ、東野は寝ている。
チナツは一歩踏み出す。
（そのまま寝てろよ…）
もう一歩踏み出す。

もう一歩踏み出し足を地面につけようとする。
その時、下に顔を向けていた東野の顔が瞬間的に上に向き目が合う。同時に息を短く吸い込んだ音も聞こえた。
朝、何故かふと目が覚めてすぐに起き上がる。そんな感じだった。

東野は白衣の胸ポケットに入れていたメガネをかける。
「あ、すみませんね～」と小さな声で言いイスを少し引いた。どうやらチナツがトイレに立ったのだと思っているらしい。だが、ダウンライトの暖色光に照らされ立ち止まっているチナツの違和感に東野はすぐ気がついた。
手に何か持っている、そして暗く少しぼやけた視界の中だが自分のメディカルバックが開いていることがわかった。そこから導き出される答えは彼にとってさほど難しい物ではなかった。
逃げる、その可能性を東野は十分に考えていた。
起こるなら初日の夜か2日目くらいまでにとも思っていた。だけども、実際に逃げ出そうとするチナツを見た東野は悲しい気持ちになった。初日だから精神が安定してないのはわかってるし、逃げないよう拘束したら逆効果なのもわかっている。わかっていたことだが己の無力さを痛感し、自分はチナツに寄り添い掬い上げることが出来ないのかと錯覚するような、前の記憶を思い出し心が締め上げられた。
「チナツちゃん…？」
東野は当惑した顔で言う。
「…クッ、なんてタイミングで起きるんだよ…」
眉間にシワを寄せ口角の片方を吊り上げさせたバツの悪い顔をしたチナツが言う。
「そこを通せ、おとなしくしてれば危害は加えない。」
それを聞いた東野は頭を下に向けまぶたを下ろし、息を大きく吸い息を大きく吐く。そして目を開き自分の手のひらを見つめ3回開いたり閉じたりした。
こんな無力感に苛まされている時間などないし、そんな物には価値が無い。前の記憶は前の記憶だ、それは過去で今では無い、今目の前にいる彼女を掬い上げる、それが自分の使命だ。
東野は立ち上がる、いつもの朗らかな微笑を浮かべて。
「医療用メスは切れ味が良いので危険です。不用意に使うと怪我をします、返してください。」

右手を差し出し、チナツの方へ一歩踏み出す。
「こっちに来るな!!」
チナツは叫び右手に持った医療用メスを東野に突き付ける。この男の声が頭の中に入ると安心と恐怖が入り混じった感情になる。
すぐに切り付ければいいとわかっているが体が動かない、切りつけたら自分が危ないという恐怖と切りつけたくないという優しさの心が生まれてしまう。自分のどこからか湧き上がる狂暴性が無くなって自分が壊れてしまうかもしれないとも感じる。
この医者が自分の命を救ったことは奴の勝手だとわかっていても、チナツは東野に一片の優しさを微かに感じていた。
「さぁ。」
東野は一歩踏み出す。
「来るな!!」
チナツは一歩後ずさる。
「大丈夫。」
一歩踏み出す東野。
「やめろ!!やめろッッ!!!!」
チナツは右腕を振りかぶり東野を切り付ける。が、その腕を東野はいとも簡単に左手でチナツの右手首を掴み受け止めた。
「はっ、離せッ!!」
振り解こうと右腕に力を入れるが動かない、予想外に力が強い。
東野は受け止めたチナツの右手首を左手でしっかり掴み、自分の右手をチナツの右手を包むように掴む。
そして両腕で自分の方に医療用メスを近づける。
「離せって!!」
チナツも掴まれていない手で東野の腕を掴み引き剥がそうとする。足は踏ん張るので精一杯だ。
ゆっくりとチナツの手の中の医療用メスを東野は自分の左肩に近づける。
「何を…!!」

「私はあなたの味方だ。よく見ててください。」
そう言い一気にメスを自分の左肩に突き立てる。
白衣と服を容易く貫通し痛みが走る。どうやら刃の部分の８割以上が筋肉に刺さったようだった。刃が刺さっている所から血が出てきて白衣が赤く染まってゆく。
チナツは手を離されて踏ん張っていた反動で尻もちをついた。
「ほら、切れ味がいいでしょう？」
左肩に刺さったメスを一瞥したあとチナツに言う。
「お、お、お前、何を、、、バカじゃないのか!?」
チナツは尻もちをついたまま唖然としている。相手の持っている刃物を掴んでそのまま自分に刺す馬鹿なんて今まで見たことなかった。
「よく言われます。」
東野はしゃがむ。
「本当は１週間くらいは休んで欲しかったのですが、早めに話をしたほうが良さそうですね。」
「あと２日待ってその時に色々話をしましょう、どうですか？」
「…何の話をする。」
「それもその時お話しますよ。」
東野は立ち上がり開けっぱなしのメディカルバックのところまで移動する。
「…ッよっと」
刺さっている医療用メス引き抜き袋に入れる。そして白衣とＴシャツを脱ぎ傷の手当をする。血が溢れてくるが気にも留めず、パット形止血剤を当てがいその上からガーゼを置き包帯で肩全体を器用に巻く。その後Ｔシャツを着る。
「イテテ、結構痛いですね。」
チナツの方に向き言う。
「残りも出してもらえますか？」
それを聞いたチナツは無言でポケットの中にある医療用メスを東野に差し出した。

「ありがとうございます。こんな時間ですから寝ましょう、睡眠は体にとって大切です。」
東野はニッコリと笑いベットに戻るよう促す。
「…狂ってやがる」
チナツは立ち上がり東野に聞こえないような小声でそう呟くとベットに潜り込んだ。

それを見届けた東野も扉の方のイスへ戻り座るとふぅと息をつく。
「それもよく言われます。」
小声で呟くと東野はまぶたを閉じ壁に体を預ける。
傷口から鋭痛がするが我慢して眠りに落ちた。

第十五話

初日から何事もなく3日が経過した。
チナツは逃げ出そうとした夜以前から変わらず、東野とは必要最低限の会話以外をしなかった。
朝起きると前と同じようにチナツの血圧を測る。
（上が１４２の下が９９、心拍数は８８。初日に比べたら下がっていますね、いい傾向です。）
ルームサービスで朝食を注文する。程なくして部屋に朝食が運ばれると二人はそれを食べる。
朝食を食べ終え東野は食器をまとめる。そしてチナツに話しかける。
「さて、どこからお話しましょうか。」
チナツは何も言わずに東野の方を見つめている。
「そういえばチナツちゃんの本名とか歳を聞いてなかったですね、あとは出身国とかも。私と同じ東洋人らしい顔つきですがそちらの出身ですか？」
この話題なら不自然ではないだろうと思い聞く、それと東野はさりげなくココからもらった情報の確認をしようとした。
「チナツ・ヴィアダーナ、今は１７で今年で１８歳、生まれはイタリア。」
「チナツというと日本人的な名前なのですが、親類に日本人の方がいたのでしょうか？」
「おじいちゃんが日本人だったらしい。私が小さい頃に死んじゃって本当かどうかしらないけど…」
「そうですか…すみません…」
どうやらココの情報はあっている。
「とういうか、このくらいのことならもう調べてあるだろう？何でわざわざ聞くんだ。」
さすがの鋭い指摘だ。この子は頭の回転が速いし自頭も良いと感じれる。それに加え勘も冴えている。学校ではきっと優秀だったに

違いない。
　東野はその質問に答える。
「半分正解半分不正解といったところでしょうか。殺し屋としての素性はわかってますが、チナツちゃんあなた自身の情報は無いのでそれで聞いています。」
「なんだそれ…」
　チナツは眉間にシワを寄せ呆れた顔をする。
「他にも質問があればお答えしますよ。」
「今のとこは無い。」
「そしたら私からお話することがあります。」
　東野は椅子を引き座り直すとチナツの方へ体を向ける。
「誤魔化しは効かなさそうですから率直に言いましょう。私はあなたを治療する、そしてその後私達の仲間の一人になってもらいたいのです。」
　それを聞いたチナツの顔に怒りの表情が現れる。眉間にシワが寄り、顎を引きこちらを下から見上げるように睨む。
「…やっぱりな、お前もあの女から命令されてやってるんだ！何が私の独断ですだッ!!ふざけるな!!」
　チナツはベッドから身を乗り出し東野の白衣を掴み叫ぶ。
　東野は白衣を掴んでるチナツの手を下ろすようにゆっくりとなだめる。
「まぁまぁ、落ち着いて。私の言い方が悪かったです。」
「治療の結果次第で私が判断をする予定です。仲間になれなそうなら安全な国で新しい生活をするとか、名前を変えてイタリアに戻るとかそういう感じになると思います。」
「私はあの女を、師匠を殺した奴を殺すんだ！情けはいらない!!治療なんて、私はどこもおかしくないッ!!」
　手を強く握り震わせながら東野を睨みつけ叫ぶ。呼吸が荒く浅く速くなる。息を吸い込み吐くまでのテンポが上がってくる。
「大きく息を吸って吐いて。」
「大丈夫、私の呼吸に合わせて。」

東野はしっかりとチナツの目を見てゆっくりと話す。吸って吐いてと語りかけるように言う。荒かった呼吸も徐々に戻ってくる。
２分ほど深呼吸するとチナツも落ち着いたのか白衣を掴んでいた手を離す。ダラリと腕を下ろすと顔を下に向けうつむく。
「…どうして…私が…こんな目にあうの……」
チナツの肩が震えると顔を手で覆う。その後に嗚咽のような声と鼻をすする音が聞こえ泣いているとわかった。チナツの声にならない声が、空調の音だけが聞こえた部屋に入り交じる。
東野は何も言わず何もせずただそれを見ていた。
ＰＴＳＤ症状の１つ情緒不安定。感情制御がしにくくなり怒る泣く、と落ち着きがなくなる、不安感、疎外感が急激に襲いかかる。また、それの移り変わりが早い。
それと、人をは泣くとリラックスできる。泣く事自体が良くないことと捉えられがちだが、意外とそうではない。副交感神経が刺激され泣くことによって落ち着きを取り戻す効果もあり、人の前で泣くというのはその人を信頼しているということの現れでもある。
チナツは腕で目を拭ったり鼻を押さえたりする、目からはまだ涙が流れる。東野は机の上においてあるティッシュ箱をそっとベッドの上に持ってくる。
チナツは目を赤く腫らし口をつぐんだ顔で東野を一瞥するとティッシュを2、3枚とり軽く鼻をかむ。また2、3枚取ると目を拭く。
ひとしきり泣くとチナツは落ち着きを取り戻した。
「大丈夫ですか？お水どうぞ。」
チナツはミネラルウォーターを受け取り一口飲むと、東野の問いに頷きで答えた。
「…大丈夫、少しは落ち着いた。」
「私の話の切り口が良くなかったですね。こちらこそすみません。」
東野はまた椅子を座り直す。話を切り替えるときの癖だ。
「最初の話です、チナツちゃんの心を治療します。それから私達の仲間になるか、それとも新しい人生を送るか考えましょう。」

「さっきも言ったけど、私はどこもおかしくない。それと心を治療すると言われてもピンとこない。」
チナツは東野の顔を見つめて言う。
「それを認識するところから始めましょう。」
東野も机に置いてあったミネラルウォーターを飲む。外の日が直接当たっていたので生温るくなっていた。
「チナツちゃんから話を聞いてないのでまだわかりませんが、チナツちゃんの歳では中々に想像し得ないことを既にしてます。他に感情の起伏が極端に激しい。あとこれを見てください。」
東野は血圧の記録をチナツに見せる。
「これが初日の値、上が１６５の下が１０５、心拍数は１０５回です。２日目が１６０の１０４の９９、３日目が１５２の１０２の９８、それで今日が１４４の９９の８８です。」
「…何かおかしいのか？」
「では、試しに私の血圧を今測ってみましょう。」
東野は血圧計のバンドを腕に巻くとスイッチを入れる。ブブブと聞き慣れた音がたち計測が始まる、そして終わる。
「上が１２９の下が８５、心拍数は７２回、これが少し高いですが安静時の通常ぐらいです。チナツちゃんは毎朝測っていますか安静時にこの血圧は異常値です。高齢者ならありえますが１７歳では余程の緊張状態か激しい運動後以外は考えられないです。」
東野はバンドを外しながら話を続ける。
「安静時にこの血圧ということは常に何かしらに対して緊張している。正確には警戒していると言ったほうがいいですね。心当たりはありませんか？」
「まぁ、ある…」
チナツは伏し目がちにそれを言う。こうして見るとまさか殺し屋をしていた少女には見えず、か弱い年頃の女の子そのままだ。
「なるほど。それを聞けただけでもありがたいです。」
血圧計を片付けて、先程チナツに見せたノートにそのことを書き込む。

「心の治療というのは身体的苦痛を引き起こすことがよくあります。頭痛、腹痛、下痢、フラッシュバック…しかしそれよりも辛いのは治療そのものです、自分の思い出したくない記憶を整理し自分の心と折り合いをつけて克服してゆく。私はチナツちゃんの記憶、また無意識の整理の手伝いをします。

どうでしょう？」

東野が問いかけるがすぐには答えは帰ってこなかった。チナツは彼女自身の中での葛藤、不安があるのだろう。自分はどうなるのか、激しい動乱の後に心の余裕が出来てしまうと考えてしまうこと。私は許されるのだろうかという、罪の意識。殺し屋として生きてきたのに普通に戻ってもいいのだろうか。

チナツは自分の思いをそのまま東野へ言う。

「…私は許されるのか？」

その問いに東野は悠然と答えた。

「神が許さなくても私が許しましょう。」

目を丸くしたチナツは続けざまに言う。

「東野…お前はいったい何なんだ…？」

東野はフフと笑い答える。

「そこら辺にいるただのお人好しの凡人医者ですよ。」

第十六話

チナツは治療に前向きになってくれた。
心の治療は患者と医者の双方がお互いに歩み寄り、課題を克服しようという意志がなければ治療は難しいと理解してくれたらしく東野もその想いに答えようとしていた。
「いきなりステージの人が倒れて…私はお母さんが覆いかぶさってくれて…私は、運良く生き残った…」
「運良くですか、それはお母さんがチナツちゃんを助けてくれたと考えられませんか？」
「まぁ、そうもいえるけど…私は本当はあそこで死んでたんだ…師匠についてかなかったら今ここに私はいない。」
「あなたは生きてますからご安心を。そうしたら…何故チナツちゃんは師匠についていったのでしょう？」
「…わからない、でも、師匠を撃ったときにいい音だって褒められて…嬉しかったのか…？」
「では、その時の状況を今のチナツちゃんとして思い出して、何か別の見方や考えは浮かんでこないでしょうか？」
「東野、お前、難しいことを言うな。ちょっと考える…」
悪くない、それが東野の所感だ。
治療に対し顔を向け素直に受けっとてくれるのは治療を施す側にとっては非常に良い事であり、ありがたい。
ベットにいるチナツは目を閉じ思考を巡らせているようだ。その間に東野はミネラルウォーターを飲む。
「そうだな、嬉しかった…いや、怖かったのか？だって、自分を撃った相手を褒めるなんて…いや、私もやってた…
なんでかわからないけど、師匠について行けば死なずに済むと感じた。」
「自分の両親を殺した相手にですか？チナツちゃんは明らかに被害者ですよね？」
「被害者…？私が？」

「ええ、立派な被害者です。無差別殺人の現場にいたのですから、そう受け取れそうでしょうか。」
「……」
　チナツは少し首をかしげ考える。
「ん…確かに。そう受け取れるし、確かにそうだ。」
　うなずき東野の方に向き直る。
「そうですね、いいでしょう。」
　腕時計を見ると話を始めてから４０分程経っていた。時間は１２時３０分に差し掛かっている。
「今日はこの辺にしましょう。また、明日お話をしましょうね。ゆっくりで問題ないです、少しずつ考えていきましょう。」

　東野は机に向かい自分の所感をノートに書き込む。
（経過良好、ＣＴＰ（認知療法）―Ｃによるスタックポイントの解決に向かう。患者と医師の治癒への意識共有は高く、予想より遥かに治療速度が早い。だが、早急な回復は再発の危険性も高いため、セッション数を増やし期間をあえて長くすることを考慮しなければならない、っと…）
「さてと、もういい時間ですから昼食にしますか。今日は何にしますか？」
「うーん、ちょっと疲れたから軽めのものでいい。あぁ、パニーニがいいな。私あれ好きなんだ。」
「パニーニ…これですか？このサンドイッチみたいなやつですよね？」
　東野はルームサービスの冊子にある写真をチナツに見せる。サンドイッチやトースト、ミニバーガーのような軽食の欄の並びにあった。
　その言葉を聞くと食い気味にチナツが言う。
「パニーニとサンドイッチは違う。広い意味ではサンドイッチだけど、イタリアでは調味料は使わず具材だけを挟んで、それをパニーニと言うんだ。」
「へぇ、そうなんですね。」

「このシーフドパニーニは美味しそうだな、私はこれにする。」
「そうしたら、私はこっちのトマトレタスの普通のやつにしてみましょう。」

東野はパタンと冊子を閉じ机の上へ置く。食事を食べたい、美味しそうと思えるのも心の余裕や安寧があってこそ。心のなかで良かったと思いつつ内線電話に手をかけようとした時に部屋の扉がノックされた。

東野は電話に伸ばした手を引っ込めドアの方を向く。
「ルームサービスです。昼食をお持ちしましたぁ。」

扉の外から男の声が聞こえた。

東野とチナツは顔を見合わせた。チナツの顔は柔らかさを失っており、その目は東野の顔ではなくその奥の扉に焦点が合い睨みつけていた。

まだ頼んでない昼食が来るなど当たり前におかしい。ここのホテルはルームサービスを頼んでから、昼食ならば大体３０分弱で運んできてくれる。

東野は音を立てないようにゆっくりと扉まで近づき、扉にあるドアスコープで外の様子を確認する。しかし、手か指でふさがれているのか真っ暗だった。
「昼食をお持ちしましたぁ、お客様ぁ??」

ドンドンドンと扉をノックする音が激しくなる。

東野はチナツの元へ戻り小声で話しかける。
「チナツちゃん、どうやら不審な奴が――」
「わかってる、多分殺し屋だ。」
「元殺し屋に指し向ける殺し屋ですか…」
「東野、お前は知らなくて当然だな。依頼を請け負った殺し屋が他の殺し屋に狙われることがある、主にクライアントが情報漏洩を恐れて関係したやつらを殺すんだ。依頼を失敗しても成功してもあること。」

チナツはベットから降り靴をはく。

「今までも何回かあった、全員殺したけど。ついでに依頼主も。」
靴をトントンとはき直したあと、軽くジャンプをする。
「ちょっと筋肉が落ちたかな…？ま、大丈夫か。」
東野は少し呆気に取られていたが、チナツが何かしらの準備を始めたのを見て我に返る。
「チナツちゃん、あなたはまだＰＴＳＤの治療中です、ですから。」
「今、東野だけでこの危機を脱する方法は無い、だろう？」
チナツは東野の言葉を遮る。チナツが言ったことは東野自身も理解している。
「ええ、そのとおりです。しかしながら、チナツちゃんを危険に晒すわけにもいかないのです。私はあなたと約束した、治療すると、助けると。」
「酷い矛盾だ。」
「東野、お前はバカだな。」
チナツは、フッと息を漏らすように笑い東野の顔を見る。
扉が激しく叩かれる。ルームサービスですとの声もなく、もはや正体を隠す気はないらしい。
チナツが笑いながら言ったことを聞くと東野も笑いながら言う。
「よく言われます。」
「今は私がお前を助けてやる。」
「そうなったら話は別ですね、治療は一時中断といきましょう。」
東野は内線電話の受話器を手に取りココ達がいる大部屋へダイヤルする。ココには予め、内線がかかってきてこちらが何も応答しなければ緊急事態なので駆けつけてきてほしいとお願いした。しかし、過ごしている棟も階も違うので応援が来るまでは時間がかかる。
「こちらから積極的に仕掛けるのは危険でしょう。ドアを蹴破られて、迎撃といった形がいいと思います。」
「うん、賛成。」
東野はメディカルバックをあさりチナツが前に持ち出した医療用メスを取り出し渡す。
「銃器はありませんから武器はこれくらいですね。」

「なにもないよりマシ。」
「あとは…」
消毒用アルコール、目潰しくらいにはなるだろう。局部麻酔薬、ガーゼ、止血帯、止血剤は念の為いくつかポケットに突っ込む。ついでに簡易縫合キットと持針器も入れる。
「少なくとも相手は2人以上いる、油断するな。」
「バスルームに隠れるんだ。扉の前には立つなよ。」
「わかりました。」
二人がベットが置いてある部屋からバスルームの方へ静かに移動し扉を閉める。
しばらくすると扉をノックする音が止み、なにか話をする声が2枚の扉越しにかすかに聞こえた。
「やっぱり、2人以上いるな奴らがここのドアを開けたら――――」
チナツがそう言いかけた途端、銃声がする。そして、ドアを蹴り破ろうとしているのかドカンドカンと鈍い音が続く。
「ショットガンだ。蝶番か鍵を壊して入ってくるぞ。多分、銃声的にベネリM2。」
「銃声だけでわかるんですね…」
「まあね。東野、お前銃は撃てるのか?」
「撃てます、使い方もわかります。でも、腕にはあまり期待しないでください。」
「大丈夫、期待してない。」
そんな軽口を叩いているとドアの鍵が破壊され扉がギィーと音を立てながら開く。
二人が目を合わせるとチナツが口の前で人差し指を立て「静かにしろ」と東野に合図する。それを見た東野も頷き壁を背に様子を伺う。
(あぁ??いねぇじゃねぇかよ。本当にこの部屋であってんのか?)
(間違いねぇよ、ここであってる。探すぞ。)
(探すったってこんなクソ狭い部屋のどこにいるってんだ。
おーい、殺し屋チャーン出ておいで~楽に死なせてやるからよ
ギャハハハハハ!!!)

扉越しに男二人が会話する声が聞こえ、クローゼットの扉を開け締めする音も聞こえた。

（いねえじゃねえか!!!とっとと出てこいや!!!コラァ!!!）

男はまたベネリＭ２をどこかしらに向けて撃った。

（うるせぇ。喚くな。）

ショットガンを持っていないと思われる方の男が入り口に近づく足音が聞こえ、バスルームの扉の前で止まる。

そして、バスルームの扉のノブに手を掛け、回し扉を押し、開く。

チナツと東野はドアの影になる場所にいるので男からは丁度良く見えていない。

そして男がバスルームに反対側に入り振り向いた途端

チナツがその目を見開き、有無を言わさずメスを喉元めがけ突き刺した後に横に薙ぎ払い頸動脈を切り裂く、声を出されないように左手で口を抑える。そして倒れて音が出ないように左手でしっかりと支えてる。男の首元からは鮮血が噴き出している。

「…ッコッフ…!!ホッフ…!!」

男は一瞬何が起こったのかわからず声を上げる。右手に持つＵＺＩを上げ引き金を引こうとするも大量出血により意識を失い腕がダランと下り全身の力が抜ける。

（頸動脈からの動脈性出血…噴出性だ…しかも位置的に総頸動脈にが切れている…

これは…助からない…）

東野はチナツが精確に急所を狙い男を音もなく殺したことに恐怖した。

チナツは鮮血に染まった左手をゆっくりと下ろし、男を床に下ろすと右手でＵＺＩを持つ。

そして、扉の外を指差し東野にもう一人が来ると合図を送る。

（おい、どうした。誰もいねぇだろ。ッたく、ふざけんじゃねぇ。）

もう一人の男がバスルームの方に向かう。

「おい、返事しろ。」
空いた扉を覗くと仲間が血溜まりの中に倒れているのとチナツが見える。
「テメェ!!やりやがっ――――」
男が吠えべネリＭ２を撃つのより早くチナツはＵＺＩで相手の右肩辺りを撃ち抜く。男が怯んでいる間に東野が扉の後ろから飛び出たべネリＭ２を蹴り飛ばし、左手で男の右胸辺りを押し右手は男の左膝裏を取りそのまま引き上げ朽木倒しの要領で男を押し倒す。それほど大柄ではないので割りと簡単に倒れてくれた。
倒れた男の上に乗り素早く腕を取ると腕緘で男を制する。
「暴れると肘が外れますよ。」
「この野郎ッッ!!!離せッ!!痛えんだよ!!!!」
「離しません。」
と言うと東野はさらに肘を極める。
「イダダダダダダダッッ!!!!」
「東野やりすぎだ。話ができない。」
「あ、すみません。」
チナツはＵＺＩを殺し屋の男に向け質問を始める。
「おい、誰に雇われた。仲間はこの男だけか。」
「ハッ、そんなこと言うと思ってんのか。」
それを聞いたチナツは何も言わず問答無用で殺し屋の左太ももをＵＺＩで撃つ。
（危ないっ……!!）
殺し屋の上半身に覆いかぶさるように腕を極めているが弾丸が割りと近くを通ったので東野はちょっとびっくりした。
「もう一回やるか？」
「ふざけんじゃねぇ!!!!!
お前らが依頼の殺し屋オーケストラかッ！オラッ!!離せコラッッ!!!!」
男はもがくが東野が体重をかけ上半身を制し肘も極めているので脚だけをジタバタさせている。

「生きのイイ奴だな。」
「もう一度聞く、雇い主は誰だ。他に仲間はいるのか。」
男は数秒の沈黙の後、口を開く。
「オラッ、殺れよ!!そんな根性もねぇのかお嬢ちゃ――――」
その言葉を言い終える前にチナツは男の腹に向けてＵＺＩをフルオート連射し撃ち切った。
（危ないですって……!!）
東野は顔に多少熱を感じそう思った。
床に伏している男はうめき声を上げながら身体を震わせる。
そして１０秒も経たないうちに力が抜け腕が東野の手のひらからスルリと抜けた。
「チ、チナツちゃん…何もそこまで…」
「甘ったれたことを言うな東野、こいつから情報は得られない。こいつを殺さないと私達が危ないぞ。お前ならわかってるだろう？」
そこ言葉に押し黙った。わかっていたとしてと自分の良心と医師という立場がそうさせなかった。人と自分を救うには人を殺める覚悟も必要なのはわかっていた。
が、積極的にそれをするのは心が拒むのだ。
「ええ、わかっていますが…」
「わかっているなら動け。
東野、お前は私を命を懸けで守ったろう。
同じことだよ。」
「そうでしょうか…」
東野が死んだ男を見つめる顔を見たチナツは少し笑いながら言う。
「フフッ、お前意外と繊細だな。もっと図太い奴だと思ってた。」
「人の命を救う医者ですから、あまりこういうことは好きではありません。
けど、チナツちゃんは救いましょう。」
東野は立ち上がる。
「私がそのサブマシンガンを持ちましょう。チナツちゃんはこの人の

ショットガンがいいと思います。
　ショットガン撃ったことないので、私。」
「うん、そうしよう。」
　チナツはそう言うと男の装備を漁り始める。
「おっ、いい物もってるじゃないか。」
　チナツはベネリＭ２を持ち男が身につけていたシェルホルダーを外し自分につける。腰に挿していたＭ９もホルダーごと取り身につける。
　東野も浴室に倒れた男が持っていた予備弾倉を取ると白衣のポケットに突っ込む。それ以外は特に無かった。
　部屋の奥に戻りメディカルバックを肩に担ぎ、バックが背中に密着するようベルトを短く調節し走っても揺れないようにした。
「私が予想するに懸賞金みたいな感じで依頼をバラ撒いたんだろうな。私を殺したやつに報酬を払うって感じに。
　部屋から出たらまた殺し屋が来るかもしれないから気をつけろ。」
「わかりました。
　レームさんたちと合流するのを優先したいですね。ここから別棟でどういうルートで来るかわかりませんがこちらから出来る限り近付きましょう。」
「あのおっさんか…まぁいい…
　ちゃんと援護しろよ。」
「得意ですよ、そういうの。」
　互いに部屋の外を出るのに左右を確認し敵はいないと合図を出す。
「別棟はこちらです、行きましょう。」
「うん、わかった。」
　二人は血の海になっている部屋を後にし小走りになりながらエレベーターラウンジへと向かった。